
(前世の) 父さん母さん。息子はこっちでも元気にやっています

アベレージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（前世の）父さん母さん。息子はこっちでも元気にやっています

【Nコード】

N30720

【作者名】

アベレージ

【あらすじ】

別に人生に絶望したり退屈していたわけではなかったし、トラツクにひかれたとか、通り魔に刺されたなんてこともなく、階段から足をすべらして頭をぶつけたのが死因だったのだと思う。今思えば我がことながらあっけない最期だった。

暗転、そして気がつけば俺は（今世の）母に抱かれていたのだった。

どのような運命の悪戯か、少しだけ人より特殊な事情を抱えた少年

の、日常の物語。

主人公最強物ではありません。
作者の処女作です。

ご意見・ご感想お待ちしております。

本編完結しました。

プロローグ(前書き)

初投稿です。

それではどうぞ。

プロローグ

別に人生に絶望したり退屈していたわけではなかったし、トラックにひかれたとか、通り魔に刺されたなんてこともなく。なんてことはない、ただ階段から足をすべらして頭をぶつけたのが死因だったのだ。

思えば我がことながらあつけない最期だったのではないだろうか。

暗転、そして気がつけば俺は（今世の）母に抱かれていたのだった。

彼がその身に持った知識から転生という言葉を連想するのにそれほど時間はかからなかった。すわっ、ここはいつたいどこの世界だっ！俺の中の力はいつ解き放たれるのだろうか？なんて痛いことを考えていた時期も小学校に入学するころには、やっぱ実際そんなファンタジーなことあるわけないよなーと自分のうん十年分の記憶のことは棚の上に投げっぱなしジャーマンのごとく放り投げて考えるようになっていた。

むしろ自分の家族がファンタジー過ぎて、彼の常識が音を立てて形を変形させていったのもそんな考えに至る要因だったのかもしれない。

そんな彼の名前は神山 かみやま 世界 せかい。

違う物語でなら奇想天外な能力の一つや二つは持っているような大層な名前だが、彼は周りと比べてあまりにも普通であった。勇者でも魔王でも、ましてや突然超能力が目覚めたり、異世界に召喚されるなんてこともなかった。

両親ともに美男美女。大学生の長女は艶々しい色気ドパドパ系の美女、高校生の次女はスーツを着せたら感涙系の凛々しい美少女で、三女は大きなお友達が一目拝めばむせび泣き、二目拝めば即死級の天使系美幼女である。

しかして、中学生である長男の神山 世界はそんな一家の中において、ただただ平凡な少年であった。
THE平凡である。

これは、そんな彼の普通すぎる日常の物語である。

神山世界の一日？

世界の朝は戦争である。こう書くとまるで人類規模の話のようだがそんなことはなく、これは神山家の長男の朝の光景についての話なしである。

現在、神山家の両親は、父の単身赴任に母がついていったためほとんど家にはいない。

母曰く、英雄ひでおさんのお世話をするのが私の存在理由なのです、合言葉は朝の世話から夜の世話までですつ、とか。

実に健気な母であるのだが子供ほったらかして旦那の世話を優先するとか、正直普通ならグレしているところだ。いやさ、幸か不幸か、この家には普通の子はいなかったので何も問題はなかったのだが。

そういうわけで残ったのは子供四人だけということと諸々の事情を経た結果、長男がご飯係に拝命される運びとなったのである。世界八歳のできごとであった。

「ふむ、我ながら今日も見事な朝食だな。これだけあれば満足してくれるだろ」

と一人台所で呟いているのは神山家長男、神山 世界。

必要にかられて覚え始めた料理もいつしか趣味へと転じ、幼き身でありながらその腕前はいつのまにか天元突破していたという肩書き

を持つ中学二年生である。

せっせかと食卓に彩り豊かな食事を並べた彼は、身につけていた花柄エプロンを外し椅子にひっかける。

冷めないうちに起こさねばと、いつものように。

彼は一人台所を抜け階段をあがるのだった。

着いた場所は三階にある一室、現在大学四回生の長女の部屋の前である。

「謳歌姉ー、入るぞー」

と返事がないのは分かっているものの、一応形だけノックしたあとそのまま中へと入る。

勝手に踏み込んでしまっただけは何が起きるかわからないのだ、この部屋は。

「ううむ、相変わらず凄い存在感だなー」

そういつて彼が目をつけた物は、十五畳もある部屋の約三分の一を占めるサンドバック、というよりもはや壁といっても過言でないそれ。

なんでもどこかの国のすごい技術を使ったすごい衝撃吸収材を使用しているらしく（どうやって調達してきたのかは不明である）、準備運動くらいにはなるんだけどそれ以上はねえ？、と笑顔で語っ

たとか。

いやいや聞いてないから。おまえはいつたこの世紀末戦士だと心の中でツツコンだのは既に良い思い出である。

などと回想しながら、そこに目をつぶりさえすれば二十代女性らしいおしゃれな部屋の、その奥に鎮座するベッドへと歩み寄る。

天蓋つきのツインベッドの真ん中を陣取るように寝ているのは神山 謳歌^{おつか}。現在の神山家のヒエラルキーの頂点に君臨する女性である。

その容姿を客観的に表現するとするならそれは完璧の一言に尽きる。

母の血を色濃く受け継いだであろう、金糸のように広がる天然の黄金色は波打つように腰まで広がっている。

浅く呼吸を繰り返す、瞼の閉じられた顔の造形はまさに黄金率の体現のように、見る者を狂おしいほどに惑わす色香を放ち。

そして瑞々しくも倒錯的な艶を存分に孕んだ肢体を包みこむのは黒いジャージである。

チャックが締め切らなかつたのであろう胸元からは見事に実った無限に広がる双山の溢れんばかりの力の片鱗を垣間見ることができただろう。

まさに戦略級である。もしフェロモンを数値に表すことができたならスカウターが弾け飛んでいたことだ。

だがしかし世界も見慣れたもの、その戦略級の兵器^{こけし}を前に平常心を保つことなど朝飯前だった。

というか姉の胸を見て欲情するような性癖は残念なことに彼は持ち合わせていなかった。まことに残念なことである。

ベッドの前に立った世界は「朝だぞー起きろー」と声をかけるが安らかに寝入る姉が起きる気配はない。これもまあ、いつものことである。

溜息をひとつついて彼は謳歌の耳元まで顔を寄せ、

「謳歌姉、起きな、ご飯出来たから」

と囁く。目いっぱい愛情をこめるのがコツだとか。ハートマークが幻視できそうな甘さである。これこそ彼が長年かけて編み出した姉攻略用無駄スキルであった。というか、姉からのお願いという形の命令が下ったことに端を発しているので、彼の名誉のためにも、決して自主的に考案したものではないとだけいっておく。

そうしてたつぷり十秒後。その囁きに瞼を震わせた謳歌は、

「んふ〜、せつちゃん抱っこ〜」

という言葉と共に世界の首に両腕を巻きつける。胸元に押し付けられるマッシュマロのような感触にも物ともせず、だらしない姉の姿に溜息を吐いた世界は、そのまま背中とひざ裏に手をまわし、自分より背の高い姉を抱き上げる。

どんな物理法則が働いているのやら、羽毛のような軽さの姉を、いわゆるOHIMESAMA抱っこのまま一階の洗面所まで連れて行くのだった。

洗面所でされるがままの長女の顔を洗い、タオルで拭う。

それから、台所まで手を引いて連れて行き、食卓の椅子に座らせたところでようやく謳歌は覚醒しだした頭でううん、いいにおい〜、

と呟いた。

寝起きの長女にいつもの妖艶さはなく、まさにもまるで駄目な女である。

「はあ、みんな揃うまで待ってるよ姉ちゃん」

と溜め息を零し、「はあ〜い」という言葉を背に、世界は再び階段を目指すのである。

神山世界の一日？

次に向かったのは謳歌おつかの部屋の向かいにある、次女の部屋である。

ここでも一応女性の部屋ということで形だけのノックをし、しかし返事を待つことなく中へと入る。

ぱちつと電気をつければ殺風景な部屋が姿をあらわす。机にたんす、本棚に武器にベッドが飾られているだけである。

中央で丸まって寝ている少女は世界せかいの二番目の姉、神山 斬理きり。

その身を包むのは可愛らしいピンクの花柄模様のパジャマである。細身だが健康的、背は百六十ちよつとと、バランスのとれた肢体と服の下から自己主張する形の良い胸は衣服に包まれてなお溢れ出んばかりの魅力を感じることができる。

普段は後ろで一本に結っている父親譲りのきれいな黒髪は、ベッドの上で散らばるように弧を描いて背中あたりまで広がっている。起きていれば凜々しさを感ぜさせるやや釣り目がちなその瞳も今は閉じられており、そのせいか可愛らしい印象を見る者に与える。姉の謳歌のような倒錯的なそれとはまた異なるベクトルの美しさがそこにはあった。

抱きまくら代わりに胸に掻き抱いている日本刀と思わしきものについてはすでに見慣れているので、言及することはない。

姉のベッドから一步分の距離を置き、「斬理姉、俺だよ、世界だ」と声を掛ける。ん、と姉が身じろいだのを合図にようやく起こしかかる世界。この方法を編み出すまでに彼は幾度も死線をさまよった。

初めての惨劇である、三年前に起こったブラッディ・マンデイと彼によって名付けられた一連の朝の出来事は今なお少年の心に消えない傷跡を残していた。閑話休題。

「朝だぞ、起きろ姉ちゃん」

肩に手をかけ優しく揺さぶる世界。

すると、すつと目を開き、身を起こす斬理。

「おはよう世界、今は今日の何日だ？」

と焦点の合わない瞳で虚空に問いかける。

世界はここでも溜息ひとつ

「ご飯の準備出来たから着替えて顔洗ってきなよ」

と言葉を残し部屋を後にする。

むっ、いいにおいがする。

斬理が再起動を果たしたのはそれから一分後であった。

神山世界の一日？

斬理きりの部屋を出た世界せかいはその足で二階の自分の部屋へと向かう。

世界の部屋は特に変わったところはない、一般的な男の子の部屋である。唯一上げるとすれば本棚の大半を料理本が占めているということだろうか。八歳のころから（文字通り）死に物狂いで勉強しだした料理が、いつのまにか彼の趣味へと変わる頃には部屋の本棚も現在の様相へと様変わりしていた。

世界がわざわざ自分の部屋に来たのも二年前から自分のベッドと共に寝るようになった末の妹を起こすためである。しかし妹もそろそろ多感な年ごろに差し掛かってきただろうし、そろそろ兄離れさせないとなーと考えていたりする。

彼が普段寝起きしているベッドの下半分を占領しているのが彼の妹にして三女である、神山 神啼かんな、小学四年生である。

名が体を現すとはまさにこのことだろう。今の神啼を見れば神々さえ泣いて跪くことになることは間違いないだろう。

その姿はまさに筆舌に尽くしがたく、きらめく銀糸が彩ることのできたの枕がアフロディーナの膝枕に。

未発達ゆえに禁断の魅力溢れるその身がタオルケットを抱けば天女の羽衣へ。

そしてその神のごとし美少女が横たわればただのベッドであろうと

それは天上の寝具へと姿を変えるのである。
まさに幼女力一万パワー、それは見る者にたやすく理想郷を幻視させるほどの美である。

世界は静かに歩み寄り、ベッドに腰掛け呼び掛ける。

「起きな神啼。朝だぞ」

その声に反応してか神啼はフニヤフニヤいいながらもさらに丸まる。和みながらもそこであきらめる世界ではない。

ほらほら起きろーといいながら神啼の頬をふにふにする長男。ふにふにナデナデをしばらく繰り返していると、ようやく微睡みから抜け出した様子で、おはようお兄ちゃん、と瞼をしばしばしながら彼の腕にじゃれつき朝の挨拶を交わす。

「おはよ神啼、姉さんたち待たせてるから騒ぎ出す前に早く下りるぞ」

世界は小さく頷いた妹の脇に手を入れて優しく抱き上げベッドから降りし、その小さな手の平を握り二人の姉が待つ食卓へ向かう。

居間で二人を出迎えるのはきつちり目を覚ましたのだらういつも通り妖艶な微笑みを浮かべる謳歌と、髪をきつちり頭の後ろで一つに束ね制服を完璧に着こなす斬理である。

「うふ 二人ともおはよ」

「うむ、おはよう世界に神啼」

「おはよう姉ちゃん」

「おはよう、お姉ちゃん」

と朝の挨拶を交わし二人も食卓につく。

にこにこ笑顔のまま手をつないだまま降りてきた二人に視線を飛ばした謳歌。

「うふふ、相変わらず仲良しねえ〜せつちゃんとなつちゃんは」

妬いちゃうわあと艶やかな笑みを向ける。それを聞いてハイハイ、とスルーする世界とその横で頬を赤く染める神啼。その様子を見て更に笑みを深くする長女。

「ほら、神啼をからかうのも程ほどにしる姉さん。これ以上は我慢できんぞ私は」

そわそわと箸を握った斬理が言う。視線は料理に釘づけである。

「もお腹ペコキャラは現実じゃ需要ないんだからねえキリちゃん。主に財布的な意味で」

「む、そうなのか姉さん？」

「そうよお、キリちゃん可愛いんだからもつと違つところで勝負しなきゃ、ね？」

「そうはいつでも私は姉さんとは違って胸がでかくないからな」

「あら、女の子は大きさないのよお。必要なのはテクニツクなのよ」

「テクニツク？ それは、一体？」

「うふふ、教えてほしい？ それじゃあ」

脱線し出した二人に長男は溜め息ひとつ、

「はいはい、続きは後にしなよ。」飯冷める前に食べてしまつぞ」

はーいと頷く姉二人。

それじゃーいただきます。

いただきます。とそれぞれ復唱して食事を開始する。

三人が食べ始めたのを見て疲れたようできて、少しばかり満足そうな表情を浮かべた世界はそれからようやく食事を始めるのだった。

神山世界の一日？

「んふ〜ごちそうさまあ。やっぱり朝はせつちゃんの手料理食べないと始まらないわねえ」

「ごちそうさま。たしかに一日の始まりと終わりには欠かすことはできんな」

うふふふ、と満面の笑みを浮かべる謳歌の言葉に、お腹をさすりつつ肯定の意を返す斬理。

「そんな褒めても何もでないからな、まったく」

そんな姉たちの様子に苦笑を返す世界。満更でもない様子の弟の姿に、笑みを深くする姉二人だった。

「お兄ちゃん、私も。毎日お兄ちゃんのご飯食べたい」

と、服を引つ張りながら自分も自分もとアピールする妹に世界はありがと、と返して頭をなでなでする。

それにムフーと満足した様子の神啼は食事の続きを再開する。

「姉ちゃんたち今日はどんくらいに帰ってくんのか？」

世界は食後の一服代わりに、と神啼を見て和んでいた二人に問いかける。

「ん〜今日はバイトで遅くなるから待たなくていいわよ。そのかわり、お夜食は食べたいなあ、お願いね、せつちゃん」

それに了解と返す。長女がやっているバイトについて詳しく聞き出すことについては既に諦めている。

「私は部活だから帰ってくるのは六時過ぎくらいになるだろう」

「ん、わかった。そういえば大会近かったんだっけ？」

「ああ、来月だな。少しは見どころのある奴がいればいいのだが」

「ふふ それは高望みすぎよキリちゃん。キリちゃんに見初めてもらえるような子がポンポン出てきたら偉い人たちが泣いちゃうわよ？」

「そんなことはないぞ姉さん。原石というものは案外近くに落ちているものだぞ」

「キリちゃんったら、原石とか言いながら自信たたき折るのが楽しいだなんて、そんな変態さんに育っちゃったなんてお姉ちゃん悲しいわ〜」

むっ、なにをいう、それをいうなら姉さんなんてこの前、世界の部屋でエッチな本を見つけて

。 あらあ、せつちゃんの性癖を把握して置くのも姉の役目でしょ？

それにキリちゃんもそのあと

ぬっ！ なぜ知って

うふ 何でも知ってるわよ〜、例えばキリちゃんが部屋の天井裏のぬわー！ なんてそんなことまで知って

！

すごい速度で脱線していく姉二人を視界の端に追いやつて、彼はお箸を持ったまま不思議そうにこちらを見上げる妹の耳をふさぐ。

とある痴女からの贈り物である処分に困るような秘蔵の品が見つかって、しかも読んだのかよ二人ともと絶望し、さらに痴態をさら

し続ける姉二人に深いため息をついた。彼の青春ポイントは今日も右肩下がりである。

神啼も食べ終わったし、ほらそろそろ片付けるぞ、きり姉も朝練おくれていいのか？という弟の言葉に二人の掛け合いも止まる。

朝食と共に作っておいた弁当を姉二人に渡したあと、行ってくる、今日は肉が食べたい。と言い残し練習に出て行く姉と、バイトの準備するけど覗いちやダメよ、とやたら綺麗な笑みを振りまく姉を階上へと見送って、神啼と共に洗い物を済ます。

「ほら、これで最後」

と洗った皿を手渡し、それを慣れた手つきで受け取って拭きだした妹を確認し、濡れた手をタオルで拭う。

最後の一枚を拭き終わった妹とおつかれさん、お兄ちゃんもおつかれさま、と労り合い二人も学校の準備のために二階上がった。ちなみに神啼の部屋は世界の向かいである。ほとんど物置と貸してきている事実在最近悩みがちの兄であった。

「神啼忘れ物はないな？」

「うん、大丈夫。何も忘れてない」

と小さな握り拳を作って答える妹に苦笑をこぼしながら頭をひとつ

撫でた世界は

「それじゃあ行こうか？」と言いながら小さく頷いた妹と共に家を出る。

安全のために鍵を閉め、（決して姉を心配したのではなく姉に迎撃される犯人の心配である。流血沙汰な意味で）妹を通学路の途中
他の多くの生徒が合流する地点　　まで送り大きく手を振りながら離れていく妹に小さく笑み、手を振り返す。

そうして神啼が学校に向かったのを笑顔で見届けたあと、ようやく自分も学校に向かうのだった。

神山世界の一日？

学校が終わったあと、世界はまず商店街に向かった。

本日の夕食の買い出しのためである。実のところつい二日前に次女と共に大量の食材を買い貯めていたのだが、しかしそれはすでに女傑たちの猛威の前に為すすべもなく底を突いていた。

少年は神山家のエンゲル係数を大幅に上昇させている三人を思い、溜め息を吐き出す。

幸いというか当然だというべきなのか、長女のアルバイト代と現在単身赴任中の両親からの仕送りがあるためお金に困ることがないのは行幸であった。

さて今日は何作るかね。昨日は中華だったから今日は和食かイタリアンかな、と。

商店街までの道を歩きながら考えるのは今夜の献立。

神山家の女傑達の胃袋を押さえるためには和洋中の習得は必須技能のうちの一つでしかなかった。

「いよう！ 神山のせがれ！ 今日もご苦労さん。」

とドデカい声で呼び掛けられた。

声のほうに視線を向ければ、顔馴染みの八百屋の店主が。

「おいつす、岩さん。今日も変わらず元気だな」

「はっはっは！ それだけを取り柄に四十年生きてきたんだ、ちょっとくらいの不景気じゃ沈んでられんわ」

「がっはっは！ と笑うこの男の名前は甘射あまい 岩雄いわお。

短く刈り込まれた頭部にタオルを巻き、ごつごつした肉体をつなぎで覆うこの男、元陸上自衛隊員だったらしいのだが八百屋の娘に一目惚れし、猛烈なプロポーズの結果、除隊して八百屋の二代目におさまったという剛の者である。

「どうだ坊主！ 今日にはトマトが買いたぞ」

ふむ、トマトか。なら今日のメインはトマト料理でいくかな、と一人ごちて、了承の意を伝え、あとアボガドと、茄子とあれとあれも、と注文していく。

「じゃあこいつはおまけだ！ 今後よろしく頼むぜ坊主」

ほんと神山家は上客だからなあ！ と梨を袋に詰めながら笑い出す店主に世界も笑い返す。

「岩さんここはいいの置いてるからなー。じゃあまた来るよ」

荷物を受け取った世界はありがとよ！という声を背中に受けて次の店に向かうのだった。

一通り買い終えた世界は両腕に荷物を抱えひいひい言いながら家

までの帰り道を歩く。今日は長女がいないとはいえ、生半可な量では次女と三女の胃袋を攻略することなどできないのである。

俺の胃袋の小ささは父さん譲りかな、と考えながら歩いていた彼のほうへと向かってくる小さな影。

はあっ！？ まさかあれが天使か！ などと重度シズコンの病気から来る発作に苦しめられる彼に歩み寄るのは妹の神啼。

「お帰り、お兄ちゃん」

と、いつものように出迎えにきた妹にただいま、と笑顔で返す世界。そんな兄の顔を見て満足した神啼は荷物の方に目を移す。

「お兄ちゃん重そう、私も持つ」

と兄の服の裾を引く。

「じゃあこれお願いするよ」

健気な妹の姿に苦笑を返しつつ両手で抱えていた野菜の入ったダンボールを妹に渡す。それを神啼はひょいと受け取ってうれしそうに兄の横に並ぶ。

結構な重さのそれを軽々と持つ姿を横目に見て、このちっさな妹もやつぱり神山家の女なんだなあ、と二人の姉を思い出す。

笑顔と拳と木刀が頭をよぎり、心の奥底にしまいこんだ恐怖が回顧しそうになった世界は冷や汗をかきながら頭をふるい、せめて神啼だけは今のままでいてくれ、と二人の姉にばれたらひき肉にされそうなことを考える。

隣でニコニコとマイナスイオンを撒き散らす妹を見てひとまず不安は棚上げすることにして、やっぱ癒されるわーと笑顔を浮かべるのだった。

神山世界の一日？（後書き）

家族以外に初めて出てきたのが八百屋の店主。

神山世界の一日？

神啼かんなと共に帰宅した世界はひとまず荷物を台所に運ぶ。

「ありがと、神啼。重かつただろ？」

「ん、全然」

あっさり返されたその言葉に、涙が出そうになったのを必死にこらえた世界。

妹の頭をなでて自分をごまかした後、妹を後ろにくつつけたまま着替えるために自分の部屋に上がる。

制服から部屋着に着替えた世界は、ふと姿見に映った自分を見て、溜息ひとつ、俺ってちゃんと母さんの腹から生まれてきたんだろうか？ と益にもならない疑問を抱きつつ台所に向かう。

時間は六時前。姉ちゃんが帰ってくるまでには間に合うかな、と腕まくりし、彼の体には少し小さめの花柄エプロンを着ける。

このエプロンは六年前に斬理きりが小学校のときに家庭科の時間に作った作品で、その当時にプレゼントされてからの、随分と長い付き合いなのである。しょっぱいものが溢れてくるような思い出が簡単に溢れてくる程度には。

さて、そうして料理を始めた世界だったが、そんな彼に「何か手伝う？」とカウンターの向こう側から頭だけ出して問いかける神啼。

「宿題あるんだろ？ こっちは大丈夫だから済ましときな」

わかった、と言って名残惜しそうに口を尖らしつつも食卓の上に広げた宿題に取り掛かる妹を微笑ましい気持ちで見やり、彼も再び作業に取り掛かる。

それからしばらく、後は仕上げだけというところで「ただいま」という澄んだ声が玄関から響いた。その声を聞いて花が咲いたような笑顔をふりまいて玄関へと駆けていく妹の姿に苦笑する。それからすぐに、神啼を抱えた斬理が姿を見せた。

「ただいま世界。いい匂いだ、もうできているのか？」

溢れたよだれをすすりながら問いかける斬理はカウンターの内側へと背伸びしながら覗きこむ。

「お帰り斬理姉。あと仕上げるだけだから先にお風呂入ってきなよ」

「むづ、そうか。なら神啼、今日は私と一緒に入るか？」

コクコクと頷く妹に笑顔をこぼして、

「それじゃあ先に入らしてもらおうか。世界もたまには一緒にどうだ？」

と、そんなことをのたまう姉に溜め息をこぼして、俺は後でいいから、と断りを入れる。

たまに入浴中に突撃してくる一番上の姉を思い出し疲れた気分になる世界。いくら魅力的でも家族は家族なのである。

そう言つて背中を向ける弟に、そうか、と残念そうに返して二人は仲良く風呂場へと向かった。

神山家の風呂場は広く、五人くらいなら一度に入つても余裕をもつて堪能できるくらいの広さがある。

その風呂場に女神と天使が舞い降りた。桶で掬った水を神啼と自分にかける斬理。

ん、いいお湯だ、とつぶやきタオルに石鹸をつけよく泡立てる。

「神啼、かんなおいで」

とお風呂椅子に座つた斬理はその美脚を広げ、そして神啼は迷うことなくその間に腰を下ろす。

神啼の長い銀色の髪も今は頭の上でまとめられており、普段は見えないその首筋も露わになっている。斬理は泡立つたタオルでその陶器のように白い肌を優しく洗っていく。時折くすぐつたそうにしている妹を視界におさめ、一通り洗い終えたあと、今度は自分の身体を洗い出す。それに気付いた神啼は私が洗う、と姉からタオルを受け取った。

拙いながらも一生懸命自分の身体を洗ってくれる妹につい笑みがこ

ぼれる斬理。

程よく引き締め均整のとれた身体を神啼のタオルが擦るたびに、んっ、という艶の含んだ声が浴室に木霊した。

ふう！ とやり終えた顔の神啼に笑いかけ、お湯で身体を流す。そのあとお互いに髪を洗いあつた二人はようやく湯船につかる。

「ふうー、気持ちいいな。さすが世界だ、今日もいい湯加減だ」

とつぶやきながら湯船に腰かけ目をつぶり、体から力を抜きお湯に身を任せる。

ふと視線を感じて目をあけると、神啼が斬理の形の良い胸に視線を釘付けにしていた。

「どうした？ 神啼」

「お姉ちゃんおっきい。私はいつおっきくなるの？」

お兄ちゃんに喜んでもらいたいのに、と自分の平らな胸をなでながら問いかける。斬理は苦笑をこぼし、またいらぬことを吹き込んだのか、といつも笑顔の姉を思い出す。

「心配しなくていい。世界は神啼が神啼でいてくれるのが一番うれしいのだから」

「私が私で？ どうすればいい？」

そう、不安を抱えた顔で問う。

「別に、世界も、私たちも何も求めてはいないさ。神啼がここで、笑顔でいるだけで十分なんだから。それでも不安なら自分で答えを

探してみればいい。時間などいくらでもあるのだからな」

そう言って笑顔を浮かべる姉に神啼も笑顔を浮かべる。

「それで、神啼。今日の学校はどうだった？」

うん、今日は三國^{みくに}と遊んで。それから。

しばらくの間、浴室に姉妹の楽しそうな声が木霊した。

神山世界の一日？

風呂から上がった二人を出迎えたのは食卓に並ぶ色とりどりの食事たちだった。

「ぬーっ！なんと美味しそうっ！」

唸り上げる姉に気付いた世界が台所から現れる。

「おっ、ちょうどいい。あとこれ並べるだけだから。」

両手に皿を抱えた兄に神啼は、手伝う、と言って近づいていく。

笑顔浮かべ空いたほうの手で頭を撫でつける兄と撫でられて頬を弛めて笑顔を浮かべる妹の様子に、先ほどの風呂場でのことを思い出して二人の姉は優しい笑顔を浮かべた。

ただ、すでに一人食卓に着いて箸を握った姿は色々台無しであったとここに記す。

料理を並べ終えた二人はいつもより一人少ない食卓につく。

「じゃあ冷めないうちに。」

と言って三人でいただきますを唱和する。

んまい、んまいと零しながら次々にお腹に納めていく姉と無言で静

かに食べ続ける妹に世界は苦笑し、自分もなくならないうちに食べないとなと食事を始めるのだった。

「そういえば今日はトマト料理が多かったな？」

特にパスタがよかった、と粗方食いつくして満足した斬理が問いかける。

「ああ、岩さんここで買ったからな、随分安くしてもらったよ。」

「ふむ、甘射あまいの店主か。」

いつか手合わせ願いたいものだ。と一人呟くバトルジャンキー戦闘狂なきらいのある姉に深い溜め息を吐きだしてから世界は席を立ち台所に向かう。

冷やしておいた梨を三人分冷蔵庫から出して切り分け盛り付けた皿をちょうど食べ終えた妹と、今度頼んでみるか？といまだ考え込んでいる姉の前に置く。

食べ物に釣られた姉は思考を止め、そちらに目を向ける。

「おお、今日は梨か。姉さんのはあるのか？」

「気にしないでいいよ。ちゃんと分けてるから。」

「そうかそうか！ ならいただこっつ！！」

満面の笑みを浮かべた斬理は勢いよくパクつき出す。

その隣でお梨美味しい、と小さな口を一杯にしている神啼に、ほら汁垂れてるぞと神啼の口元を拭う世界。すっかりお父さんが板に着いた中学二年生であった。

それからみんなで分担して洗い物をすまし、長男の淹れたお茶を飲みながら一服。

世界は風呂を済ませ、斬理は神啼の宿題を見てあげたりとそれぞれの時間を過ごしてちょうど時刻が十時をまわった頃、ようやく長女が帰宅した。家族の帰宅に合わせて神啼がお出迎えするのはもはや神山家の習慣と化していた。

神啼と手を繋いだ謳歌おっかが台所に姿を現す。バイトだったからだろう、今日はスーツを着用していた。

「ただいま〜せつちゃんキリちゃん。今日は早く終わったから急いで帰ってきちゃった」

せつちゃんの顔が早くみたかったからね〜うふつ　とか言ってウインクする謳歌に、最後の部分をスルーした世界は

「とりあえず風呂済ましてきなよ。ご飯つくつとくから」

と返す。もうイケずなせつちゃん、と唇を尖らせる姉に、世界は溜息をついて台所に向かう。

「なんだか最近せつちゃんがやさしくないわ〜。」

「それは姉さんが悪いな。いつもいつも同じようにからかったら飽きるだろう。男女関係とはいつも新鮮なことを取り入れていかないとうまうまいかないと学校で燐火りんかが言っていたからな。」
うふ、リンカちゃんたら純粋なキリちゃんにそんなこと吹き込むなんて面白いわ」と誰にも聞こえない声で呟く。

「キリちゃんもついにそういうことに興味が出たのかしら？」

「ふっ当たり前だ。いつまでも何も知らないままの私だと思っちな姉さん。」

「あら、頼もしいわあ、キリちゃん。だったら今度はもつとせつちやんに悦んでもらえるように二人でがんばらなくちゃね？」

と艶やかな笑みを浮かべる姉に、

「うむだったら神啼も誘ってみんなで世界を喜ばしてあげるのはどうだろうか。」

と妹は笑顔でうなづく。あらせつちゃんたら大胆ねえ、いきなり三人でなんて　ん？そうか？でも神啼だけのけものにするのは可哀そうだろ？　うふ、私そんなキリちゃん大好きよ。うわっ急に抱きつくな。だって　　いつもそんなことをするから　　。

「　　とつとと風呂入らないと夜食作らないからな、謳歌姉！
あと斬理姉もいらん気回さんでいいから！」

風呂から上がった謳歌は弟が用意してくれたトマトのスパゲッテ

イとサラダ、食後のデザートをペロツと食べつくし、ソファで一人酒を楽しむ。

お姉ちゃん、どんな仕事してきたの？

ふふ、ただの後かたづけよ。

後片付け？

そ、汚れちゃったところを綺麗にするのがお姉ちゃんの仕事なのよ。私もばいと出来る？

あらあら、なっちゃんにはまだ少しだけはやいかもね。もう少し大人になったら手伝ってもらおうかしら？

うん。お仕事大変？

そうね、自分の分をわきまえることもできない愚図ばかりで時々いやになっちゃうわ。

なんだか深く考えたら怖くなるような会話をBGMにして家計簿をつけていた世界は時計を見て十一時を過ぎていたことに気づき、神んな啼かに声をかける。

「神啼、そろそろ寝ようか。」

「うん。謳歌お姉ちゃん、斬理お姉ちゃん、おやすみなさい。」

寝る前の挨拶を交わした神啼を連れ、洗面台で二人並んで歯磨きしたあと、二階の世界の部屋に向かう。

ベッドに入り、世界はおやすみと隣に寝転ぶ妹に声をかける。おやすみ、お兄ちゃんという声が返ってきたのに頭を一撫ですること。返事とした世界は電気を消して目をつぶる。寝付きの良い世界は

すぐに夢の世界へと誘われ、

お兄ちゃん

と呼ぶ声に現実に呼び戻された。
目を開けてみれば寂しそうに見上げる銀の双眸が。

「どした？眠れないのか？」

と問いかければ、小さく頷くことで肯定の意が返ってきた。
世界は苦笑し、神啼の頭を優しく撫でる。しばらくそうしていると
胸元から小さな声で「お歌 聞きたい。」という言葉が届く。

しょうがないなと溜め息と共につぶやいた世界は、初めて歌って
以来神啼のお気に入りとなった曲を口ずさんだ。
目を閉じ流れてくる詩うたに身を任せた神啼は、初めて聞いたの時の
ように胸に優しい熱を抱いたまま眠りにつく。

「ん、今日はずいてるわね。こんなにいい肴で飲めるなんて。」

縁側で月見酒を一人楽しんでいた謳歌は流れてくる詩うたに杯を掲げ、

「ん、世界か。ふふ、御苦労さまだな」

自分の部屋で勉強していた斬理は、その手を止め窓辺に腰かけ空へと響く詩に身をゆだねた。

歌い終えた世界は胸元で静かに眠る妹を見て小さく微笑みを浮かべ

おやすみ

今日も小さな温もりを抱いて眠りにつく。

神山世界の一日？（後書き）

作者はなぜ料理出来ないのに主人公を料理上手な設定にしたのだろうか。

というわけでようやく世界の一日編は終了です。

長かった。いや短いんですけど感覚的には凄く長かった。見切り発車で始めたこの作品、読者の方々にはわけがわからないところが出てくるかもしれません。

ここまで付き合ってくださいくださった皆様にはまずは感謝を。

それではもうしばらく続けていこうかなと思っっているので今後よろしければのぞいていってください。

閑話？

“ こんにちは、お嬢さん。よければ私たちと一緒に来ないかしら？”

“ あいつらは可愛げがなくてな。ああ、もちろん良い意味で、ただ。親としてはねえ？”

だから君のようなかわいい子は大歓迎だ”

声が響いた

差し込むナニカ／光の向こうから

言葉の意味はわからなかった

目に入るモノがなんなのかもわからなかった

ワタシはナニモ知らなかったから

知っているのはこの何もない箱庭の世界だけだった

けれど

けれどその声に私の中のナニカが疼いたような気がしたから
だからワタシは。

ワタシが私として始まったあの日を、私は忘れることはないだろう。

閑話？（後書き）

過去話その？です。
意味分からの仕様です。

中学生日記 前編

朝、いつも通り四人で朝食を済ませ、賑やかな姉たちを見送り妹を送った世界は彼の通う学校、『盛華中学校』に向かうのであった。

突然だが神山 世界は転生者である。いや、実際のところ転生者の定義などと問われても宗教やらなんやらに精通しているわけでもない彼にはよく分からないので、なんとなくそういう風に自分の位置づけをしているだけであった。

今の彼にとって、前世の記憶といったものは神山世界という人間を形成する一部でしかなく自分は自分以外の何物でもないのだろつとある意味では悟りの境地へと至っている。人はそれを老いともいうのだが。

とはいえ記憶とは経験であり、どのような故にかは不明ではあるが前世での二十年分の記憶を持ってしまっている彼は累計三十年以上の人生経験を経た精神をその身に備えていることになる。

そして中学生の男子と言えばまだまだ幼さが見えるやんちゃ盛りな時期、その中に混じって遊ぶというのは、いくら精神が肉体に引張られがちであろうとも困難であった。

まあ、つまり何が言いたいのかというところ。ようするに世界には同年代に友達が少なかつたりする。具体的には片手で数えられる程度である。合掌。

ガラガラとドアを開き教室に入る。ちらほらとすでに登校している顔見知り程度のクラスメイトと挨拶を交わし窓際の後ろから二番目の席に着く。鞆を机の横に引つ掛け、肩をぐるりと回して息を吐き出す。
そうして一息ついた世界は後ろを振り向く。

椅子に座って腕を組み、窓の外に鋭い視線を飛ばしている少年がそこにはいた。

「ウツス、鬼心」

「ああ……」

と窓の外に顔を向けていた少年は世界のほうにその鋭い視線を向け、睨みつけるようにして答える。

断花 たちばな 鬼心 きしん。

黒髪黒目、顔立ち自体は悪くなく、むしろ整っている。成績優秀で運動もできる文武両道を地で行く少年ではあるのだがいかんせんマイン要素が大きかった。

目つきが悪いのだ。まるで狂気を体現したかのような凶悪な三白眼、そしてそこから放たれる圧力プレッシャーは常人では目を合わすことすら困難であり、もはや物理的な圧力すら伴う程であると囁かれていた。それに加えて彼自身の愛想の悪さも拍車をかけていたりする。

そんな彼であるが、世界にとっては片手で数えることのできる友達
の一人であった。

神山家で育った彼にとって、その程度のプレッシャーでは微風程度そよかせにしかならなくなっていたのだ。おまけに精神年齢が老いた彼にとって、多少のぶつきらばうな対応をされたところで苦になったりすることもなかった。そんな些細なことは彼にとって重要なことではなく、彼にとつて大切だったのはその目つきの悪い少年が年似合わず大人びていたということだけだったのだ。

「なあ、最近思うんだか。姉ちゃんたち、このままじゃ貰い手つかないんじゃないかな？」

射殺するような視線をものともせず、最近富みに増してきたエンゲル係数に頭を痛める世界が問いかける。

「……そうならお前が養うしかないだろ。有象無象では神山は御し切れんからな」

問いを切つて捨てる鬼心に頬をひきつらせる世界。

「いや、神山でひとくりにしないでくれよ。神啼はイイ子なんだから」

今からどうにかできないか？ いやできないか……。

その無情な返事に溜め息が零れ落ち、自分でも分かっていたのかさ
らに溜め息を吐き出した。

そこへ勢いよく扉を開く音が聞こえた。

振り向いた彼らの視線の先には一直線に歩み寄る少女が。

「おっ、おはようっ、神山！」

どもりながらの声に世界は微笑ましいものでも見るかのようには口元を僅かに緩め挨拶を返した。

「おはよう、三葉^{みつば}」

「っ!？」

うおっ、えっ、えがおが眩しいなあっ!と頬を赤くして呟くこの少女、名を龍波^{たつなみ} 三葉^{みつば}といい世界のクラスメイトの一人、片手で数えられる友達二人目である。

肩まである癖のある黒髪はざつくばらんに切り揃えられており、眼鏡をかけたその容姿はそこそこ整っている、『ごく普通』の少女であった。頬を染めて身悶える少女に世界は苦笑する。

「そつえば、今日は白九尾^{びやくきゅうび}は一緒じゃないんだな」

いつもなら三葉の隣で毒を吐いている少女がいないのに気付き、話題を変えるようにして話しかける世界。

「え、ああ。タマのやつだったら今日は休みだっさ。なんか家の事情がどうか言ってたけどな」

今朝かかってきた電話で罵詈雑言を吐きだしていた親友を思い出し、自分に向けられていたわけでもないのに冷や汗をかく三葉。

「……家の事情、か」

三葉の隣にいない少女を思い、一人シリアスに呟く鬼心。

「ん？ ああ、いたのか。おはよう断花」
「……………」

世界以外の視覚情報を遮断していた乙女はそこでようやく鬼心がいたことに気付く。

いつものこととはいえ、あんまりにもあんまりな言葉に沈黙を返す鬼心。

「あっはっは、タマがないからって怒んなよ断花」

快活に笑顔を浮かべて彼の肩を叩く三葉。能天気な笑顔を浮かべて肩をばしはしする少女に向けて舌打ちひとつ。

「…………怒ってんじゃなく、呆れているんだ。お前のようなピンク脳と一緒にするな」

「なっ、べっ別に神山に見とれてた訳じゃないからな！」

と騒ぎ出す二人。

そこにホームルームの開始を告げる鐘が鳴り響く。

ほら、三葉。先生来るからと、二人の会話の横で今日はいい天気だなー、と外を眺めていた世界は鐘の音で視線を戻して騒ぐ三葉に着席を促す。

「やべ、じゃあまた後でな神山！」

席はすぐそこだというのに手を振りながら離れていく少女を微笑を浮かべて見送る世界。

「……どうにかしろよアレ」

「って言われてもなあ」

「お前は、まったく。……何か、やりたいことでもあるのか？」

言外に『だから、見て見ぬ振り？』と問いかける。

「そついうわけじゃないんだけどね。そうだなー。神啼の花嫁姿見てから考えるよ」

「……だめだこいつ」

「皆さん席に着いてますか？ それでは、ホームルームを始めます」

そんな彼らの会話を断ち切るように。扉を開けて入ってきた担任の声が部屋に響き渡り、一日の始まりを告げた。

中学生日記 前編(後書き)

つまり世界の同学年の友達は三人だけだったという話。

中学生日記 後編

ホームルームの始まりを告げる鐘と共に教壇に立つ教師が連絡事項を伝えていく。

彼らの担任である彼女の名は吉夜須 桃子。

スーツを着込んだ氷のような美貌を持つ女性である。

余談だが、彼女、踏まれてみたい女性・学内ランキング二年連続一位の記録保持者である。ちなみに神山家の長女が殿堂入りを果たしているを知った長男は、それはそれは深い溜め息を零したとか。

「 、これでホームルームを終わります。なお神山は放課後、職員室に来るように」

なにっ！？ 個人指導だっ！ そんなことは、と騒ぐ少女を置き去りにして、世界は了承の意を伝える。

よろしい、それでは次の授業の準備をしておくようにと言って出て行く桃子。

世界が急に静かになった方向に視線をやれば捨てられた子犬のような目でこちらを見つめているのが目に入り、少女を宥めることの苦勞を思い溜め息をついた。

休憩時間、なんとか放課後二人きりになるのを防ごうと。個人指導の危険性から、桃子の女豹っぷりまであることないことを力説する三葉を、なでなでする事でごまかした世界。

四限の授業は悪魔元帥との四次元での壮絶な殴り合いの末、実は父親だったことがわかり修業をして大魔王プリンセスと超起動兵器で宇宙大戦に突入したところで鐘が鳴り響き、現実に帰還する。

昼休み、屋上にある給水塔の横に腰を下ろした世界と他二名。言わずもがな鬼心と三葉である。世界は弁当、三葉と鬼心は購買パンである。

盛華名物『YAKISOBAパン』を買うことができた三葉はほくほく顔でパンの入った袋を抱えている。

何でもこのパンは週初めに少数限定販売とされており、しかもそのおいしさは天井知らずだといわれているため学生生活中に食べることができれば、それはもうすごいことが起きるだろうといわれているくだらないいわくつきの代物なのである。噂によればとある女性教師が知り合いの金髪美女の身内を使って仕入れているとかいないとか。

閑話休題。

三葉がそのようないかにも競争率の高そうなパンを手にかけることが出来たのは、授業の終了と共に連れ出した鬼心のおかげである。その日本刀のような切れ味のある顔面を人除けに使い爆走した少女は見事最後の一つを手にかけることが出来たのであった。

「……ひどい目にあった。まったく。食べたいなら直接頼めばいいだろ」

午前中よりやや陰しさの増した瞳で、勢いよくパンにかぶりつく少女に悪態をつく鬼心。

「んぐ。そんな睨むなよ、断花の顔怖いんだからさ」

そんな彼にまるで怖がってない風に返事して、苦勞して手に入れた方がありがたみありそうだろう？ とからからと笑みをこぼす。

「ありがたみ……。あるのか？」

「いや、ないない」

自分の弁当をつついていた世界は苦笑を浮かべる。

「それに同じもん食べてたらいつか神山のねえちゃんたちみたいになるかもしれないしな！」

お姉様と同じくらいの双子山を手に入れたあかつきにはシスコンの神山もっ！と頬を染め将来の夢を思い描く。

え？俺そついう認識なの？と己の行動を省みることのない少年は愕然とする。

残された鬼心は何度か見たことのある、あの重力から解き放たれた兵器を思い出し、そして少女の無重力兵器を一瞥ないちちした後、深く黙とうを捧げた。

夢とは、叶わぬからこそ、夢、と呼ぶのだろうか？

なんやかんやあった昼休みが終わり、教室に帰還した三人。
午後の授業は幼馴染だった少女が実は前世の死に別れた恋人でしか
運命はそんな二人を残酷にも殺しあうことでしか生き残れない宿
命を突き付け、さらに親友が実は女性で自分は選ばれた二人の聖
戦士だったというところで授業が終わる鐘が響き。まあ要するに夢
から覚めた世界は凝り固まった体を伸ばすのだった。

放課後、部活のために図書室へと向かう三葉と、さっさと一人帰っていく鬼心。

そんな二人を見送った世界は職員室に向かう。
失礼しますと入った職員室で自分を呼び出した相手を探す。
いい意味で目立つ相手なのですぐに視界に入り、彼女の座る机に向かう。

「すぐ片づくので先に行ってまっています」

と鍵を渡された世界はわかりました、と返し職員室をでた。

世界が訪れたのは第二家庭科室、部活動などは主に第一を使用するため普段はあまり使用されることのない教室なのである。
待つことしばらく、ようやく待ち人である壱夜須 桃子が扉を開けて姿を現す。

教室にいる世界の姿を確認するように一瞥し、後ろ手に扉を閉める
桃子。
そして。

「待たせてしまいましたか。それでは

」

さっそく始めましょうか。

そう告げた桃子は、その身にまとう、スーツのジャケットをおもむろに脱ぎ去る。

普段はジャケットに隠れているその女性らしい丸みを帯びつつも引き締まっているという蠱惑的な矛盾を孕んだ身体がブラウス越しに露わになる。

その姿に、姉たちのおかげで女性に見慣れているはずの世界は、身惚れ、しかしすぐに頭をふるい我を取り戻す。

そして。

そして、彼女の白磁のような美しさを秘めたその指が、

ひとつ、またひとつ、ブラウスのボタンを外していく。

すべて解き放たれ、ゆっくりと脱ぎ去り、

ハアと熱い吐息を漏らす桃子。

世界はそれを確認し、ゆっくりと近づき、彼女の手には、

エプロンを渡した。

「教室の中は冷房が効いているとはいえ、夏のこの暑さはいつになっても好きになれませんね」

とインナーの上にエプロンを装着しながら溜息をつく桃子。

「だからっていきなり脱ぎださないで下さいよ桃子さん。俺も一応男なんですから」

他人の目がなくなった途端に脱ぎだす教師に、はしたないですよと苦言を呈す世界。

「ふふ、だったら試しに私のことを襲ってみますか？」

「やめときますよ。職業は宦官あまこですなんて言いたくないですし。それに、そんなことしたら明人あきひとさんに顔向けできないですね。」

この人絶対わざとやってるだろと思いつつも。その大人の微笑に一瞬男としての部分を刺激されてしまった世界。すぐに三姉妹の顔が浮かび冷や汗を浮かべ、そして、世界は年齢の離れた親友を思い出し、溜め息を吐き出す。

「そうですね。それに私の身体は明人のものですから、もしせつちやんが私に欲情して襲いかかっていたら謳歌に報告するところでした。もちろんその前に私の手で地獄を見てもらうことになりましたが」

「はは、そんなことあるわけないでしょう。そんなことよ
り今日はお菓子作り方教えますから準備始めましょうか」

その背に大量の汗を浮かべた世界は、しかし決して悟らせまいと、桃子のたつての願いで　　なんでも手作りの料理を彼氏に食べさせたところ非常に微妙な顔をされたらしく　　週に一回行うようになった料理教室を開始する。そのためだけに料理部まで作ってしまった。当然正式な部員は世界だけで残りは名前だけの幽霊部員。当然顧問は桃子である。

ふふふ、せつちゃん、貸しひとつですよという凍えるような声を背に受けて。

こうして彼のスリルにあふれた放課後は過ぎていくのだった。

日曜日の過ごし方 前編

とある日の日曜日。

朝早くから洗濯や風呂掃除などに精を出していた世界。朝のノルマをクリアしてちょうどイイ時間だと台所に向かい、冷蔵庫を開けた彼はそのあまりの戦力の低さに愕然とした。

長女は朝早くから出かけており、帰りは夜になるというので昼食分が浮くとはいえ、これでは夜を越えることもできないと気づく。

買い物行くか、と溜め息を着いた後、朝食をつくりながら午後の予定を組み立て始める苦労性な十四歳であった。

軽めに作った朝食を並べた世界は、次女の部屋に向かう。

あんパン……と言いながら長男の頭にかぶりつく斬理^{きり}。ちよつ待って!? アンなんか入ってないから! 取り替えきかないからあつ! 悲鳴を上げつつホラーな気分を味わう世界。

とまれ、なんとか次女を起こし、その足で自分の部屋で寝る妹のもとに向かう。その天使のような寝顔で少しばかり心の傷を癒された彼は優しく妹を起こしにかかるのであった。

「斬理姉、今日なんか予定ある? できれば買い物付き合ってほしいんだけど」

食事を終え、神啼と一緒にソファーでお茶を飲んでいた斬理に尋ねる世界。

「ん、構わんぞ。今日はとくに用事もないからな」

快く了承した姉にありがと、と返して神啼に視線を向ける。

「神啼は今日は三國ちゃんと遊ぶんだったよな？」

「うん。三國のお家に行く」

ごめんなさいお兄ちゃん、と謝る妹に苦笑して、

「いいよ、楽しんできな。あと三國ちゃんのお父さんとお母さんにもよろしくいっとくんぞぞ？」

と安心させるように頭を撫でる世界だった。

斬理は庭で木刀を振るい、世界はお菓子を焼き、神啼はその手伝い、そして斬理の腹時計に合わせて昼食の準備にかかる世界だった。

「じゃあ、行ってきます」

と玄関に立つ神啼に、手作りの焼き菓子を詰めた袋を手渡す。

「ほら、神啼。お土産だから、持ってきな」

気をつけて行くんだぞ、と笑顔で妹を送り出す。家を出た神啼はお菓子を大事に胸に抱えたまま、玄関で見守る兄と姉に手を一振りし背を向けた。

神啼を送り出した世界は、ほっと一息ついてソファーに腰掛ける。

「世界、今日はどこへ行くんだ？ 商店街に行くのか？」

湯呑を二つ持った斬理が世界の隣に腰掛け、一つを差し出す。

「ん、ありがと。そうだな。せっかく斬理姉いるんだし久しぶりに遠出するか。他にも買い足しときたいのあるから」

一人の時は、大体商店街で済ましてしまうので、たまには大型店舗が並ぶ新都のほうまで遠出しようとして提案する世界。

「ふむ、日曜日に弟とデートというのも悪くない、この前姉さんに貰ったあれを着ていくか」

斬理は今日の予定に思いを馳せ、継いで先日姉にもらった服を思い出し、いいことを思いついたといわんばかりにポンと膝を叩いた。それに、ビクリと反応したのはもちろん世界。

「え？ もしかしてあれって謳歌姉にもらった“アレ”？」

そうだが？ と返す姉に頭を抱えなくなるのをこらえる。

「いやいやいや、だめだから、あんなの着た姉ちゃんを隣に連れて歩くとか、死ぬから、俺が、社会的に」

数日前に長女が仕事でもらってきた、自分はキツくてきれないからと言つて次女に渡したそれは、服が服としての役割を果たすには圧倒的に上半身の布面積が足りていなかった。後ろから見たら最早ただの痴女である。そんな代物を着た姉を連れ回すなんてことは、彼の持つ常識では許容出来るものではなかった。

む、私には似合わないのか？ と悲しそうに呟く斬理。時折大切なところで羞恥心が機能しない姉を見て将来が不安になる世界だったが、もちろんそんなことを口にできるほどの勇氣はない。

「違う、そんなことないって。斬理姉きれいだからもつと似合う服があるって意味で え？ 見繕え？ わかったわかったからそんなに力いっぱい握らないで手首折れる折れるおれ

可愛い姉に逆らうことのできなかった世界は、全力で斬理の服装をコーデイネイトしてあげるのだった。

日曜日の過ごし方 後編

家を出た二人は電車に乗り三十分、目的地へと降り立つ。

地元とは違い、多くの人がにぎわい、行き交うその場所はまるで違う国に来たようだ。世界は息を零す。

「こつち来るのは久しぶりだな。」

前来た時は謳歌姉も神

啼も一緒だったっけ」

「ああ。ふふ、あのときの神啼は可愛かったなあ」

訪れた街並みに、たかだか一か月前のことを懐かしみ、枯れた、いやさニヒルな表情を浮かべる世界と、その時に姉と二人で着せ替え人形にして遊んだ妹を思い出し恍惚とした表情を浮かべる斬理だった。

立ち直った二人がまず向かったのは家具屋である。

世界が十年使ってきたマイベッドがついに寿命を迎えたので

先日長女が酔っぱらって寝床に侵入してきた折にベッドの底を踏みぬいたため 買い換える運びとなったのだ。

もともと、近々買い換えようかと考えていたのでいい機会だったと優しく笑う健気な弟に胸をきゅんきゅんされた姉がいたというのはどうでもいい話である。

「むー、これなんかどうだ世界？」

「……どうやって家に入れるんだよそんな大きさのベッド」

と天蓋付きの十人くらい寝れそうなベッドを薦めてくる姉に溜め息を吐く世界。いったいどこの王侯貴族のためのベッドだよと、心のなかでツツコム。

「あ、これだったら二人で寝ても狭くないな」

世界が目をつけたのは今使っているものよりも少し大きめのサイズのベッド。これなら、成長期の神啼も心配ないだろう、と。ナチュラルに妹の分の幅も勘定する妹離れ出来ない兄だった。

おお、これなんてどうだ？ かつこいいぞ？

いやいや、ベッドにそんなもんつけていったい何したいんだ？

じゃあ、これなんてどうだ？ 回転したり音楽がかけられるみたいだぞ。

いや、それらぶh

それからも熱く議論を交わし合った二人は、最終的に神啼を間に挟んで寝ても大丈夫なくらいの大きさのベッドを購入することに決めた。神啼と寝るのではなく、神啼を間に挟んで、というところがミソである。

後日、二人が就寝したあと部屋に侵入しようとした次女が長女に見つかり、その権利を巡り第一次神山家ヒエラルキー頂上血戦が行われることになったのはまた別の話である。

次に二人が向かったのはいきつけの刃物専門店。

世界の愛用する包丁たちを研ぎなおしてもらうためである。駅の裏

手に回り人通りの少ない路地裏を奥に進んだところにその店はある。店内は狭く机が一つ置かれただけで、あとはその後ろに奥へと続く扉があるのみであった。

「おひさしぶりです、剣征けんせいさん」

「元気だったか？ 師匠」

「よう。餓鬼ども。今日はどうした？」

秋山 剣征けんせい。

この店の店主であり、彼らの両親とは古い付き合いらしく。斬理が幼少の頃には、少しの間剣術を教えていたこともあるらしい。年は五十を過ぎ、その乱暴な言動とは裏腹に、全体的にほっそりとした、よくいえば刃物の鋭さのような、悪く言えばひよる長いネギのような印象を受ける人物である。

「ええ、今日はこいつら見てほしくて」

言って背負っていた鞆から、皮で作られたケースを出して剣征に渡す。

受け取ったそれを机の上に広げる剣征。

「ほう、もつとはやく潰すかと思ったが、今回は長持ちしたじゃねえか。少しは腕あげたようだな糞餓鬼。これなら一週間でどうにかしてやる」

「だったら私が取りに来よう。もう一度来る用事もあるしな」

と言って取り出したメモを剣征に渡す。

「ふん、ずいぶん派手にやらかしたな。まあいい、こっちも一週間

でどうにかしてやる」

いったいなにをやらかして何を頼んだのかは決して考えないし聞かないのが世界クオリティー。

それらを持った剣征は閉店だからとつと帰れ餓鬼ども、と告げて奥の部屋に消えていく。

それを見送った二人は、いつものことだと軽く頭を下げた後店を出た。

そのあとも、斬理の服を見に行ったらいつものまにか下着売り場で姉の下着を選ばさせられたり、水着を選ばさせられたりしただけで特に変わったこともなく、最後に今日の目的であった食材を買い込んで二人は日の沈み始めた街を後にした。

家に帰った二人を出迎えたのは先に帰宅していた謳歌と神啼である。

抱きついてきた神啼を、両手が塞がっていたため、胸だけで受け止める世界。おかえりなさいという声にただいまと返す。

「おかえり、ずいぶんと遅かったのね。キリちゃんなんかツヤツヤしちゃって羨ましいわあ」

と無駄にシナを作る謳歌に斬理は胸を張る。

「むん、羨ましいだらう姉さん。なんと世界直々に下着を選んでもらったのだからな！」

袋から取り出したシンプルな赤い下着を姉の目の前に突き出し、にやりと笑みを浮かべる。

その言葉を聞き劇画チックに愕然とした表情を浮かべる謳歌。

な、なんです、って？ し、したぎを？ せつちゃんが？ と呟くその顔に最早いつもの笑顔は浮かんでいなかった。

「ああ、しかし、それだけではない！」

「っ！ ま、まだあるというの！？」

「なんと水着も世界自ら選んでくれたのだっ！」

「な！ なんですってー！？」

そんな茶番を繰り広げる二人を置き去りにした世界と神啼は台所へと向かい晩御飯の支度を始める。

「神啼、今日は楽しかったか？」

と野菜を洗いながら、隣でジャガイモの皮をむく妹に問いかける。

「うん、今日はあやほお姉ちゃんとも遊んだ」

「ふん？ 休日なのに繰歩のやつ家にいたのか」

あっ、あとお菓子おいしいって

。

料理を作る音と楽しげな兄妹の会話がしばらくの間台所で響き渡っ

た。

後日、どうしてそうなったのか三姉妹に連れられた長男は再び駅前へと繰り出し地獄を見ることになるのだが、今はまだ、彼にそれを知るよしはない。

閑話？

私は駆ける

記憶の中の色あせた街を

学校へと続く道

家族で遊んだ公園

姉に連れられて行った服屋

色あせた記憶を取り戻そうと

熱を持ってうなされるように前へ前へ急かす身体は

しかし、冷え切ったしまった思考に徐々に凍えていく

望んでやまなかったはずなのに

何も変わってはいなかった

何もかも変わってしまったのに

冷え切った身体は

それでもなお進む

ナニかを確かめたくて

あの日からこぼれ続けたたナニカをもう一度確かめたくて
そしてたどりついたのは

あの日と変わらぬ我が家

ナニモ変わらぬはずなのにナニモ変わってはいないはずなのに

凍えた足は一步も動かず

色あせた思考は凍りつき

欠けてしまったココロは自らを引き裂い

「姉ちゃん」

声が、聞こえた

懐かしい声だった

振り向けばあの日と変わらぬ姿で

「まったく、一週間もどこ行ってたんだよ。連絡ぐらいしてくれよ
な。さすがに心配したんだから。」

あの日と変わらぬ温もりで迎えるキミに

「ほら、早く入りなよ。今から夕飯作るから先に風呂入ったら？」

色あせてしまったと思っていたのに

「と、そうだ」

おかえり

と言って溜息のあとにひとつ笑顔をこぼして、背中を向けたキミに
わたしがどれだけ救われたのか、キミはきっと気付いていないのだ
ろう

あつく、あつく、頬を伝う熱をかんじていた私は

世界が色づいていく音を聞いた

三年前の冬のことだった

閑話？（後書き）

過去話その二。

桃子先生の家庭訪問

「家庭訪問に来ました」

現在、朝の7時半。

休日のため、三姉妹はまだ惰眠をむさぼっている最中である。世界はいつも通り早起きしたあと、朝食の下ごしらえを済ませ、たまっていた家事を終わらせた。そのあと時間が空いたので最近趣味で始めた漬物作りでも　　きゅうり、梅は制覇したので次は茄子である　　しようと冷蔵庫を開けたところで、来客を告げるベルが鳴った。

こんな早い時間にと少し訝いぶかしんだ世界だったが出れば分かるかと切り替え玄関へと向かう。

そして、ドアを開け、そこに立っている休日なのにスーツ姿の美女、
壹夜須いちやす 桃子とうこを見てゲンナリするのだった。

そして、冒頭へと戻る。

「家庭訪問に来ました」

何の脈絡もなく放たれるその言葉に抗うことなどできないと悟りながらも抵抗を試みる世界。

「姉さんに用事ですか？　　だったら出直「いい度胸ですな、せつち

ちゃん「いらつしやい、桃子さん。姉さんたちはまだ寝てるので俺しか対応できないですけど」

所詮枯れ枝一本で押し寄せる濁流を止めることなど不可能なのであった。

「コーヒーでいいですよ。砂糖はいつも通りで」

勝手知つたる他人の家とばかりに居間へとやってきてソファアに座り、当たり前のように飲み物を注文する桃子。それに逆らうことなど出来るはずもなく、世界は溜め息を零して台所に向かうのであった。

桃子がこの家を訪れたことは過去にも何度かあった。そも、彼女は謳歌と大学からの付き合いらしく、詳しい経緯は分からないけれど妙に波長が合つて今に至るらしい。それ以来幾度か夕食に招くことがあつたのだが、このように朝っぱらから一人でやってくることは初めての事だった。

世界はコーヒーと自分用のお茶を入れ、ソファアの前のテーブルにコーヒーとお茶請けを置き、彼女の対面へと座る。一口お茶を啜り喉をつるおしてから目の前の女性に問いかける。

「でっ」

と、一文字だけ。彼は既にして疲れていたのだ。姉たちが起きてきた後、自分に被る被害は予測するだけでも甚大だったから。だから今の彼はひどく投げやりだったのだ。それが過ちだとは知らず。

「ええ、実は行く場所がなかったため知己ちぎのいる神山家を訪ねることにしたのです」

その適当な質問の仕方には触れず淡々と語られる内容。彼は溜め息をつき、

「なんで行く場

」

そこまで言っただけで、しまった、と。

「ああーっと！ いやっ！ いいですけどね理由なんて全然気に聞いてくれますか？」もちろん「

曰く、彼氏である明人あきとが他の女を褒めたのだと。

こういふ話である。桃子の彼氏である明人の職業は幼稚園の先生であつた。

ある日彼が受け持つクラスの少女が泣いているのを見て、どうして泣いているのか問いかけた。

その子は答えた。お花が枯れてるの、と。それに明人は感動した。このような小さな子が命の尊さをして涙を流せるなんて、と。そのようなことがあつて家に帰ってから彼は桃子に語つたのだと。彼女はきつと将来素晴らしい人に育つだろう、と。それを聞いた桃子は怒って家を飛び出してきたのだと。

あまりにもくだらなすぎた。しゃべりだした二行目には聞く気が失せるほどのくだらなさだ。おまえは幼稚園児に嫉妬して家を飛び出したのか、と。

これが桃子でなければ。

寒いのである。物理的な寒さではない。心が、である。喋る桃子からその心境を表しているかのような極寒の圧力プレッシャーが放たれ続け、それが彼にとってどれだけでも、聞き続ける、という以外の選択肢を選べるほど彼のハートは頑丈ではなかった。

喋り続ける桃子。話題はすでに脱線し、彼がどれだけかつこいのかを語り終え、さらに自分が彼にどれだけ大事にされてるのか、というところ移っていた。

もともと桃子はそれまで恋をしたことがなく明人が初めての恋人だったのだが、彼女自身はそういう面が苦手だったということもあり、誰かに自分から話すことができず不満がたまっていた。

一度謳歌がその話を振った時それが一気に爆発し、延々と愚痴ともつかぬ惚気を喋り続けたことがあつたらしく、最終的には物理的に黙らせたらしい。

こっちから聞かなければ大丈夫なんだけど、ほんと桃子は恋愛が絡んだら面倒くさくなる女の典型よね。と言っていた姉を思いだす。後の祭りだが。

普段は姉に通ずるところのある飄々としたところのある伶俐な女性なのだが、こうなってしまうては手に負えない、と台風が過ぎるのを待つ世界だった。

話が二人の出会いまで遡り終えて、桃子が一息ついたところでこの間一時間喋り続けた)、この機を逃すまいと切り出す世界。

「桃子さん！ そろそろ三人を起こして朝食にしようかと思うのですけどっ！ 一緒にどうですか!？」
「もうそのような時間ですか。ではご相伴に預らせていただくとしまししょう」

その言葉にほっと一息ついた世界は台所へ向かい朝食を仕上げにかかるのだった。

「おはよう、せつちゃん。朝から御苦労さま」

料理を机の上に並べていた世界はその声に振り返る。そこにはすでに目を覚ました長女が色気を振りまいていた。

「……早いね、謳歌姉。」
「うふ、だって桃子ちゃんが来てるしね。おはよう桃子ちゃん」
「おはようございます、謳歌。相変わらず無駄な贅肉引っ提げてますね」

と仲良く挨拶を交わす二人。

この姉、基本的に家族以外の人間がいるときはこんな感じに一人で起きることが出来るのである。

どうやって三階にいて客が桃子だと気づけたのか、とか気付いてい

たのにどうして降りてこなかったのか、とかの疑問は今更のことなのでスルーして、そのまま支度の続きを終わらせる。

斬理と神啼を起こした世界は食卓に腰を下ろす。全員が座ったのを確認してから食べ始めるのだった。

「ほう、それでは普段からせつちゃんが謳歌たちを起こしているのですか？」

「んむ、世界は優しいからつつい甘えてしまうのだ」

「そうね〜なんだかもう朝はせつちゃんの肌の体温感じないとはじまらないのよねえ」

これも調教の賜物ね、せつちゃん と嘯く長女。

「ほう、それは教師としては見過ごせませんね。朝から近親s「よいしょーと！ あんたらは神啼の前でなにを言ってるんださっきから！」

「うふ ごめんねえせつちゃん」

「謳歌のせいで生徒に怒られてしまったではないですか」

「しかし調教とは言い得て妙だな姉さん。たしかに私たちは世界なしでは生活していけない身体になってしまったのだから」

「あら〜キリちゃんったら大・胆・発・言」

「ほう、それはなかなか興味深いことを

いつも以上に混沌と化していく空間だったが、しかし、もはや仏のような穏やかな表情を浮かべた世界は神啼と二人穏やかに朝食をとるだけだった。

「ふう、やはりせつちゃんを作る料理はおいしいですね。明人さんの手料理にはかなわないですけど」
「でしょ〜。一家に一せつちゃんよねえ」

と訳のわからない会話をする二人にお茶を渡して世界はソファアに座る。

斬理は世界から受け取ったお茶をすすりながら話を振った。

「ところで、世界は今日はどうするんだ？」

「ん？ ああ、今日は少し出かけるよ。鬼心きしんたちと会う約束してるから」

と学校で鬼心と二人で最近評判の紅茶のおいしい喫茶店に行く約束（紅茶のいれ方の研究のため）をしていたところ、いつのまにか三葉つばと玉藻たまもも付いてくることになったのを思い出す。

お兄ちゃん、お出かけ？と問いかける神啼の頭を斬理が撫でる。

「ああ、世界も家のことばかりではなくたまには学友と親睦を深めてきたらいい」

神山家の家事を一身に背負う弟に優しい目を向ける姉に、それはそれで楽しんでただけだな、と苦笑を浮かべる世界。

「ああ、断花たちばなたち、ということたつなみは龍波も来るのですか？」

「あら、たしかあの可愛らしい子だったわよねえ？」

「ええ、せつちゃんに弄ばれている健気な少女です」

「なに？ 世界よ。おまえは私たちだけでは飽き足らずそのようなことを！」

「え？ ちょっとまって？ どこから突っ込めばいいのそれ？」

「お兄ちゃん、弄ぶってどういう意味？」
うふ、それは、こら姉ちゃんそんなことを神啼に
せっちゃんも男なら女性を待たせすぎてはいけませ、世界、
まだ私の質問に答えて。

こうして彼にとっての苦難の時間は、彼が涙を流して家を飛び出す
直前まで続いたとか。

少数意見報告

「らっしゃい。連れなら奥だよ。」

「ありがとう、店長。」

「やあ、久しぶりだね世界。すこし背が伸びたかい？」

「久しぶり、明人さん。そうかも、姉さんたちには日ごろから叩いて伸ばしてもらってますから」

「ははっ、それはまた。謳歌君たちは相変わらず元気みたいだね」

「はあー、いやほんともう元気すぎて毎日退屈しなさ過ぎなんですよ」

「いいことじゃないか。退屈は人を殺すっていうしね」

「まあ、確かに、あの人たちといて飽きることはないですけど、ないですけどねえ？」

「お待たせしました。ウーロン茶と生中です。ご注文は？」

「ああ、いつもので頼むよ。構わないかい？」

「ん、いいですよ。」

「お任せコース一丁で。それでは失礼します」

「そういえば、この間、桃子さんと喧嘩したんですってね？　うちにかちこんできましたよ」

「それは、また、迷惑をかけてしまったね」

「いやまあ、理由は嫌ってくらい聞かされましたから。……明人さんも大変ですね」

「情けないことに、この年になっても相変わらず女心って分からないんだよね」

「あー俺もわからないんですよ。斬理姉の根性論とか、謳歌姉の非常識さとか」

「あ、いや、それはまた違うような……。」

「お待たせしました。こちらお造りの盛り合わせです」

「ありがとうございます。　　うむ、この生肝うめえな」

「あいかわらずいい仕事してるよね、ここ。　　そういえば相変わらず桃子がお世話になってるみたいだね。この間はお菓子を作ってくれたよ。最近は二人で料理するのが楽しみなんだよね。たどたどしい感じがまた可愛いんだよ」

「はあ、それはまた御馳走様です。まあ美人ですもんね桃子さん。

……頭に『残念な』って付きますけど」

「 そうだ。最近悩んでることがあるんですけど……。」

妹とは何歳まで一緒に風呂に入って許されるんですかね？」

「 神啼ちゃん四年生だったよね。……そろそろ拙いんじゃないかな？」

「 ですよね……。そう思って断ろうとすると、あいつ、見てくるんですよ、涙浮かべて、上目遣いで、真っ直ぐ俺の目を」

「 それは、また、なんと、抗いがたいものがあるね」

「 そうなんですよ……。あの無垢な瞳で見られて断れる兄貴なんていませんよ、ほんと。しかも最近は何だか妙に色気付いてきて、

絶対将来男泣かせな美人さんになりますよ。今でも持ち歩

きたいくらい可愛いのに」

「 はあー、ほんと呆れるくらい世界って神啼ちゃんのこと大事にしてるよね」

「 そりゃそうですよ、姉二人があらゆる意味で強すぎるんで癒やしが少ないんですよ、うちは。神啼がいなかったらとつくにゴールしてるんですよ」

「 失礼しまーす。本日の一品の店長特製しゃぶしゃぶです。」

「 今日はまた変化球で来たなー」

「 しゃぶしゃぶが出たのは初めてだね」

「 前に姉ちゃんたちと来たときはカレーがきましたけどね。美味し

「かったですけど」

「そういえば最近よく婚姻届を見かけるんだ」

「ふーん。……え？」

「ははは。いや文字通りの意味なんだけどね。朝起きたら天上に張ってあったり、いつのまにかポケットの中に綺麗に折りたたまれたり、携帯の待ち受けがそれに変わってたりとか、他にもあるんだけどね。つい最近、余命3時間の花嫁って映画見たせいでなんかそんな気分になつたみたいなんだよ」

「へえー」

「ああゆう奥手なところも桃子の可愛いところなんだけどね」

「奥手ww」

「ん？携帯が鳴ってるよ世界」

「ほんとだ。ちよつと失礼。どうした謳歌ね」

「！！」
「うわっ、な、なに？ え？ 家？ ちよ、待って！ やめてお願い！？ 帰るから！ すぐ帰るからっ。」

「なんだか騒がしいね？」

「ごめん！明人さん、そろそろ帰るわ俺っ。お金置いとくからそれじゃ！」

「あ、ちよ、

ほんと、彼と友達やってると飽きないよね。さて、帰
って桃子と飲みなおすかな」

少数意見報告（後書き）

男どうしで飲み屋いったあとって絶対会話の内容思い出せないんですよね作者。

会話の中身なぞ過ぎて。

閑話？

狂氣こころに楔を、暴力ちからに首輪を

そう、たとえ害なそうというならば神であろうと悪魔であろうと。

一方的に、圧倒的に、徹底的に、許しはしない。

この身は大逆無道、すでに人の理からも世界の理からも外れた異常。

ならば、迷う理由などこの身には存在せず。ただ、容赦なく、油断なく、全力で、蹂躪しよう。

身の程知らずな愚かものたちに刻んであげよう。

“ワタシ《さいきょう》” という言葉の意味を。

そして月の下、ただひとつこの身が約束しよう。愛する者たちに恵まれた幸せを。

太陽とピキニと俺の夏？（前書き）

太陽とピキニと俺の夏？

照りつける太陽を手で遮り、神山家長男は目の前に広がる光景へ視線を向けた。

目の前には無限に広がる蒼く輝く地平線、後ろを振り返れば青々と生い茂る木々。

「……どこだここは？」

ここにいる理由も、ましてやここがどこかすらも検討のつかない彼は、まだ夢でもみているのか？と首を捻る。が答えは見つかりそうにはなかったので椅子に座り（なぜかパラソルと椅子がひと組置いていた）昨晚の記憶を掘り返してみることにした。

いつものように食事を済ませたあと、ソファアに座って、世界が焼いたアップルパイと最近勉強し出した紅茶を味わう四人。

「ほう、紅茶はあまり飲まなかったのだから、これはなかなかいいものだな」

「うふん、さすが私のせつちゃんね。いつのまに紅茶のいれ方で覚えたのかしら」

「アップルパイ、おいしい」

家族には初めて振る舞ったものだったのだが存外好評な様子を見て世界は笑みを浮かべた。

「ああ、『猫の瞳』って喫茶店のマスターに最近教えてもらってるんだ」

世界はとあるきっかけでそのマスターと知り合い意気投合した結果お菓子のレシピを教える代わりに紅茶のいれ方を教えて貰うようになったのだと、簡単に経緯いきさつを語る。

「ほう？ 世界、その人も女性なのか？」

え？ そうだけど、と何故か視線を鋭くした斬理に腰が引ける世界。

「あらあら、せつちゃんたらほんと手癖が悪いんだから」

「何人目？」

「え？ ちよつと、な、なにこの空気？」

一人娘に初めて彼氏を紹介された父親が醸し出すような緊張を孕んだその空気に世界は戸惑う。

え？ 今紅茶の話してたんだよな？と。

「うむ、先輩、後輩、同級生と世界にも付き合いがあるだろうからそこは我慢しよう。だがっ、だがしかし！ 最近の世界の交友関係の爛れ具合は目に余る！」

「そうよねえ」。大学生に高校生、人妻に小学生に教師に今度は喫

茶店のマスター。うふっ　このままどこまで行っちゃんのかしら、せっちゃんたら」

「いやいやいや！　それってあれだろ？　ただの顔見知り程度な人たちも勘定に入れてるだろ？」

「私の学校でも先生がお兄ちゃんの事褒めてた」

毎朝、神啼を包容力溢れる笑顔で送るその姿は、先生や保護者の間で好評を博していた。

「ああ、私のクラスでも何故か世界のことを度々話題に上がるのだ！」

これは単純に異性のいない女子校という環境で斬理が一日一回世界の素敵エピソードを語るのが原因であるのだが生憎と彼女は気付いていない。

「料理ができて包容力があつて家族にも優しくできる中学生って、年上のお姉さま方に評判高いのよせっちゃん」

よかったわねとハート付きでウインクを飛ばす謳歌。

「え？　なにその具体的な評判」

「ほかにも家事が出来て女性の扱いも心得ていて、しかもいじられるよりいじりたいなんて、せっちゃんたらやらしいわ」

「謳歌姉？　なんだか謳歌姉の話だけ作爲的なものを感じるの俺の気のせい？」

それにうふふとアルカイツクなスマイルで返す謳歌。

こうして世界もまた、自身が与かり知らぬところで、神山家の一員として名を轟かせているのであった。

そんな楽しそうに話す（斬理視点）二人に話は終わってない私も混ぜると斬理が加わり、それを見た神啼が取り敢えず自分も、と世界に飛び付く。

しばらく会話での抵抗を続けた世界だったのだがなぜか彼が三人に対して一日強制従僕権を発行させられる形で丸め込まれるのだった。合掌。

その後、悲しみに打ち震える長男を三女が慰める横で長女と次女は引つ張り出してきた人生ゲームで白熱しているという、神山家ではいつも通りの一日が過ぎていくのであった。

回想終了。

いつも通り歯を磨いて神啼と就寝したところまで回想し終えた世界は結局何も分からなかったなど、溜め息をついて、空を仰ぐ。

「せめて、自分で着替えたかったよ」

海パンのポケットに手を突っ込み、やけに日差しのおしみる両目を抑えて黄昏れる少年がいたとか。

太陽とピキニと俺の夏？

それは、只人^{たたひと}にとっては異様な、いやさか異常な、理解など及ばぬ光景であつただろう。

海が割れるという現象が、眼前に生み出されたのだ。

まるでモーゼの滝を再現したのだともいうように、まるで見えな
い仕切りが差し込まれたともいうように分かたれた海面。

それは等しく人類と呼ばれる存在には決して届くことなどできな
い領域であるからに、それを成し遂げた、眼前の光景を生み出した
というのはまさしく人類を超越した存在で

「おお！目が覚めたか世界！ いやまったく久々の海だから年甲斐
もなくはしゃいでしまったんだ」

次女であつた。

はっはっはっ、と向日葵のような笑顔を浮かべる少女はその健康
的な美しさを秘めた肢体を赤い競泳水着で包み、肩に鯨を担ぎ片手
に木刀を装備した姿で元の形に戻ろうと荒れる海の中を平然と歩い
てくる。

「斬理姉、いくら楽しいからって海に木刀持ち込むなって毎年言ってるだろ。あと鮫を素手で捕るとか女子高生として正直どうよ?」

海が割れた事実に関しては驚きはしたものの、そういうこともあるだろうと考えている。

そのような自分の持つ常識では計り知れない超常的ファンタジーなことはこの世界ではよくあることなのだ。

苦節一四年、その程度の非常識は少年の常識となりつつあった。

「む、いや、そうは言ってもだな、私たち以外他には誰もいないのだし、今日くらい構わんだろ? あと今時の女子高生は自衛手段をひとつは必ず所持しているものだ」と鱗火も言っていたしな」

いや、鮫を撃退できる今時の女子高生はそういないだろ。いないよな?と一人問答する世界。

「、そういえば聞いてなかったけど、ここって何処なんだ?」
「ん? ああそつえば世界は眠らされて連れてこられたんだっとな」

何か言い回しに違和感を感じたが今は先を促すことにした世界。

「なんでも姉さんのバイト先の偉い人が所有している無人島らしくてな、姉さんの後輩が飛行機を飛ばしてくれたんだ」

「 、いつのまにそんな話してたの？」

「うむ、昨日人生ゲームをしていたときに熱くなりすぎてな、だから姉さんが海に行きたいと言い出して、そのあとどこかに電話していたぞ？」

「人生ゲーム関係ねえのかよっ！ だからってなんだよっどんな流れだよそれっ！？ いや、じゃなくて、謳歌姉、電話一本で

……まあ謳歌姉、だもんな」

このようにして彼の常識は徐々に周囲の色によって染められていくのであった。

それから太陽が真上に上るまで、泳いだり、追いかけられっこしたり、泳いだりして遊んでいた二人は現在パラソルの下で休んでいるのだった。

「むう、情けないぞ世界。あの程度でへばるとは」

「 オエエエ、ゼエ、は、はっ ……」

唇をへの字に曲げて不満をもらす斬理に、四つん這いになって息も絶え絶えな世界は返事を返す余裕などなく、ただただ自身が再び大地の上に帰って来れた喜びに涙していた。

「あらあら、キリちゃんったらまたせつちゃんのこと苛めてるの？ ダメよ、苛めるだけじゃ男の子は満足してくれないわよ」

そんな二人に声をかけたのはいつの間にか少年の傍らに立つ謳歌である。

男が見れば確実に前屈みになるような妖艶な色気を孕んだ肉体を、黒のビキニだけで飾った美女は黄金色の髪アスモテウスの輝きも相まって、まるで色欲の化身すら超越した凶悪さである。

「む、姉さんか。別にそんなつもりはなかったんだが。……世界と二人で遊ぶのは久しぶりだったから楽しくて」

普段は凜々しい少女が拗ねたようにそんな言葉を呟く。

そこだけを聞いたなら初々しい少女の言葉に胸がキュンキュンさせられるのだろうが、実際、十キロ以上の距離を、木刀片手に追いつがる姉に泳がされた世界からすれば不幸以外の何物でもなかった。それを当然理解していたのだろう、せつちゃんたらほんとに脳筋なんだから　という囁きが謳歌から漏れた。

「おお、少し離れてるうちに何だかすごいシユールな光景になってるっすね」

そんな謳歌の後ろから神啼を肩車したまま歩いて来た女性はパラソルの横で倒れ伏す少年と椅子の横に天を突くように地面に刺さった鯨を見て驚く。

謳歌の大学の一個下の後輩で、身長は斬理より少し低い百六十程。青色の髪はショートヘアで、今はシュシュを使い後頭部で一つに纏められている。女性というより少女のような可愛さが先立つ容姿をしており、控えめな胸元を隠すのは黄色のツーピースタイプの水着で下は短パンを履いていた。

「……ん？ あなたは？」

死地から帰還を果たした世界が、妹を背負う彼の記憶にない女性に問いかける。

「こんにちは、弟君。アタシは夜久やぐ 麒麟きりんって言います。謳歌先輩には大学とバイト先の両方でお世話になってるっす。噂の弟君と妹ちゃんに会えて光栄っすよ」

「……。あー、こちらこそよろしく夜久さん。神山 世界です。神啼が随分迷惑かけてるみたいで」

『バイト』『噂の』という部分は受け流した世界は起き上がってから挨拶を返し、麒麟に担がれたままの妹の頬を摘み、むにむにする。荒んだ心が癒されるわ とか考えている。

「い、いえいえ、むしろご褒美というか、ジウルツ。あと麒麟でいいっすよ弟君」

「あ、そうですか？ じゃあよろしく麒麟さん」

神啼に手を伸ばしたせいでいきなり包容力全開の世界の笑顔の間近で見ることになった麒麟は、これが先輩の『絶対者の妖笑アブソリュート・スマイル』と双

壁を為すと言われている神山の最終兵器、アルティメット・ウエボロンギヌス・スマイル『神墮としの微笑み』っすか!?!と恐れおののく。

世界を上目づかいに覗き固まる麒麟へとそつと歩み寄った謳歌は、後ろから神啼を抱き上げ世界へと渡す。

嬉しそうに兄に飛び付く末の妹とよろめきながらもしっかりと受け止めて困ったように笑う弟を楽しそうに眺める謳歌は、視線はそのままに麒麟の肩に手を置く。

「うふっ、ダメよ麒麟ちゃん　せつちゃんの優しさをあんなに近くで感じるなんて。いくらあなたの絶対防御でもあの子のあれは防げないからねえ」

あと手を出したら摺り下ろしちゃうから

反対の肩には斬理の手が、

「うむ、世界の本質は大きく善性に傾いているのだが、それゆえに本来はそれほどでもないはずの能力が他者に与える影響を大きくしているみたいでな、つまり」

勘違いするなよ麒麟さん。

両肩にのしかかる圧倒的なまでの圧力に、麒麟はただ、全力で首を縦に振ることしか許されなかったのであった。

太陽とピキニと俺の夏？

昼食は謳歌がとってきた肉と新鮮な鮫をみんなで美味しくいただいた。

食後、背中によじ登ってきた神啼を腹に抱えなおして、そのままパラソルの下でぼんやりしている世界。朝からはしゃいで疲れたのか神啼はすでに寝息を立てており、天使のような寝顔をのぞかせている。世界はそんな妹の頭を撫でながら、二人の姉と遊んでいる麒麟を見つめて仏の微笑を浮かべる。

決して身代わり乙とか助かったとか考えているわけではないのである。

麒麟が遊び疲れてぼろ雑巾のように浜辺に打ち上げられたころ、
ようやく満足した謳歌は世界の横に腰を下ろした。
みに斬理はもうひと泳ぎすると言って沖に消えた。
ちな

あはー といった（珍しく）満面の笑顔を浮かべている女王様な姉に溜め息がもれる。

「つぶ、溜め息ばかりついてたら幸せが逃げ出しちゃうからお姉ちゃんが口塞いであげようか？」
もちろん、唇で、だけど。

と言つて、一転、艶やかな笑みを浮かべた謳歌が世界に問いかける。

隣に広げられたシートの上で舌なめずりして妖艶な空気を撒き散らしている姉にげんなりとしながらも

「遠慮しとくよ」

とだけ返す世界。

あら残念、という声を耳に入れながら胸の中で眠る神啼の頭を撫でる。

しばらく、二人は並んでぼんやりしていたのだが、ふと、思いついたままに言葉を零す世界。

「たまには、こうやって何もせずにくっくりするのもいいもんだな」

ありがと、姉ちゃん。

と、視線が絡むことはなかったけれど、優しく妹を見つめている弟の、何てことのない、他人が聞いていたならばなんて月並みなお礼といわれてしまうような、しかし、その一言が聞けただけで、神山謳歌が神山謳歌足る理由としては充分で、それゆえに浮かべた微笑みは心からのもので、だからその横で弟が顔を背けたのは必然だったのだろう。

しばらくして、なんとか復活した麒麟を交えて談笑していた三人。そこに、満足したのだろう斬理が帰還を果たす。時刻はすでに太陽が沈み始めた頃だった。

「それじゃあ、そろそろ宿に移動しましょうか？」

「そうっすね。アタシもうヘトヘトですよ。早く風呂につかりたいっす。ここのはスゴいって支部長が自慢してるの聞いたことありますから」

「ほほう、それは期待しておこう」

「　　なんだ、日帰りじゃないのか？」

当然のように語り出す三人に眠ったままの神啼を背負った世界が問いかける。

「ええ、海岸沿いに歩いて行ったところに宿があるのよ。午前中に見てきたけどなかなかイイところだったわよ。特に五人で寝れるキングサイズのベッドとか」

「今からなら日が沈む前にたどり着きますね。ほら弟君ものんびりしてたらダメっすよ」

了解、と返した世界は神啼を背負い直し、前を歩く三人に続いたのだった。

「宿？」

それは宿と呼ぶにはあまりにも巨大に過ぎた。

それは、何かを招くためではなく、迎え撃つためのもの、あらゆる華美を削ぎ落とし、無骨なまでに機能だけを追求した。まさに

「宿というより要塞って言った方が正しいかもしれないっすねー」

そう、要塞であった。

それは岩壁を背負い、おおよそ島の三分の一を覆う景観はまさに圧倒的で、何者も侵すことの出来ない気配を纏っていた。

「まあ、戦前に使われていた骨董品で今は半分の機能も使えませんから、アタシたちの間では今はほとんど別荘代わりに使われているのが現状なんですよ。だから宿っていうのもまあ間違っではないんですよ」

突っ込みたいことは色々あった。戦前ってこんな海のご真ん中で何と戦ってたんだよとか、残り半分の機能は健在なのかよとか、アタシたちって誰だよとか、支部長ってなにもんだよ、結局あんたら何のバイトしてんだよ、なんて疑問ともつかぬ疑問が駆け巡っていた世界だったのだが、

「そうか、こんなけデカけりゃさぞ立派な台所もあるんだ

ろくなー」

と、背中の中の神啼を背負い直し歩き出す。

おお、スルーしたつす。

うむ、スルーしたな。

あらあら、せっちゃんたら遅しくなつて

彼が悟りを開くのもそう遠くない未来のことかもしれない。

太陽とピキニと俺の夏？

宿の中は外観とは違い、麒麟が言っていたように、時折人が訪れて使うということからか、綺麗なものであった。所々に案内板があったりとなかなか親切設計だったりする。

一行はひとまず今晚一泊する部屋に向かうことにしたのだが、まあやはりというべきか、その部屋割りで一悶着する事になったのが無駄に長いのでここは割愛する。ただ末っ子の一言で姉二人が陥落したとだけ記しておく。

結果としては、世界、麒麟、神啼と斬理と謳歌の三部屋使うことに決まった。

「おお、すげーな！。見た目はあれだったけど中はすげーな！」

語彙の少ない男である。

「満足してもらえたみたいですね。」

きよろきよろと部屋を物色していた世界に、入口から麒麟が楽しそうに声をかける。

「よかったら厨房まで案内しますけどどうします？」

「あ、そうですね。そろそろ準備したいですから、お願いします麒麟さん」

厨房という言葉で一旦落ち着いた世界。

「すぐに着替えるんで少し待つといてくれますか？」

と先頃謳歌に渡された荷物を指す。

その言葉に、麒麟は、

「はっ、はわ！ わ、わかつたつす！？ ごゆっくりっ」

と顔を赤く染め、鼻を押さえて、部屋の外に飛び出していく。

その視線が、彼のいつの間にか着替えさせられていた水着へと向けられていたなんてことはないのである。

彼は溢れそうになる涙をこらえて着替えることにしたのだが、開けた荷物の一番上に今朝まで履いていたはずのパンツが乗っていたことに、“謳歌から”手渡された、というフレーズを思い浮かべて、膝から崩れ落ちるのであった。

「お待たせ、麒麟さん。」

「そ、それじゃ案内しますね？」

廊下で待っていた麒麟は無駄に爽やかな笑顔を浮かべる世界にたじろぎながらも返事を返す。

夕焼けが差し込む廊下に二人の声が木霊する。

「そうだ、姉さんたちはどうするか聞いてます?」

「ああ、先輩たちなら待たせるのも悪いので先に風呂にいつてもらってらっす」

「そうなんだ。麒麟さんに悪いな、わざわざ案内してもらって」

「あ、いえいえ。そんなことないですよ。アタシはあとでもいいですから。」

あの三人と、一緒に入ると、女としての何か大切なものを見失ってしまいそうっすから……」

ナニを想像したのか、なだらかな胸を押さえて落ちこみ出す麒麟。

「あー、まああの人たちと比べたらね」

そんな麒麟の様子をみて苦笑する世界。

「俺からしたら麒麟さんも可愛いつて」

「うっ、本当っすか?」

「ほんと、ほんと。俺なんてあの人たちとおんなじ血入ってるはずなのに普通だしさ」

「そんなことないっす。弟君の優しさが胸に染みるっす」

「大体あの人たちは規格外すぎるから

大学生を慰める中学生という図は厨房にたどり着くまで続いた。

「はー、これはすごいな。」

一瞬自分の家の台所と比べてしまつて、その広さに驚く庶民な世界。

「ふふつ、満足してもらえたようですね。食材は色々ありますからその中から好きなだけ使つてもらつて結構つすよ」

「それはまた。んー、そうだな今日は和食にするかな。海の幸もこれだけあるしな」

冷蔵庫の中を見渡しながら呟く世界。

「はー、ほんとに何でも作れるんすね？」

「まあ、何でもつてわけではないですけど、趣味と実益も兼ねて昔からやつてますからね」

その純粋な感嘆の言葉に、少し照れた笑いを浮かべる少年に麒麟も笑顔が浮かぶ。

「それじゃあアタシもお手伝いさしてもらいます。これでも一人暮らし長いっすから少しは心得てますし」

「でも　　いえ、それじゃあ宜しくお願いします麒麟さん」

その言葉に花のような笑顔を浮かべた麒麟は、世界と共に支度をはじめるのであつた。

大方準備を終えた二人は食事前にシャワーだけでも浴びておこう、という世界の提案で部屋に備えつけの風呂へ向かう。

世界も部屋に戻りタオルを持って風呂に向かう。そこで備え付けでこの広さかよつ、とひとしきり驚いた後、体についた塩を洗い流し

一息ついてから厨房に向かう。姉たちは麒麟が呼んでくると言っていたので先に料理を仕上げてしまいかと、仕上げに取り掛かるのだった。

食堂についた謳歌たちは並んだ料理に黄色い声を上げる。

「あらあらあら、おいしいそうねえ」

「むん！ 早く食事を始めよう」

「お兄ちゃん、お風呂綺麗だった」

風呂上がりの湿った色気を振りまく謳歌、既に席について周りを急かす斬理に、兄に飛びついて嬉しそうに報告する神啼。

「もう仕上げてしまったんですか、弟君。手伝うつもりだったんですが」

麒麟は少し残念そうにそんな世界に近づく。

「いやいや、充分助かりましたよ。麒麟さんのおかげで随分楽できましたから」

と笑顔で返す世界に彼女も笑顔になる。

「あらあらあ、随分仲良くなってるのねえ麒麟ちゃん？」

神啼を挟んで和やかな雰囲気二人に謳歌が近づく。

「ほあっ！　ち、違うつすよ先輩！？　別に下心なんてないっすからっ」

その綺麗な微笑みを見て冷や汗を流す麒麟。そんな二人を見て世界は溜め息をこぼした。

「ほら、謳歌姉。麒麟さんからかうのもそのへんにしときな」
「うふ、せつちゃんがそう言うなら」

謳歌をたしなめて、半泣きで感謝する麒麟に苦笑してから、抱きついたままお腹に頭をこすりつけている神啼の頭を撫でる。

「斬理姉が待ちくたびれる前に食べようか」

一人席に着いた、腹の減り具合と比例して段々目つきが険しくなってきた姉の下にむかうのだった。

太陽とピキニと俺の夏？

「話には聞いてましたけど、ほんとに美味しいっすね。こんな美味しい料理毎日食べてたら舌も肥えるっすよ」

豪華絢爛と呼ぶに相応しいそれらを人通り味わった麒麟がそうばやく。

「そうでしょう。そこらの有象無象じゃもう私の体を満足させることなんてできないもの。さすがはせつちゃん　て感じよねえ」
「私、お兄ちゃんのお嫁さんになって、毎日お兄ちゃんのご飯食べる」

「あらあら、これは随分強力なライバルが現れちゃったわねえキリちゃん？」

「むう、神啼だったらしょうがない。なら私は第二婦人で我慢しよう。そのかわり一日三食世界の手作りを食べさしてもらおう」

「ならあ私は愛人でいいから、せつちゃんの手料理食べさせてね」

「あ。アタシはメイドでいいっすから賄いで構わないですよ」

「……いや、あんたらどんだけ食い意地張ってんだよ」

食後の談笑をほどほどで切り上げた世界は一旦部屋に戻ったあと、大浴場の方へ向かった。

「はあー、確かにこりや凄いな」

世界は更衣室から浴場に続く扉を開けて周りを見渡す。

鼻をかすめる硫黄の香り。

おそらく自然の洞窟そのものと天然の温泉を使って造られたのだからそれらは圧巻の光景であった。

「　　なんか今日一日驚きっぱなしだなあ」

身体を洗って二十程ある風呂をめぐった世界が最後に訪れたのは浴場の一番奥、洞窟を切り抜いて造られた露天風呂。そこにつかりながら吐息を吐き出す。

そして自分の中の、既に色褪せ始めた記憶を掘り起こす。

何も特別なことなんてなくて、少しの友達と、彼女と、両親と。

そんな凡庸な人生を、ほんの一握りの幸福さえあれば満足出来ていたもう一人の自分の人生きおくを想起する。

世界は一度お湯で顔をぬらした後、無数の星が散らばる夜空を見上げ、溜め息を零す。

「……俺も随分欲張りになったもんだな。もうたった一握りじゃ満足できないなんて。身の程もわきまえずに両手いっぱい幸福を、

なんて」

ふう、と一息こぼし、感傷的になり過ぎだな、柄でもないのにと頭を振る。

ただ、その感情が自分にとっては望ましいものだとも感じていたから、だから彼は一人、星を着に苦笑を浮かべた。

久しぶりに二十年分の記憶巡りなんかをしていたためにいつもより長く風呂につかっていた世界は、のぼせ気味の頭を振り出口へ向かうのだった。

なお、少年が入ってることを知らずに訪れた女性が、出てきた彼と遭遇しかけ慌てて隠れた後、鼻血をこらえて中学生の生着替えを覗いていたことを少年は知る由もない。

さらにその後ホクホク顔で部屋に戻った女性が地獄を見ることになるのだが、それも少年には関係のないことであった。

朝、いつもより広いベッドの上で目を覚まして少年は一人分の温もりが足りないことに少しの寂寥感を覚え、自然とそんな風に考えていた自分に苦笑を浮かべる。そのようなことを考えな

がらも体は自然と動き、軽くシャワーで汗を流した世界は厨房へと向かう。

前日に通った廊下を一人で歩く。昨日は感じなかったけど一人だとなんだか寂しいなー、と朝日が差し込むガラス張りの天上を見上げて思う世界だった。

厨房にて、朝の支度をするために冷蔵庫へ手をかけた世界は、視界の端に映ったそれに一瞬固まり、盛大に溜め息を吐き出した。

「何、してるんですか？ 麒麟さん」

「……うう、お、はよう、ございます弟君。これは、アタシが、悪いんです。だから、罰を受けるのも当然です。……アタシワルイコ」

簀巻きにされてぼろぼろになって転がされていた麒麟はハイライトの消えた瞳で呟く。

スイマセンスイマセンもうしません、と繰り返す麒麟に若干引きながらも取り敢えず縄を解いてやる。

ああこんなワルイコのアタシにも優しくしてくれるなんて弟君の優しさは天井知らずです、と呟きながら妙な輝きを宿した目で見られ冷や汗が浮かんだりしながらもなんとか解き終え、支度を手伝うと言う麒麟を風呂に送り出して一息ついた世界。

朝から右肩下がりの気分を切り替えて今度こそ朝食にとりかかるのであった。

麒麟は昨晚の恐怖体験をここの奥にしまいこんだあと、部屋に備

え付けのお風呂で体と心の汚れを入念に落として食堂に向かった。そこで弟に叱られる謳歌と斬理という、彼女らをよく知る人物たちからしたら驚天動地な光景を目にしたり、それを見てアタシの為に？ すごいっすもう一生ついて行くっすとかやっていたりしたのだが概ね普段どおりの賑やかな朝食を済ました四人と一人。

食後の片付けも終わり、いつも通り長男の入れたお茶と朝食のついでに焼いたお菓子を食べて一服した後、帰宅の準備をすませた一行は昇降機を使い外へ出た。

そして、そこに威風堂々と佇むそれに世界は疑問を呈す。

「これで、帰るのか？」

「はい！ そうっす。アタシの相棒のアパッチャンです」

「いや、確かこれって軍用ヘリじゃ……。こんな飛ばして大丈夫なのか？」

「うふ 大丈夫よせっちゃん。いざとなったらお姉ちゃんがいるから」

「……いや、頼もしすぎるだろ姉ちゃん」

「先輩がいれば確かに何が起こっても大丈夫ですけど。心配しないで大丈夫っすよ弟君。アタシたちは基本的に領空圏の侵入は無制限許可されていますから」

「え？なにそれ怖いんだけど」

何やら物騒な単語が飛び出してきたことにどん引きする世界を斬理が力づくで抱っこしてそのままヘリに乗り込む。全員が乗ったことを確認した麒麟は機体を飛ばして、島を後にすた。

こうして、彼らの短くも刺激的な夏のバカンスは終わりを告げるのであった。

少女Mの独白

私が彼のことについて語るとするなら、それはやはり二年前まで遡ることになるだろう。

とは言え、出会い頭に曲がり角でぶつかったりとか、再会したのは遠くの町に引っ越したはずの幼なじみだったとか、前世は恋人同士だったりなんて、そんな物語で語られるような特別な出会いなんてことはなく。

彼と初めて出会ったのは小学校六生年のときだった。

当時、所属してい図書委員の仕事として、昼休み、図書室で本の貸し出しの受け付けを行っていた私は　　と言っても仕事なんてあってないようなもので、時間中、本を読んで過ごしていた

そこで彼と出会った。ただ、本の貸し出しのために事務的な会話を二言三言交わしたただけであっただけけれど。

だから、それは出会ったというよりも思い出したといった方が正しいのかもしれない。

彼が借りていったのは料理のレシピ本（小学校の図書室に置く意味がわからないような専門的な）で、それを見て、そのときは意識の端にもとめていなかったのだが、以前にも料理本を借りて行った珍しい男子がいたことを思い出した。

そうして一度意識にあげてみれば、その男子が来たときはいつも図書室の端っこの目立たない席に座っていることや、料理の本だけでなく、ときには家計簿の付け方の本や歴史の本だったり、果てには猛獣の飼い慣らし方と銘打った本まで、いろんな種類、と呼ぶには実用的過ぎる本ばかりだったが、を読んでいることや、右利きであることや、周りに比べて妙に大人びたところがあることや、言葉を交わすときにはちゃんと目を見て話すこととか、深みのある瞳が魅力的なこととか、どうすれば笑顔になってくれるのかとか。

気付けばいつも彼のことを観察している自分がいた。

胸に宿ったその曖昧な気持ちに名前がついた出来事も些細なことだった。

それからひとつの季節が過ぎたとある日の昼休み、図書室に訪れた彼を、いつも通り本を読みながら横目で眺めていた私。

その彼が何冊か本を抱えてカウンターへとやってくる。少しの緊張感と共に本を受け取り、登録番号と名称、そして既に覚えてしまった彼の名前を帳簿に書き込む。

それで、後は本を渡して終わるはずだと思っていたのに。

本を受け取った彼の顔には苦笑が浮かんでいて、そんな顔もするんだ、なんて呆ほうけていた私は、

雰囲気変わったと思ったら、そうか、眼鏡変えたんだ。

その言葉に、

見ていてくれたのだと、自分だけじゃなく彼も。

そこに思い至った後のことはよく覚えていない。気付いたときには彼は既に帰っていて、少し冷静になった私は自分の気持ちにようやく気付き一人カウンターの裏で悶えることになった。

数年後にそのことを本人に尋ねたところ、あまりにも緊張しているようだったので見るに見かねて話しかけてくれたらしいと苦笑交じりに聞かされた。

まあつまり、そんな何でもない一言で自分の気持ちに気づいた私は、そのときにはもうすでに、完璧に彼に参っていたということなのだろう。

これが始まり。

そして今はまだ持て余しているこの気持ちを、いつか彼に伝えることができれば。

「つまりだな、私は」

「はいはい、もう聞き飽きたわよその話。そんなに好きならとつと告白するなり押し倒すなりすればいいでしょ。胸でも揉ませたらいくら枯れてるあいつでも襲ってくれるんじゃない？」

「お、押しっ、胸！？ ふ、ふん。だ、だからタマはダメ

ダメなんだ。男女交際するのは手順が大切なんだよ」

「……。あいつがあんたのこと見るときいつも、娘を見るみたいな目をしてるの気づいてる？」

「、え？」

「さて、帰りましょうか」

「ちよっ、ま、待てよタマ、どういづことだよそれーっ！」

少女Mの独白（後書き）

友達以上にはなれない宿命を背負った少女M。

俺と彼女と校庭で

神山世界は困っていた。

どれだけ困っているのかというと、手前の部屋でセーブしてからラスボスに挑んだら歯が立たずレベルを上げてやり直そうと思ったらセーブポイントのある部屋から前には戻れずレベルを上げることが出来なくてどうしようもなくなったときくらい困っていた。

クラスでいつもの三人と別れた世界は桃子の料理指導へ向かう。普段通り一時間ほどで終えたあと、意気揚々と手料理を胸に抱えて去って行く教師を見送り彼は今晚のメニューを考えながら下駄箱へと向かう。それから、

校庭へと足を踏み出し、視界に映った人物を見て彼は溜め息をつきそうになった。

「なんや？ えらい景気悪い顔しとんなあ後輩」

あかしろ
赤白 黒子。

長い黒髪を二つに結って後ろに流し、剣道着を身に付けた長身の少女は、竹刀を肩に担ぎ校庭の真ん中で背を向けて立つ。凜としたその声はそれほど大きくはないはずなのに離れた位置にいた世界の下まで届いた。

顔だけこちらに振り向き口角を釣り上げた黒子に世界は我慢出来ずに溜め息を吐き出してから諦めたように歩き出す。

黒子の側まで近付いた世界はその背に問いかける。

「景気悪い顔なのは生まれつきですよ。で、赤白先輩はこんなところで何してるんですか？」

世界が側に来るのを待っていたのだろう、その声に答えるように振り向いた黒子。

「なに、少しばかり空見てただけや。世界こそ、吉夜須先生きちやすとの蜜月の時間は終わったんか？」

「……なんで知ってるんですか。そんな話、先輩にした覚えはないんですが」

「お天道様がなんでもまるっとお見通しするんは当たり前やろ？」

「いや、そんな分かるだろ？ って顔されても困りますから。あとですね、そんな楽しそうな時間を過ごしたなんて事実是一片たりともありませんからね」

「後輩がそういうならそういうことにしとこか。しかし、なんであんたはそんなに普通なんやろなあ。いや、違っんよなあ。黒のなかに混じっても白いままの色を保ったとるんは普通とは言わんか」

「……はあ。先輩はいつたいなんの話してるんですか？」

にやにや笑みを浮かべて冗談を言っていたかと思えば、突然前後の文脈を完全に無視した会話と呼ぶには自己完結し過ぎている黒子の言葉。

世界は、その何か自分のこと？を例えているのだろう言葉の意味が理解できず、思ったままに疑問を呈す。

「ああ、気にせんでええよ。あんまり干渉し過ぎたら怖い怖い女王様が出て来よるからなあ。あんたも核爆弾と素手で喧嘩なんかしたくないやろ？」

「は？ 核爆弾？……なんの例えか知らないですけど前提条件で勝負にすらならないでしょそれ？」

だって手出した時点で負けてるじゃないですか、という言葉に黒子は思わずといったようにくつくつと笑い声を上げる。

「なんや後輩、ようわかつとるやんか。まさにその通り、あの女王様に敵と定められた時点で容赦も慈悲もなくチエックメイトや、ゲームバランス壊しすぎにも程があるよつてなあ」

「？ はあ、えらく怖い女王様もいたもんですね」

まあそのゲームメイカーたちを手懐けとるあんたが一番怖がられてんやけどなあ、と口の中で転がした言葉は少年に届く前に消える。

いきなりくつくつと笑い出した黒子を前に、また訳の分からんこと考えてるんだろなあと溜め息をつく。会話と言つには一方通行で自己満足に過ぎるきらいがある黒子との言葉の応酬。彼女は時折、

そのようなこちらの理解の埒外にある部分で物を見て話すから。
だから。

まあでも、だからと言って黒子を前に回れ右して逃げ出したりなんかしたら後が怖過ぎる。

なので、彼女と遭遇した場合は潔く諦めて彼女が満足するまで話に付き合うことにしている世界。

「
ところでやけど、後輩は剣けんと拳けん、どっちの方が好きなんや？」

「いや、正直どっちも勘弁して欲しいです」

「そないに嫌そうな顔すんなや。なんや嫌な思い出でもあるんか？」

その言葉によって喚起される幼少時の記憶トラウマたち。
主に姉とか姉とか姉とかとの幼少時代の思ひ出。

目を泳がせる獲物に、狙いを定めたかのように黒子はいっと笑みを浮かべる。

本日の彼の戦いは、未だ終わりを見せることはなく。

カレーと雨と蛙の歌

神山世界は割と静かな時間を好む性質たちである。と言っても騒がしいのが嫌いな訳ではなく、それと同じくらいに静閑な時を好んでいるということである。どうでもいい話である。

日曜日の午前九時。

朝食を並べていた世界はふと外を眺めて雲行きの怪しい空に、洗濯物干したかったんだけどなと眉をしかめながら、今日一日の予定をあーでもないこーでもないとつらつら頭に並べる。その間も手は止めず、手際良く食器を並べ終えた世界は二階の自分の部屋に向かった。

謳歌はバイトで朝早くから出かけており、斬理は部活の合宿のため金曜日から家を空けているので現在神山家には世界と神啼の二人だけであった。

部屋に入った世界はベッドの横のカーテンを開いてから、つい先頃買い換えたばかりの三人寝のベッドで眠る小さな妹の側に腰掛ける。近頃涼しくなってきたからだろうか、布団を体に巻きつけて猫のように丸まって寝ているその姿は妙に微笑みを誘う。

甘やかしたい。とても甘やかしたい。しかし、既に朝食の準備は終わってしまったのである。今日も心の葛藤に打ち勝った世界は、このままずっと寝かしておいてあげたいという気持ちを心の奥にしまいこんで、その強く握ったらすぐに壊れてしまいそうな華奢な肩に手を置いて優しく揺する。

「神啼、おはよ」

眠る妹を出来るだけ気持ちよく目覚めさせてあげるため、今日も兄は誠心誠意を込めて起こしにかかるのだった。

神啼と二人静かに朝食を食べ終えた後、並んでソファーに座り、何とはなしにつけたテレビの映像を眺めながらお茶を啜る。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんたちはいつ帰ってくる？」

唐突に口を開く神啼。静かに自分を見つめる妹の頭頂部を突つつきながら答える世界。

「んー？ そうだなー。斬理姉は昨日の電話で夕飯までには帰って来るって言ってたかな」

隣でコクコクと頷いている神啼を見てから続ける。

「謳歌姉は朝早くからバイトに行ったよ。夕飯までには片付けてくるとかなんとか言ってたからそれまでには帰ってくるだろ」

納得したようにコクリとひとつ大きく頷いた神啼の頭頂部を一撫でしてから世界はテレビに視線をもどしたのだった。

それからしばらく、テレビから流れる音とお茶を啜る音だけが響いていた空間に鈴の音を転がしたような美声（兄主観）が流れる。

「じゃあ今日はお兄ちゃんと二人？」

世界はこちらをじっと窺う妹と目を合わせ、「イヤだったか？」と返す。それにブンブンと顔を横に振って答える妹に苦笑したあと頭を撫でる。

「さてと、休憩終わり。やることやっってしまうとするか」

そう言つてのっそりと腰を上げた世界に神啼も続いて立ち上がる。

「私もお手伝いするっ」

袖を掴んで意気込んでいる妹に答える世界。

「それじゃあよろしく頼むよ神啼」

自分に向けて優しい笑顔を浮かべる兄を見て、神啼は自然と顔を綻ほころばした。

それから二人で部屋の掃除と風呂掃除にトイレ掃除と家事に勤しんだあと、並んで昼食の準備に取りかかるのだった。

昼食のサンドイッチを食べ終え、片付けを済ませてお茶を啜っていた世界。そういえばと、先日一番上の姉が羊羹を持って帰ってきた

ていたことを思い出す。ちょうどいいと椅子を立ち、取り出してきたそれを二人分に切り分ける。それを嬉しそうに頬張る神啼を見ながらゆっくりと味わった。

時間をかけて羊羹を食べ終えたあと、ソファーに背中を預けたまま外に続く廊下の方に視線を向け、雨で霞んだ外の景色を眺める。

「さて、と。今日の夕飯は何にするかな」

冷蔵庫の中に何が残っていたのか順に思い出していた世界は、ふとテレビに映る映像を見て、メニューを決める。隣に座っていた神啼が世界の呟きをしっかりと聞いていたのだらう、興味津々とこちらを窺っている気配に笑みがこぼれる。

「よし、今日はカレーにするか」

パーっと笑顔を咲かせる妹に苦しゅうないと頷いた世界。

「んじゃあ今から作るぞー、と台所に向かう。」

冷蔵庫から食材を出したあと、後ろに張り付いて来ていた神啼に皮むき器とジャガイモを手渡す。

「よしと。芋と人参の皮むきは神啼に任せた。二人で姉さんたちの胃袋をつならせるほどのカレーをつくらうじゃないか」

「うん、皮むきは得意っ、任せて」

さあ、やるぞー。おー。と気合を入れた後、神啼は皮むきを、世界は自分の持ちうるすべての技術を投入して料理に取り掛かるのであった。

時刻は午後四時、夕飯の支度を済ませたあと、ついでにと、お菓子を作ったり試食しすぎて作り直したりしているうちにこんな時間になっていた。

世界はお茶と作りたてのお菓子をお盆に乗せて廊下に出る。後ろからひよこひよここと付いてくる神啼と共に向かった先は庭を一望できる縁側。そこに二人して腰掛ける。

雨が地面を叩き、蛙は歓喜の歌を奏でる。それを静かに眺めるだけ。肌寒くなってきた季節に、手に持った湯のみの熱と、隣に感じる小さな温もりを感じつつ。

まるで、この世界がそれだけで作られているかのような錯覚を覚える。

湯のみを傾けその静閑に身を預ける。

ふと、膝元に重みを感じて視線を下げれば、神啼が頭を預けて寝息をたてていた。

壊れ物を扱うような優しさで妹の頭を撫でながら視線を空に戻す。遠く雨で霞んだ、厚く雲に覆われた空の向こう側を幻視する。

「……………今日も世はこともなし、ってな」

平和だなー、と小さく呟き湯のみを傾けるのだった。

しばらくして、目を覚ました神啼がよじよじと膝の上に這い登ってきたのを抱えなおして胡座の上に座らしてやる。後頭部をぐりぐりと胸元に押し付けてくる神啼。そのまま手櫛で銀の髪を梳いてやりながら、ぽつぽつと鼻歌を歌ってやつたり小話をしてやつたりしているところに、玄関から、ただいまーという大きな声が二人の下に届いた。

耳をぴくりと動かした神啼を膝の上から下ろしてやる世界。玄関の方から聞こえてくる騒がしく言い合う声に、神啼はそのまま急いで駆け出そうとして動きをとめる。そして隣にいる世界の方に視線で問いかけた。

それに苦笑しながら頷いてやれば、パツと笑顔を浮かべて玄関へと駆けだしていく。それを見送ってから庭へと視線を戻し湯のみに残った冷えたお茶を飲み干す世界。

「まったく、騒がしいなあ……」

近付いて来る姦^{かしま}しい声に、この人たちはこの世界が明日滅んでしまふのだとしても変わることはないのだからなどと、溜め息と共に咳いて重い腰を上げた世界は、空へと目を向けた。

虹色がかった雲間から差し込む夕焼けの光を一瞥して、先ほどまでの静かな時間を少しばかり惜しみ、そのまま視線を切った世界は、騒がしくも愛する家族を出迎えるために歩き出すのであった。

カレーと雨と蛙の歌（後書き）

見切り発車で始めたこの作品も気付いたら25話。
早いものですねー。

恋と風邪って似てるよねと彼女は言う

その日、私は、絶望していた。

「今の私の気持ちを文章にするなら冒頭はこれで決まりだな……」

「は？ なにいつてんのよ」

「うええー、だって神山がいないんだぞ？」

「だぞって言われてもね……。ただ風邪引いただけでしょ。明日には会えるわよ」

「明日じゃ遅いんだよっ。私の一日は神山の笑顔で始まって神山の笑顔で終わるって決めてるんだ！」

「あんたの自分ルールとかホントどうでもいいから」

友達が絶望しているというのに慰めてもくれない、このちみっこいやつの名前は白丸尾しろまるび 玉藻たまも。通称、タマである。

見た目は日本人形みたいな美少女で、長くて綺麗な髪は正直女として羨ましい。私のは癖っ毛だから伸ばしたらすごいことになるのだ。黙ってたら美少女だけど喋らしたら毒しか出てこないようなやつである。

と、今はタマのことなんてどうでもよくて、問題なのは神山が学校を休んだということ。

たった一日、されど一日。

神山に会えない学校なんて、何の意味があるというのだろうか？

「あー、神山のいない教室は色褪せて見えるよ私には。だから図書室行ってくるなタマ」

神山>>>越えられない壁>タマ 本>>>断花、私のなかの優先順位を表すならこんなところだろうか。

「馬鹿言ってるんじゃないの、この馬鹿」

「ぐえつ。げほつ、なにすんだよー！」

「成績はいいのに、どこで頭のボタンかけ違えたらあんたみたいなアンポンタンになるのかしらね」

「誰がアンポンタンだ！ 別にいいだろ？ テストの点はちゃんと取ってるし、ちょっとくらいさぼっても桃ちゃんも怒らないって。

要領悪い女は持てないぜータマ？」

「……。私このあいだ神山の好みの女聞いてみたことがあるのよ」「っ！？」

「あいつね、こう答えたのよ。女性に振り回されるのは姉たちだけで充分。結婚するなら自分のことを労ってくれて心がすり減らされることのない普通の女と普通に幸せになりたいってね」

「け、けっこん。わ、私はどうだっ、普通かタマ！？」

「あんたが？普通？ ふふ、どうかしらね？ だいたい女として見られてないんだからそれ以前の問題なんじゃない？」

「がーん。そ、そうなのかつ！？」

「ええ、間違いないわね。断言してあげてもいいけど良くて仲のいい女友達じゃない？」

「よ、よくて友達？」

「そうね、最悪娘、いえ、妹みたいに見られてるかもね」

「それはだめなのか？ 友達より近いんじゃないのか？」

「まあ、あんたがそれでいいならいいんじゃない？ 神山は妹に手を出したりすることは絶対ないだろうしね。ああ、どっちにしろ女としては見られてなかったわね？」

な、なんて女だよ、こいつ！ 本当に私の友達なのか怪しくなっ

きたよ。神山の爪の垢を煎じて飲ませたら優しさのやの字くらいは
思い出してくれるだろうか？

「ぐうっ。見てろよタマ！ 私にはまだ伸びしろがあるんだからな
！ 数年後には神山に女として認めさせてやるんだからなっ」

「ふふ、まるつきり負け犬のセリフね。それに万が一そうなたと
して、その後はあんた、あいつのお姉さんたちが控えてるのは分か
ってるの？ あのモデルも裸足で逃げ出すような美人姉妹が」

「うっ、いや、でも、」

「それに小学生の妹のほうは後光が差すくらい可愛いわよ。
神山も妹の晴れ姿見るまでは死ねないって広言してるくらいだしね」

「あ、うぐ、うえ、」

「でも、大丈夫よミツバ。あなたにはあなただけの武器
があるじゃない」

「うえ？ そ、そうなのか？」

「そうねえ。あなたの持つ最大の武器はね？ 血が繋がってないと
いうことなのよ」

「……………」

「つまりね、神山がいくらシスコンとはいえ血の繋がった家族と繋
がりたいなんて考える変態でもない限り、姉妹がどれだけ立ちはだ
かってても、最終的にはあんたの勝ち揺るがないのよ」

「そっ そうだよなっ！ 神山はシスコンだけど変態じゃな
いから大丈夫だよな！」

「まあそれは、女として見られているっていう前提での話
だから女友達未満のあんたには関係のない話だったかしらね？」

くうっ、別に、悔しくなんてないんだからな！
絶対に泣いてなんかないんだからなっ！？
うううー、もう動く元気でない……。

神山に会いたいなー。神山がいたら慰めてくれるのに。

そっだ！ お見舞いに。

やっぱり恋と風邪は違つよねと彼は言った

朝、目を覚ましてすぐに世界は顔をしかめた。片手でこめかみを抑えて頭の中を駆け巡る鈍い痛みに耐える。それに慣れてきたころ、ようやく世界は動き出す。まず布団をめくって、彼の右足を抱き枕にしてスピスピと眠る神啼かなを起こさないようにゆっくり剥がしてから部屋を出る。

おぼつかない足元に堪えながらも朝食を作り食卓に並べる。

「あー、ダルいー。これは学校無理かなー」

と呟きながらも料理を並べ、それから家族を起こしにかかる。もはやあたりまえとなった自分の役割をたかが風邪を引いたくらいで放り出すという考えは彼には思いつきすらしなかった。

並べ終えた後、彼は三階に上がり、ノックしたあと長女の部屋に入る。

いつも通りにベッドで眠る謳歌おつかの下まで近づき耳元に顔を寄せ、声を掛けようとして、

両手で頬を挟まれていた。

いつの間にか起きたのか、掴んだそのままに世界の顔を自分の顔の前まで近づけて、目をのぞき込んでくる。

うわっなんかすげーいい匂いするなあ、などと文字通り熱に浮かされた頭で考えていた世界。

「せつちゃん、もしかしなくても今すぐく体調悪いんじゃない？」

いつになく真面目な顔で問いかける謳歌。

姉ちゃん真面目な顔も似合うよなーと呆ける世界。

「せつちゃん？」

「ん？ ああ、大丈夫だよ。ちよつと体だるいくらい、って、わっ？！」

台詞の途中で起き上がった謳歌に抱えあげられ世界は驚き声を上げる。

「もう、どんなときでも優しいせつちゃんできてくれるのはお姉ちゃんも嬉しいけど、こんなときぐらいは甘えてくれてもいいんだからね？」

私はせつちゃんのお姉ちゃんなんだから

ウインクを飛ばした謳歌は抱えた世界を先程まで自分が寝ていたベッドに寝かせる。

状況に思考が追いついていない様子の弟の顔を見てこれは重症ねえ」と自分の頬に手を添える謳歌。

「だから、あとのことはお姉ちゃんに任せて、せつちゃんは今日一日ベッドの上が仕事場よ。そのほうが私たちも嬉しいんだから、ね？」

その言葉に世界はようやく理解に至る。

「そっか。ごめん、心配かけて。それと、ありがと姉ちゃん」

「ふふ、それじゃあゆっくり休むのよ？ あとでまた来るわね」

謳歌は微笑み世界の髪を一撫でしたあと布団を首もとまでかけ直し

てやり、電気を消してから部屋を出る。
うふ、弱った顔のせつちゃんも可愛いわね〜と呟きながらそのまま
手前の斬理きりの部屋へと入る。
そのままずっとベッドの脇まで歩いていき、

刹那、放たれた剣閃が空気を裂いて謳歌に迫り、

それを難なく素手で受け止めた謳歌は、眠ったままの妹に、躊躇なく、割と力を込めた踵落としを繰り返す。

本能で危機を察した斬理は眠ったままに回避行動を取ろうとし、しかし呆気なく撃墜される。

ぐごほー！という割と乙女からは出てはいけないような声を発してベッドの上で転げ回る妹を横目に、カーテンを開け日の光を部屋に入れた謳歌は斬理に視線を向けて艶やかな笑みを浮かべる。

「うふ 目は覚めたかしらキリちゃん？」

「ぐ、ぐふっ、ね、姉さん？ な、なぜ姉さんが？ 世界は？ というより今の衝撃は

「ダメよ〜キリちゃん。いきなり切りかかる癖直さないといつまでたつてもせつちゃんが安心して夜這いにこれないでしょ？ 女は時に無防備なところも見せないよね あとは男のダメなところも受け入れてあげるだけの度量を示すことも大事だから覚えておきなさいね？」

「は？ え？ ああ、そう、なのか？ ん？」

「それじゃあ先に下にいつてるからね〜」

腹を抑えて混乱する妹を置き去りにして部屋を出る。
その足で世界の部屋で眠る神啼のもとに赴く。

「あらあら可愛い寝顔　こんないものが見れるならたまには早起きするのもいいわね〜」

神啼の頬をつつきながらくねくねする謳歌。

しばらくして満足した彼女は神啼を抱き上げる。

「おはよ〜、なっちゃん。目を覚ましてくれたらお姉ちゃん嬉しいわぁ」

優しく揺すり声をかける。その声ににゅふ〜と喉を鳴らして目をこする神啼。そんな妹を抱き上げたまま謳歌は部屋を後にした。

洗面所で自分と神啼の顔を洗った後、手を引いて居間へと向かう。既に食卓に着いていた斬理に再び挨拶を交わしてから席に座る。

「む、姉さん、世界はどうしたんだ？　食事も三人分しか作っていないみたいだし。」

「せっちゃんなら今は私の部屋で寝てるわよ。ふふ、知ってる？」

「キリちゃん？　あの子ったらベッドの上じゃあ凄く男らしかったのよお。思い出しただけで、　ポッ」

「なあっ！　私の寝てる間にナニをつ！？」

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「あら、なっちゃん。心配しなくても大丈夫。ちょっと風邪引いたみたいだから寝てるだけよ」

「……………っ、？　ん？　風邪を引いただけ？　それじゃあ……………」
「あらあ　キリちゃんったらあいつたいどおんな想像したのかしらあ〜？」

「ぐう、むう〜。そんなことよりっ！　世界は大丈夫なのか？」

「うふ　大丈夫よ。今日はお姉ちゃんが付きっきりで看病するから」

「何？　それなら私も」

「私も、お兄ちゃんの看病したい」

「だゝめ。二人は学校があるでしょ？　お姉ちゃんは今日は授業ないから大丈夫なのよ」

「むう、家族会議！　家族会議の開催を要求する！」

「その要求は却下します。もう、心配なのは分かるけどねキリちゃんになっちゃう。自分のせいで学校休んだ、なんてことになったら優しいせつちゃんはどう思うかしら？」

「むう、それを言われてしまっってはしょうがないか」

「ふふ、だからお姉ちゃんに任せなさい」

ね？なっちゃうと自分を見つめる妹の頭を、いつも弟がそうするよ
うに優しく撫でる。

「それじゃあ、せつかくせつちゃんが私たちのために作ってくれた
んだから冷めないうちに食べましようか？」

それじゃいただきますと食べ始めるのだった。

いつも通り美味しく朝食を頂いた三人。世界の代わりにと斬理が
神啼の手を引いて家を出るのを玄関から見送った謳歌は食事の片付
けを済ました後、お粥を作る。出来たそれをお盆に乗せて自分の部
屋に向かい、部屋の明かりを点けてからベッドへと近づく。彼女は
自分のベッドで眠る少年の額に手のひらを乗せる。あらやだ、さっ
きより熱くなってるわねえと考えていた謳歌だったのだが、彼女の
ひんやりとした手のひらの感触に世界が目をあける。

「ん、謳歌姉？」
「あら、起こしちゃったかしら？」
「いや、うとうととしてただけだから大丈夫」
「そう？ それじゃあ朝ご飯作ってきたんだけど食べれるかしら？」
「姉ちゃんが？ ありがと、いただくよ」

熱のせいかな夢見心地な感じで答える弟を手ずから起こしてやる謳歌。

それからベッドの脇に腰掛けた謳歌は、レンジで熱々のお粥を一口掬いそれに自分の息を吹きかけて十分に冷ましたあと、はい、せつちゃんあ〜んと弟の口元に運ぶ。それに世界はおとなしく口を開けて迎えいれる。

素直なせつちゃんも可愛いわね〜癖になりそうだわあなどと考えながら手を動かすニコニコ顔の謳歌。
それを何度か繰り返して、鍋の中が空になったところで世界を布団の中に戻す。

「お休みなさい、せつちゃん。お姉ちゃんは下にいるから何かあったら呼んでちょうだい」

「ああ、ありがと、お休み姉ちゃん」

おやすみと言ってから電気を消して部屋を出る謳歌。そのまま一階まで降りて食器を洗ってから自分でお茶を入れる。

「ふう、やっぱりせつちゃんが入れてくれないとだめねえ
愛情が足りないわ」

とソファに背を預けて一人呟き、ポケットに入れていた携帯を取り出し、電話帳から目当ての相手呼び出す。

「もしも〜し、今日の十二時までには私の家にエリクサーひとつ届けてくれないかしら？ それじゃあよろしくねえ。あと遅刻厳禁だから遅れたらお仕置きだからねえ？」

「は？ エリクサー？ ちょ、あんな高価な、十二時って！ 無茶っすよっ！？ せんば」

要件が相手に伝わったのを確認した謳歌は電話を切って携帯をしまい、ソファーに横になる。

さて薬が届くまでひと眠りしましょうか

そこから先は特に変わったこともなく、十二時十分に薬を届けにきた女性がノーザンライトボムされたり、その薬を飲んだ少年の風邪が一瞬で治ったり、けれどベッドの上から出さしてくれない長女の話相手を一日勤めたり、とある眼鏡の女友達放課後に見舞いに来たことで一悶着あったりしたけれどいつも通りの一日だった。

夜、夕御飯はもちろん作らして貰えず、謳歌の手料理を食べて、心配した神啼に連れられ早々に就寝することになった。

のだが、昼まで寝ていたせいかわれともあの妙な緑色に発光する薬のせいかわれ、とかく寝付く事が出来なかった世界は、神啼が眠りに落ちるのを見守ってから、布団を抜け出した。

電気の消えた居間の中を歩き、冷蔵庫から牛乳とはちみつを取り出す。

ふと庭のほうで物音がしたのに気付いた世界はカップに入れたホットミルクを持って縁側へと向かう。

そこには月明かりに照らされて金の粒子を撒き散らす女性が独り、月を肴に酔いしれる姿があった。

「あら？　せつちゃん、こんな時間にどうしたの？」

「ん、ちよつと寝付けなくて、風にでも当たろうかと思つてさ。謳歌姉は飲んでるのか？」

「そうよ、いい焼酎が手に入ってねえ　せつちゃんがもう少し大人になったら付き合ってもらうのにねえ」

ああ、斬理姉は弱いもんなー、と過去の痴態を思い出しながら謳歌の横に腰かけてカップの中身を少し喉に流す。

「ふうー、今日はいい月だなあ」

「うふ、絶好の肴よねえ」

そう言つて、二人並んで月を見上げる。

「ありがとな、姉ちゃん」

と今日一日を振り返り感謝の言葉を零す世界。

「どういたしまして」

どうしようもないほどに純真な気持ちがこもつたその『言葉』が心に染み込むのを感じて、謳歌は頬が弛緩していくことを止めることが出来なかった。

お互いに月を見上げたまま、視線は交わすことはなかったけれど、

その顔には心からの笑顔が浮かんでいたのだった。

彼女が振るう拳の先に、ただ生きることには許されることなく（前書き）

実在する宗教団体や人物とは一切の関係がありませんのでご了承ください。
ださい。

サブタイ変更。

彼女が振るう拳の先に、ただ生きることは許されることなく

大地を黒く黒く黒く埋め尽くす狂信者の群れ。

ただ一つのあり方しか認めることができない愚者たちは、自らが崇める神々の恩恵により世界を渡り、授かりし力を振るう。

それに相対するは、唯一無二の“絶対者”。

女は嗤う。

「塵もここまで積もれば不快なだけねえ。うふ、自己紹介は必要ないかしらあ。あはっ あなたたちが選べる選択肢は二つ、大人しく死ぬか、無駄に抵抗して死ぬか、ちなみに私はひとつ目がおすすめよお？」

その侮蔑を込めた囁きは、如何様にしてか、風にかき消されることなくそこにいる全てのものへと届けられる。それに対して返された反応は単純なものであった。

我らが神の敵を打ち滅ぼし、我らの信仰を示せっ！！

両手を掲げ呪文を唱える狂信者たちを前に、女は笑顔を浮かべ、無造作に右手を目の前に掲げた。

瞬間、光の奔流が迫る。空間を埋め尽くすほどに降り注ぐそれらはすべて、魔法と呼ばれる概念によって生み出された破壊の矢。戦略級の破壊力を秘めたそれは、ただ一人を殺すという目的を考えれば明らかに過剰に過ぎた攻撃であるといえただろう。

それを前に、女はただ、掲げた手の平を握りしめ、まるでテーブルクロスを手繰り寄せるかのように、空間そのものを握りしめた。

刹那、ナニカが軋む音が響き、握りしめられた拳を中心に世界が歪む。

たったそれだけで、必殺の威力を秘めたはずのそれらは、掲げられた女の手のひらより先にひとかけらの破壊すらもたらずことができなかった。

それが当然の帰結だと言うように、女は何の感慨も浮かべず、ただ逆の拳を打ち出す。

音速などなお温く、光すら置き去りに、それはなんの技巧もなく、むしろ速さという概念すら置き捨てて。しかし、その瞬間、視界に入る空間そのものを引き裂き、巻き込みながら圧倒的なる破壊をもたらした。

暴力が形を持って現れたような、災禍の渦に巻き込まれたものたちに、彼らの崇める『神』ですらない身でそれを防ぐ術など存在せず、抵抗することすら許されず、黙して運命を享受することしか許されてはいなかった。

墓場と化した戦場、否、戦場と呼ぶにはあまりにも何も
無さ過ぎるまっさらな景色の中を一人歩く女。

やがて辿り着いた場所には、その身をもって真紅の花弁を咲かす男
が横たわっていた。

「あらあら、あれで生きてるなんて頑張るわねえ。手加減し過ぎた
かしらあ？」

「っ、ア、ク魔、め」

吐き捨てる男に女は視線すら合わせず空を見上げて“嗤う”。

「うふ、これが私、そしてこの光景が全て、」

身の程も知らずに手を出した、これが代償よ、と。

彼以外に何も無い、草木も、人の影も、血の跡も、破壊の跡すら、
残さずに元の景色のまま悠然と不毛な大地。

「き、様らのような、神の敵に、我、ら真なる使徒が屈すると思
うな！ 我らがここで倒れようともっ、我らの神がいずれ、この、
世界を」

「その薄汚れた口で『世界』という言葉汚さないでく
れるかしらっ？」

「な、に？」

「うふ、それに、『神』ね。ふふ、心配しなくてもアフターケアまできっちりしてあげるから」

だから安心して んでちょうだい

指を、打ち鳴らす、それだけで

ナニかが軋みを上げ、そして、男はこの世界から消失した。

「ふふ、うふ。あはあっ！ 私の宝物に手を出そうなんて
うっかり したくなっちゃうじゃない

そう呟いた女は、一人、世界を渡る。

彼女が振るう拳の先に、ただ生きることとは許されることなく（後書き）

この女は、一体……？

ヘルゼブの秋 前編

「食 欲 の 秋 だ っ！」

家族四人で夕食を食べ終え、いつも通り居間でくつろいでところ、前触れもなく立ち上がり叫びだす斬理^{きり}。

椅子の上に片足を乗せ髪の毛を振り乱すのを見て世界は眉を寄せ、また碌でもないことなのだろうと内心溜め息をつきながらも、腕を振り上げた態勢のままチラチラと自分を見ている姉を放置して拗ねられたら困るので、溜め息をついてから問いかける。

「取り敢えず行儀悪いから足は下ろしなさい。で、食欲の秋がどうしたんだよ斬理姉？」

「ふむ、それを聞くか世界。実はだな、私は日本の四季のなかでも秋が一番好きだったんだ」

「……えっと、理由聞かないとだめなのかそれ？」

「うふ、それはいつたいなぜなのかしら？」

「ふつ、愚問だな姉さん。なぜなら秋には普段の三割増しでご飯を食べていい季節だからだっ！！」

「おいっ！ だからかつ、この時期無駄に食材の消費早いのは！ 違うからなっ、食欲の秋って言葉にそんな特別ルールないからな！ そんなことしてたらエンゲル係数もうなぎ昇りになっちゃうよっ！ それに普段の三割増しっていつもあれだけ食べといてまだ胃袋に空きがあったって事実が一番俺はびっくりだよ！？」

「だがしかし今はそれが重要ではなくてだな」

「いやつよくないよつ、重要だよつ、話し合おうよ！！ 次の家族会議の議題にもがあつ!？」

「あらまあキリちゃんつたら、それでどうしたの？」

また面白いことを言い出したと騒ぐ弟を胸のたわわなスイカの間挟んで黙らせて続きを問う謳歌。

「む、楽しそうだな……。ああ、うむ。そういうわけで、今週の土曜日は燐火のプロデュースによる秋季恒例第一回、秋の味覚を食べつくせ！ 料理長世界の一日耐久お食事を開くことになった！」

「ぶはあつ！ ちよつと息出来ないから謳歌姉!? あとき、そういうわけですってどういうことよ!? 不吉なキーワードし聞こえなかぶほつ!？」

「面白そうね。お姉ちゃんも出席できるのかしら？」

「うむ、燐火の家の庭でやる予定だから他にも呼んで大丈夫だ」

「お姉ちゃん、三國呼んでもいい？」

「うむ！ 神啼の友達なら大歓迎だ！」

その細い腕にどのような物理法則が働いているのか、胸の間で逃げ出そうともがく弟を片手一本で御したまま頬に手を当てて艶やかな笑顔を浮かべる謳歌。

男なら喜んでやまないその状況も、後頭部を決して揺るぐことがない圧倒的な力で抑えつけられ（第三者視点では後頭部に優しく手を添えているようにしか見えない）、呼吸もままならず酸素の欠乏により思考することも覚束ない今の彼にしてみれば、それはまさしく苦行以外の何物でもなかった。

長男が苦痛の向こう側に達する前に開放した謳歌は斬理に話しかける。

「それじゃあお姉ちゃんも麒麟ちゃんとか桃子ちゃんに声かけてあげようかしら？」

「麒麟お姉ちゃん来る？」

以前、海で一泊した折に妙に麒麟に懐いた神啼はその言葉に反応して嬉しそうに問いかける。

「そうねえ、きつとなっちゃんのために何があっても絶対に来てくれるわ」

その言葉で満足したのかトコトコとソファで倒れた長男の看病へと戻っていく神啼。

「ふむ。人数は大丈夫そうだな。本題の料理のほうも燐火の家のシエフとメイドさんたちが世界の補佐についてくれるようだから心配ないしな」

「ふふ、楽しみねえ」

和やかに食卓を挟んでお菓子をつつく姉妹をよそに、ソファで横になって妹に頭をナデナデされている長男は、補佐しかしてくれないのかやっぱり……、と呟いて目尻から溢れる心の汁をぬぐったのだった。

ヘルゼブの秋 後編

そして時間は流れ三日後。

家の前に止まった小型バスに意気揚々と乗り込む三姉妹に続いて、MY包丁を抱えてドナドナと乗り込む世界。後部ドアから乗り込んだ世界は運転席に座る見覚えのある青色の後頭部に目を留めて、そちらに近づく。

「おはよう、麒麟さん。朝早くから御苦労さま」

「はは、おはようございます弟君。いいんですよ、気にしないで。

人が自然災害をどうにもできないのと同じように、私には先輩の言葉に従わないって選択肢はないっすから……」

「そっ、か。そう、だよな。諦めっていい言葉ですよね麒麟さん」

そう言うってお互いに綺麗な笑みを浮かべる。共に死んだ魚のような瞳をしていたなどということは蛇足である。

「それよりバスも運転できるんですね麒麟さん」

「はい。陸海空宙、運転席の付いてるものならだいたい乗れるんですよ。それが仕事ですしね」

宙まで必要になる仕事ってなんだよと普段なら思っただろうが、今日の彼は体力精神力の温存のためにそんな素敵ワードも華麗に右から左に聞き流す。

そんな世界に続いて三姉妹も声をかける。

「おはよう麒麟ちゃん」

「麒麟お姉ちゃん、おはよう」

「おはよう、麒麟さん。」

「皆さんおはようございます。揃ったようっすね？ それじゃあ出発するので座ってください」

四人が前から順に席に着いたのを確認した麒麟は神山家前から出発する。

向かったのは盛華中学校前。そこで本日の参加メンバーを拾うのである。

中学校の前に到着し、迎えたのは五人。

最初に乗り込んできたのはカジュアルな服装に黒ぶち眼鏡がトレードマークの少女、龍波 三葉。

肩まで伸ばした髪を元氣よく揺らして乗り込んできた彼女は、視界に入った世界に勢いよく挨拶をする。それに苦笑して世界も挨拶を返し、それに続いて他のメンバーも声をかける。彼女はその四つの圧倒的な保有戦力に一瞬怯んだものの、将来私の義姉ちゃん将来私の義姉ちゃんと思議な呪文を心で唱えたあと、胸を張って、胸を張って元氣よく挨拶を返すのだった。

次に乗り込んできたのは砂糖を吐きたくなくなるようなフィールドを朝っぱらから展開する二人組。

吉夜須 桃子と山本 明人のカップルである。

澄ました顔で明人の腕に身体をぴたりと寄せた桃子と朴訥な笑顔を浮かべる明人の二人は皆と挨拶を交わしたあと席に着く。

最後に乗り込んできたのは二人の少女。

悠傲 三國と悠傲 繰歩。

三國は肩まである黒い髪を右側だけ編んだ大人しそうな雰囲気纏

つた少女で小学四年生、つまり神啼の友達である。

繰歩あやほは肩まである黒い髪を左側だけ編んで前に流しており、こちらは世界の一つ下、中学一年生である。

三國はかけられる声にあわあわと頭を下げながら神啼の隣へと向かう。

繰歩あやほは妹の後ろに続いて挨拶を返しながらかのまま世界の後ろの席に座る。

そんな後輩に世界は声をかける。

「なんだ、繰歩も来たんだな」

「む、来たら駄目だったんですか、世界さん」

「いや、なんせ急な話だったからな」

「まったく、クリフは食い気な年ごろだからな」

「だれが大食いですか！ ピンク脳の先輩には言われたくありません！」

世界の言葉に仏張面で返す繰歩、それを見て食いつく三葉。はっはっはと笑う三葉に切れる繰歩。学校でも見慣れた光景に世界は苦笑する。

蛇足だが断花たちばな 鬼心きしんと白九尾しろくび 玉藻たまもの両名にも声をかけた世界だ

つたが断られていた。

曰わく、折角の休みにそんな心休まらない人外魔境に踏み入るなど言語道断とのことだ。

それじゃあ皆揃ったところで出発するっすよ、という声と共に賑やかな一行はようやく本日の目的地に向けて出発するのであった。

巨大な門をくぐり抜け、緑豊かな道を走ること十五分（既に敷地内であることからその威容の片鱗を味わえる）、先程通った門より幾分小さなそれが開かれるのに合わせて、くぐり抜けた一行を出迎えたのは並び立つメイドと一人の少女。

「やあやあ、いらっしやい皆さん。歓迎しますよ」

バスをメイドさんに任せて降りてきた彼らを、そう言っただけで出迎えたのは赤茶色の髪をボブカットにした少女。背丈は斬理と同じで六十ちよつとくらい、白いシャツと黒いパンツスタイルのよそおいは彼女の雰囲気と合わさって美しさをより際立たせていた。

「燐火、おはよう！」

「やあ、おはよう斬理。今日も相変わらず綺麗だね」

おおの
大野 燐火。

世界的軍需産業の雄である大野グループ社長の一人娘で、いわゆる超のつくお嬢様である。

堅苦しい挨拶は無用でしょうから早速会場の方に案内しますよと
いって歩き出す燐火の後に続く。

が、歩きだしてすぐに、ああそうだと呟いて振り向いた燐火はとて
も素敵な笑顔を浮かべ、

「そういえば料理長はこっちじゃあなかったよね？ うちの子たちに案内させるよ」

その言葉に世界は、はぁーと声をもらして燐火がメイドを呼ぶのを諦めを悟った顔で眺めるのだった。

「うふっ、それじゃあ麒麟ちゃんも今日一日せっちゃんのお手伝いよろしくねえ」

やってきたメイドたちにドナドナ連れられる世界に黙祷を捧げている麒麟は、まさかの指名に顔色を悪くする。

「え？ ア、アタシ今日はそっち側じゃないんすか？」

「あらあら、せっちゃんが私たちのために頑張ってくれてるって言ってるのに麒麟ちゃんだけ何もしないなんて」

そんな悪い子なわけ、ないわよねえ？

「はははっ、勿の論っすよ先輩！」

謳歌の浮かべる笑顔から全力で顔を背けて世界の後を追う麒麟。

その顔には念願がなつて新築の一軒家を購入したと思ったら軒下にシロアリが大量に巣くっているのを見つけてしまったお父さんのような表情を浮かべていたと世界は後に語った。

「うわぁ……綺麗」

「ほんと、すごいわね……。私たちの家何個分かしら？」

悠傲姉妹は到着した本日の会場でもある庭園の凄さに声をもらす。

「いやあ、父の無駄な趣味の賜物であるこの庭園もこうして友人たちを招くことの口実になれるなら本望だろうさ」

そう言つて何々と笑う燐火。

その言の通り見渡す限り広がる計算され尽くしたような風雅な光景はまさに金持ちの道楽以外の何物でもなかった。

「いや確かに、ただのクリフじゃこうした機会でもない限り一生縁のない光景だろうしなあ」

「うるさいですよ先輩。ただのつて何ですか、ただのつて。だいたい先輩もこつち側でしょうが」

「ふふん！ 燐火さんはキリさんの友達なんだから将来神山のお嫁さんになる予定の私にとっては無関係じゃあないだろ」

「……自分で言つて自分で照れないくださいよ先輩。」

それに、世界さんつて意外と人気あるんですよ。見た目普通ですけど交流持った人からは好意向けられやすいタイプですからね。だから莫迦みたいなことばかり言つてたら横からかささらわれるかもしれませ「なあつ！前から怪しいとは思つてたけどクリフも神山に惚れて　　！！」

「だれがっ！ 私の話だと言いましたかっ！？」

こんなところに伏兵がいたのかつと恐れおののく三葉に突っ込む繰歩。

頬をちよっぴり染めていたのはご愛嬌である。

「あらあら、なんだか楽しそうなお話してるわねえ。お姉さんたちも混ぜてくれないかしらあ？」

「うあつ謳歌お姉様！？ いや違つぞ、神山の話じゃなくて

「ほう？ せつちゃんの話ですか？ 確かに教師としては生徒が不純異性交遊をしていないか事細かに知っておく必要もあるのでしょうね。と言つわけで悠傲姉ゆうあおねと龍波にはちゃきちゃきと話してもらつとしましよう」

「なつなにを言つて、 ? 臭い。もしかしてもう飲んでるんですか先生たち？」

「あらあら、女の子に臭いなんていつちゃ、だあめ」

「その通りです。さあ料理が来るまでの間みつちりとお話しましよつか」

美女こひめ二人に絡まれた哀れな犠牲者たちから少し離れた所では二人の少女がジュースの入ったグラスを片手に会話していた。

「むう待ちきれんなー。早く料理は来ないのだろうか？」

「こらこら、斬理つてばヨダレを拭きなさい。そんなことより今日は随分可愛らしい服きてるじゃないか？ ジャージ族の斬理にしては珍しいね」

「ぐしぐし。 ふふ、そうだろう。なんといつても下着から上着まで世界が厳選して選んでくれた服だからな！」

「ははあー、斬理つてばまた世界君のこと連れまわしたんだ。そう言われれば確かに大人の女つて感じの落ち着いた雰囲気だもんね。世界君結構センスいいねー」

「うむ、世界が私にはこういう大人しめの格好が似合うと言つてくれてな。姉さんを手本にするのはだめらしい」

そういつて二人は離れたところで中学生二人に絡む謳歌を見る。

首から肩先の部分まで大きく開いた黒のニットシャツにジーンズ

にヒール。凹凸のはつきりとした身体と黄金色の髪とその美貌。シンプルな服装も彼女が身にまえばそれだけで特上の色気を孕んだ華へと変わる。

ぶっちゃけて言えば謳歌は元来のスペックが高すぎて何を着ても似合うということである。

斬理も当然、超が頭につくような美少女であるがいかんせんベクトルが違う謳歌を参考にするのはもつたいたい、もっと違う魅せ方がある！とシスコンの世界は常々考えていたのである。

「確かにあの艶は私たちには出せんよな」

「同じ血をひいてるのだからどうにかならないものか」

「……ふむ、ならもう最終手段しかないか？ 斬理、こうなったら世界君に色々教えてもらうしかないね」

「む、世界はその方法を知っているのか？」

「中学生とは言え妙に女性の扱いを心得た彼ならあるいは……。男について知り、女を教えてもらえれば私たちはまだまだ上を狙えるはずだからねっ！」

おおっそれはいつたい！？

頭をくつつけて密談する彼女らに世界が胃を痛める思いをするのはそう遠くない未来であろう。

そんな彼女らから離れた場所では三人の影が。

「明人、これは？」

「それは桔梗つて花だね」

「綺麗、です」

「うん、綺麗。お兄ちゃんにも見せたい」

「桔梗の花言葉はやさしい愛情と変わらない心。大好きな人に送る

にはぴったりかもね」

庭園に咲く花を三人で見て回る。この一角だけ実にはのぼのとした空気が流れていた。

お昼も間近に迫った頃。次々と食器を抱えたメイドが姿を現した。

「皆さんお待ちせしましたっす。一品目ができたのでお持ちしました」

そう言っつて両手にお皿を抱えてメイド服を着用した麒麟が近づく。

「あら〜ふふ、麒麟ちゃんたらお疲れ様。その格好も似合ってるわよ〜」

「いや〜なんだか恥ずかしいっすね。さっきは弟君にも褒められちゃって

「貧乏臭さがあふれてて下っ端臭い麒麟ちゃんにはお似合いよねえふふ、一生こき使われる麒麟ちゃんの姿が想像できるわあ」

上げたら落とす。基本を忠実に抑えたイイ女な謳歌であった。

料理を置いて戻っていく彼女が厨房で世界に慰められることになるのだがここでは割愛する。

昼前ということもあり軽くジャブ程度に作られたそれらはすぐに彼女たちの胃袋におさめられる。

ジャブ程度とはいえ神山家長男が繰り出したそれらは相当な切れ味を持つ一撃である。

おいしいおいしいと満足そうに感想を口にする彼女たちは次の料理が出てくるのを心待ちにしながら会話に花を咲かせるのだった。

ここから先は多くを語る必要もないだろう。

料理長が料理を作り、女性陣が食べる。単純にそれが繰り返されるだけ。

彼女らが満足するまでその暴食の宴は繰り広げられるのだった。

なによりも恐ろしかったのはどれだけ食っても次の料理が出てくるまでの数十分の間に胃袋の調子を整える、某姉妹と某酔っぱらい教師の食べっぷりだったと食事を運んでいた某後輩と某料理長はのちに酒の席で涙ながらに語ったとか。

ヘルゼブフの秋 後編（後書き）

麒麟が扱いやすいと思った回でした。

今回で名前だけ出てたキャラを全て登場させることができたのも
ういつでもゴールできそうです。あつと両親がまだ出ていなかった
か。

そして三國は一言しか喋っていない。

エンディング・ストーリー

あれからもう、十五年の月日が流れた。

と簡単に言ってしまうには密度の高すぎる日々だったと今でも、いや、今だからこそ思う。

中学高校を卒業した俺は調理師専門学校へと進学した。

あの三人は同じ大学に進学したようで、俺だけ道を違えることになったのだが後悔はしていない。

卒業式の日には三葉から告白を受けた。結果は事細かに語るべきことではないだろう。ただ今でも大事な親友の一人として付き合っているとだけは言っておく。

専門学校は特に問題もなく卒業、卒業後は燐火さんの家で雇って貰い、働かせてもらうことになった。以前から高く評価してくれていたらしいと聞いたときは年甲斐もなく照れてしまったものだ。

燐火さんと言えば当時から彼女のお父さんの下で勉強しており現在は跡を継いで大野グループのトップに君臨している。

周りが女のひとばかりだったということ貞操の危機を何度も向かえたりしたが、基本的にはいい人たちばかりだったので楽しく過ごすことが出来た。

それから二年がたったあの日のことは今でも忘れていない。

そう、神啼が、彼氏を連れてきたのだ。

神山家が騒然としたのは言うまでもなく、中学の頃からの知り合いで高校の卒業を機に彼から告白され、自身も憎からず思いを寄せていたためこうして付き合うことになったと、はにかんだような笑顔で語る妹に不覚にも俺は涙が流れそうになった。

優しそうな雰囲気を纏ったその少年は謳歌姉と斬理姉の二人に連れられて一晩中お話していたみたいだが、次の朝にはギリギリの笑顔に張り付けた少年を伴い二人は笑顔で居間に顔を出した。

俺も彼に一言だけ、まあなんとというか、神啼を泣かせたら（姉ちゃんたちが）承知しないからとだけ告げておいた。

妹が選んだのだ。兄として信じないわけにはいかないだろう。

その日の夕飯はいつもより少し豪華にしておいた。

それから四年後、大学の卒業に合わせて二人は結婚した。

その日のことはよく覚えていない。なんせ視界がずっとぼやけていたから。横で珍しく苦笑をこぼし、背中を撫でてくれた謳歌姉が印象的だったことだけは、今でも鮮明に覚えてる。

俺は神啼の結婚を機に隣火さんの家での仕事を辞めて、長年貯金し続けてきたお金で自分の店を建てた。神啼の晴れ姿も見れたということで、これからは自分のために生きてみようと思ふと長年の夢を叶えることにしたのだ。

大っぴらな宣伝はせずに細々と経営する。

メニューはなく、その日の気分と客の要望で料理を出す店だ。店員にはちょうどバイトも辞めて暇をしていたという麒麟さんを雇った。

そして現在に至る。

店のほうは口コミと看板娘？のおかげで固定客もつくようになり、安定した収入を得れるようになってきた。

他に上げるとするなら。

俺にも娘が出来たことぐらいだろうか。

そう、俺にも家庭ができたのだ。いわゆるできちゃった結婚というものだったのだが姉ちゃんや周りのみんなも祝福してくれたし、俺自身満足していた。

たまに店にやってくる妻が娘を連れてきたときなんかはそれを見て、まじかわいいうすねーアタシも子供欲しいかも、といって潤んだ瞳で見てくる店員には今のところ給料減俸で対処することになっている。

そんな。そんな昔から変わらない、けれどすこしだけ刺

激の減った、幸せな日々が俺の今の日常である。

朝、雀の鳴き声で目が覚める。

腕の中に自分とは違う温もりを感じながら寝ぼけた頭で天井を見つめる。

ふと腕の中で何かが動く気配がしてそちらに目を向けた。

おはよう

そう言って微笑む天使に俺は軽く触れるだけのキスをしてから言う。

おはよう、
謳歌

朝、カラスの鳴き声と雷の音で勢いよく目を覚ます世界。

額には大量の汗が浮かんでおり寝間着は汗を吸ってピタリと肌に張り付いていた。

「あ……悪、夢だ」

そう呟いた世界は神啼と自分の間にいつのまにか潜りこみ、起きているときには絶対に見せないようなふやけた表情を浮かべて眠る姉を見て、深く、深く喉を鳴らして、思った。

こいつは、なんとか、しなければ、と。

俺と彼女と秋の空

「先輩。なに、してるんですか？ 授業中ですよ、今」
「知つとるよ。なんや、こんな気持ちのいい天気の日に授業なんか受けてられんやろ。なあ？」

ちよつどええからこつち来いや後輩、と。
振り向いた世界は給水塔の上に立ち、二つに結った長い髪を風に揺らして手招きする赤白黒子あかしろくろこを見て溜め息をついた。

少し遡って昼休み。世界は食堂にて友人たちと昼食を食べ終えたあと教室に戻ったのだが、窓際の暖かな日差しと満腹時特有の眠気にやられ、これは辛抱たまらんと鬼心きしんに言い訳よろしくと書き置きを残してこつそり教室を抜け出した。

そのまま階段を上がり屋上を目指す。あそこならぐっすり眠れるだろうと考えながら屋上へと続く扉に手をかける。錆びた扉が悲鳴を上げて開かれ、吹き抜ける風と太陽の光に目を細めて屋上へと出て、

「奇遇やなあ。それとも必然やるか。後輩はどう思う？」

そんな聞き慣れた声に世界は振り向いたのだった。

そして現在^{いま}。世界は黒子の隣に腰掛け空を見上げていた。

「なんや、今日は随分素直やなあ後輩。いつつもやったら苦虫噛み潰したような顔しよるのに」

片膝を立て、そこに肘をついて。黒子は隣で空を見上げる、見た目だけは凡庸な少年にニヤニヤと笑みを浮かべたまま視線をやる。

「いやね、やっぱ嫌気より眠気って言うんでしょうか。それに先輩とはいえ美人なことには違いありませんから。いい夢見れそうじゃないですか」

なんてことを、視線も寄越さず茫洋と空を見上げたまま言っている少年。ふああ〜とあくびを零す世界に黒子は一瞬目を丸くしたあとくつくつと笑みを向ける。

「なんや後輩、そんな素直に褒められたら照れてまうよって。初心^{はつこ}な女の子弄ぶもんやないで？」

そんな言葉に隣にいる少女をちらりと見る。そういえばまだ中学生なんだったこの人、と。

普段から大人びた、と言うより某姉や某教師と似たような雰囲気纏っているから彼女たちと同じように扱ってしまったことを少し反省する。反省して改まったことはないのだが。

「そんなつもりはない」

「んですけど善処します」

言葉の途中で細まった瞳に素早く言い直す。
なるほどなあ。こんな風にクリフとミツバもやられたんかあ、と口元を抑えて笑みを浮かべる。
あー、また何か考えてるよと思いつつも、段々と意識の端を侵食してくる睡魔に身を委ねることにした世界。

ごろりと隣で寝転んだ世界に気づいた黒子は彼の顔を覗き込むように姿勢を傾ける。

「なんや、もうお眠か？ 隣の美人ほつたらかして」

ん、なんだか気持ちよくって、と目を閉じたまま小さく呟く世界。

「へえ、なら もっと気持ちよくしたるか？」

目を細めて艶を含んだ声で問いかけた黒子は、それじゃお願いしますと云って小さく寝息をたてはじめた世界を見てきよんとした顔をしたあと小さく笑みをこぼした。

「ほんと、弄んでくれよなあ。さすがは神山ってことやるか？」

そう呟いて、黒子は、まるでネズミを前にした蛇のような、いわゆる肉食系の笑顔を浮かべ、

「だったら好きにさせてもらおか」

そして世界の頬に手を添えて

鐘の音が響いて、世界は目を覚ました。
ん〜！と固くなった体を伸ばしたあと赤く染まり始めた空に目を向ける。屋上にはすでに彼一人だけだった。

「……。しまった。寝すぎたか」

少しの間その景色を眺めていた世界は体にかけてあった女性用の制服の上着を丁寧に畳む。それから、額を撫でた後、冷たくなってきた空気から逃げるように屋上をあとにした。

すぐに担任に捕まって言い訳もむなしく生徒指導室に連行されることになるのだがここでは割愛させていただきます。

翌日。

肌寒くなってきた朝の道。首元に巻いたマフラーで暖をとりながらゆっくりと紅葉の中を進む。

既にHRは始まっているのだろうがそんな些末事など彼女は気にも留めず、ただ思いのままに歩を進める。

文字通り、彼女の歩みを妨げることが出来る人間など、この町には三人だけしかいないのだから。

そうして、学校へと到着した彼女は校門前に立つ見慣れた人影を視界に収め、唇を笑みの形に歪めた。

「遅いですよ、先輩。もう少しで老後の人生設計まで立て終わっちゃうところでしたよ」

「そら行幸やな。しかし珍しいこともあるもんやで。後輩から私に会いに来るなんて、なあ？」

すぐ傍まで来て厭らしい笑みを浮かべる黒子に世界は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「別に会いたかったわけじゃないんですけどね。先輩に借りっぱなしなんて気持ちわ、落ち着かないんで」

そう言っつて脇に抱えていた制服の上着を黒子に渡す。

「なんや、つれんこというなあ。昨日はあんなに積極的やったくせに」

「なんですかそれ？ それじゃ俺はもう行きますからね」

あー昨日の今日で遅刻とか絶対桃子さんに絡まれるよな。と呟いて溜め息を吐きだした世界は黒子に背を向けて歩き出す。

その背を見ながら黒子は口角を釣り上げる。

「ほんま、おもろいなあ。……神山 世界。 神山最弱にして災厄の申し子。 絶対不可侵の象徴があんな普通の男の子やっていうんやから、」

ほんま、おもろいなあ。

校門に寄りかかったままその背が校舎の中に消えるのを見送った黒子は折りたたまれた制服の間、そこに隠れるように挟まれていた無地の包みを手に取り開ける。中から出てきたのは飾り気のない簡素な焼き菓子。それを手に取り口に放り込みながら彼女も校舎へと足を向けるのだった。

「あ、うまいなこれ……」

素面で驚くレアな黒子を見たものは不幸なことに誰もいなかった。

喜劇『とある転生者の英雄譚へヒーローっぽい』

高校で二年目の夏を迎えた俺は鬱屈とした日々を過ごしていた。中身のないことでゲラゲラ笑い声を上げるやつ、馬鹿のひとつ覚えのように何でも色恋に結びつけたがるやつ、自分たちと違う存在を認めることすらできない、そんな下らない餓鬼ばかりしかない学校生活に飽き飽きしていた。

そんな日々が続いたある日、俺は車に引かれた。痛みはなかったから即死だったのだろう。

そして、気が付いたら真っ白な、そう、真っ白と表現する以外にはない、そんな場所にいた。

ただ白く白く、自分が立ってるのか寝ているのか、それすら分からなくなるような、そこはそんな場所だった。どれだけの時間がたったのか。数日か、数年か。それとも数分なのか、それすらわからなくなってきた頃にその声は響いた。

力が欲しいか……

男のものでも女のものでもなく、それはただの音として耳朶を叩く。

……力が……力が欲しいか？

俺は歓喜した。これこそ俺の望んでいたものではないのかと。退屈な日常から抜け出して充実した非日常を生きることこそが。

だから、俺は、

力が欲しい！

そう望んだ。

力が欲しいのなら………くれてやる

笑い声が響いた、そんな気がした。

そして、俺は生まれ変わった。

力を手に入れたのだ。非日常へと誘うべくしてこの身に刻まれた、今までに感じたことのないような強大な力。

俺はそのすべてを掌握していた。

この強大な力がまるで初めから自分のものであるかのように細部まで理解できた。

そして当然その力は目的を果たすために使われるべきだということも『何の違和感もなく』理解していた。

すなわち、異形を排し人々を守るということ。そう、それは正義の執行者として。

まずは敵を探す。そのための能力はすでにこの身に刻まれている。木々が生い茂る土の上で瞳を閉じ己の知覚を広げる。それは言うならば、視認する事が叶わない無色の根が自分を中心に世界を浸食していくかのようなイメージ。半径数キロを探索。該当なし。閉じていた瞳を開け生まれ変わった身体で、使命を果たすため移動をはじめめる。

数日をかけて移動と索敵を繰り返した俺は、郊外の森の中でついにその影を意識の端に捉えた。邪悪な気配を放つそれに向かって走る。はたしてたどり着いたそこには醜悪な姿の異形の怪物たちがいた。俺は嫌悪感をこらえて、敵に相對する。

そして、体の中に渦巻く力に形を与え、名を付ける。

それと共に俺の背にそれは顕現した。八つの円筒形の鉄塊が背中を中心に扇状に展開する。ひとつがおよそ二メートルに達するそれらには複雑な紋様が雑多と刻まれ、時折バチバチと電気が弾けるように白い光を纏っていた。

それらの展開を数瞬で済まし、俺は正義を執行するために、その力の名を唱える。

『トル・ハンマー
神の鉄槌』

その瞬間鉄塊のひとつが一際高く光り、雷を落としたような爆音を空間に響かせた。

それがもたらした効果は絶大だった。爆音が鳴り響いたと共に、前方の異形を巻き込むようにして巨大な円形状のエネルギーの渦が通り過ぎる。その後にはただ、巨大なシャベルでもって抉り取ったかのような、大地が削れた破壊の跡だけが残っていた。

その光景を自分が生み出したことに歓喜で叫びだしたくなるのをこらえ残りの異形に目を向ける。

ナニか、ワケの、ワからないことを、叫んでいるのを無視したまま俺は残りの討伐を開始した。

初めての戦いから数ヶ月。あれ以来なかなか敵が見つかることはなかった。数日前に見つけた奴らは巧妙に姿を擬態して、人の形をとっていたが俺の力で見破ったあと討伐した。それなりに抵抗したが最後には俺の力の前に消え去った。

そして、次に訪れたのは小さな街だった。だがそこには郊外からでもわかる程の邪悪な力が溢れていた。俺は高揚する気持ちにしたがって街へと踏み出して

突然、目の前に現れた、いや元からそこにいたかのように自然に視界に収まった女に警戒する。

「へえ〜なるほどねえ。随分莫迦だと思ったら人形だったのねえ」
頭にノイズが走る。理解のできない、訳のわからないことを呟く女。その身体から溢れる違和感、まるでそこだけが別世界であるような強烈な嫌悪感に突き動かされ力を解放し

「はいはい　それじゃ少し調べさしてもらおうね〜。　ふんふん、へえ？　なるほど人形の身体に魂を入れて動かしてるのねえ。さてとそれじゃあ次、あなたはどこから来たのかしらあ〜」

ザー、ザーと頭にノイズが走る。

光がキエ、カラダはステニウゴカズ。ドンドンイシキガウスレテ

「うふ　なるほど、ほんとに『神』の使いだったのねえ？　どうでもいいけど。それじゃあ

ソレが俺の物語の幕引きだった。

「　　で、今回の相手は？」

「はいっす。これが観測者の調べたデータです」

そういつてその女性は手に持った一枚の紙を、目の前で足を組んで座り妖艶な色気を振りまく女性に手渡す。

「ふくん？　経歴一切不明、名前は自称『桐生刃』、と

「目撃情報が出たのは二、三週間前かららしいっす」

「……へえ？　うふふ、能力名は神の鉄槌トルハンマー、ねえ？」

そういつて唇を釣り上げ、口の中で笑顔を転がす女性から漏れ出した威圧感に冷や汗を流しながら続ける。

「……ちなみに能力名は観測者が付けたものじゃなくて自称らしいっす」

その言葉でついに我慢できずに嗤い声を漏らす美女に、ちびりそうになるのを我慢しながら余計なこといつちやっただっす、ここはもうとつとと言つこと言つてしまおうと決意する。

「自称とは言えランクはA相当、しかもこつちの部署に回されるくらいですんで、相当いつちやっってるみたいですから早いとこ対処しないとお上から何いわれるかわかんないっす」

「この『界』の物差しで推し量られる程度で『神』を気取るなんて莫迦ねえ。それで、被害に合ったのは？」

そう言つて一つ嘲笑を零した後、手に持っていたデータの書かれた紙を、興味が失せたとはかりに丸めて部屋の隅に置かれたゴミ箱へと投げ捨てる。

「はい。被害に合ったのは主に妖魔の連中っす。あとは現界している魔族にも被害が出てますね。魔族のほうは一人だけ逃げ切ったみたいですが相当やられたみたいで、このままだとたかがAランクへの報復のために魔王クラスのヒトたちが出張つてくるかもしれないっす情報まで入ってるっす」

「あらあら随分と自分の首絞めたわねえ。そうね、確かに憤怒あたりに出て来られたら面倒よねえ」

日本地図変えられそうだし、と言いながら面倒臭そうに立ち上がる女性。

「もう見つけたんすか？」

「うふ　そうね、お腹も減ってきたしそろそろ行ってくるわ」

まるでちよつくら近所に買い物に行ってくるというふうな気軽さで、女性は何もない空間を片手で引き裂いた。

「それじゃあ後始末はよろしくねえ」

と後ろ手に手を振って、割れ目へと姿を消す。

「……うわぁ、やっぱり何回見ても出鱈目過ぎっすよね。力づくで世界に穴開けるとか」

一人呟いた女性は先程まで悩ましい体の女性がいた空間、今はその残滓すら残らないそこから目を離して、始末書の準備しとかないと、といってから自分の仕事机へと向かうのだった。

クリフとアイスとティーカップな休日

アイスが、食べたい。

と、唐突に思い立った悠傲ゆうおう 繰歩あやほ。

ヌクヌクとしたコタツから抜け出すのに非常に気力を有することに
なりはしたものの、なんとか脱出。いつの間にか山となったミカンの
皮をゴミ箱に捨てた彼女はリビングを出て廊下に出る。

ひんやりした空気に背中をブルリと一度震わせ、早足で自分の部屋
に。

部屋に戻って部屋着からジーパンと長袖に着替えて首にマフラーを
巻く。財布を持って準備万端と、部屋を出て廊下の突き当たりにあ
る玄関へと足を向ける。

「お姉ちゃんどこ行くの？」

玄関で靴を履く繰歩に声をかけるのは妹の三國みくに。

「ちょっとそのコンビニ行ってくるから留守番よろしく」

「じゃあプリンで手を打ってあげるよ。上にクリーム乗ってるやつ
じゃないとだめだからね」

腰に右手を当て左手の人差し指を立てて横に振りつつ胸を張る、そ
んな内弁慶な妹にハイハイと返して繰歩は家を出る。

悠傲家はマンションの六階に一室を借りている。彼女は涼しげな
空気を慎ましやかな胸で吸い込み、晴れ渡った空を一瞥してからエ
レベーターに乗り込んだ。

マンションから少し歩いてたどり着いたのは某コンビニエンスストア。

いらっしやあせー

という声を聞き流して店に入る。そこで目当てのアイスとプリンを持ってレジに並び、お金を払ってすぐに店を出た。

ありがとござーしたー

という間延びした声を背に店を出た繰歩は早速袋から取り出し、ギヤリギヤリ君と銘打った袋からアイスを掴みだして一口かじる。やっぱり寒い日にはアイス食べるのが王道よねーと口内に広がる冷たさに首を竦めながらによよと笑みを浮かべる。

中身を無くしたアイスの袋をコンビニのゴミ箱に捨てて、用事も済んだし帰るかなと歩き出す繰歩だった。

歩き出してすぐに、ふと、視界の中に見慣れた背中を見つけた彼女はその不振な光景に足を止め、少しばかり逡巡したあと最後の一口を口の中に放り込んでからそこに歩み寄っていく。

「こんにちは繰歩」

「こんにちはタマ先輩。それで何してるんですかそっちの人は？」

近付いてくる前から気づいていたのだろう、壁に背を預けてパッ

クのジューズを啜っていた白九尾しやくび　　玉藻は繰歩たまもに声をかける。
声をかけられた繰歩も返事を返したあと胡乱つろんげな瞳でこちらに背中を向けて電柱の影から頭だけ突き出した変態を指差して問いかける。

それに言葉は返さずに電柱の向こうを指差す玉藻。
その指差した方、電柱の向こうに視線を飛ばすと、右手で妹と手をつなぎ、左手にグラマラスな美女に抱きつかれたまま歩く神山世界がいた。

眉を窄めて、まったくこれだからリア充はと、心の中で毒づいていた繰歩はちらりとこちらに振り向いた美女と目が合う。しかもウインクを飛ばされる。びくつと肩を震わした後、それに目礼を返して玉藻に向き直った。

「大体分かりましたけど、これ、隠れる意味あるんですか？」

ないわねと素っ気なく返す小さな先輩。繰歩は眉間に寄ったしわを解きほぐしながら、変態に視線を戻しその後頭部をひっぱたく。

「あいたっ！　なんだよ、クリフいたのか？」

いきなり叩くなよーと唇を尖らせる三葉に溜め息を吐く繰歩。黙っていれば、黙っていれば眼鏡属性文学系美少女な先輩に可哀想な視線をくれる。

「先輩、いつから変態にジョブチェンジしたんですか。いくら振り向いてくれないからってそれはどうかと……」

その蔑むでもなく馬鹿にするでもない、ただ憐憫だけがこもった視

線にたじろぐ三葉。

「う、な、なんだよー。いいだろ、別に。ちょっと遠くから眺めてただけだろ？ いや、それに、だって、謳歌お姉様いるから近づきずらいんだもん」

そう言っただけで離れていく三人、主に真ん中の人物を涙目で見送る三葉。流石にこのまま尾行するのは恋する乙女としてダメだろうと、後頭部に突き刺さる後輩の視線で渋々考え直した。

「はあ、それじゃ行くわよ三葉」

色ぼけに絡むのが面倒だとばかりに成り行きを黙って見ていた玉藻は、一段落した所でようやく壁から背を離して声をかける。

「ん？ どこに行くんだタマ？」

「……。駅前の喫茶店。新メニューのアップルパイが美味しいって評判の。あんたが行きたいって言って私のこと呼び出したんでしょ。うが。あんたの頭ん中、味噌の代わりにアンコでも詰まってるのかしらねえ？」

切り開いてみたくなってくるわ、と無表情で呟く玉藻にこれはヤバいと冷や汗を流す三葉。

「あ、あははー。そ、そうだったな！ ああつ、そうだちょうどいからクリフも一緒に行くか！ 人数は多い方が楽しいしなー！！」
「は？ いや、ちよつ、誰が行くって、ちよつと手離してください！ 嫌ですからね？ 緩衝材とか嫌ですからね！？」

三葉に手を引かれながら繰歩はああ、やっぱり無視して帰ればよか

ったと少し前の選択を嘆くのだった。

そこから少しばかり歩いて三人がやってきたのは喫茶店『猫の瞳』

以前に世界たちを含めた四人で訪れたときに雰囲気がよかったので覚えていた三葉は、学校の噂でこの店のメニューに最近追加されたアップルパイがヤバいくらい美味しかったという話を聞いて、休日を使って訪れたのであった。

カランカランとドアを鳴らして順に店へと入る三人。

「うわ、すごい混んでますね」

「うえー、これ席あるのかなあ？」

「あんたが馬鹿なことしてるからじゃない。反省しなさい」

店の入り口で立ち竦む三人の下に、店員なのだろう、控えめにフルルのあしらわれた黒い制服を着た可愛らしい女性がやってくる。

「すみません、只今満席でして、しばらくお待ちただかないといけないのですが、あの、相席でよろしかったらすぐに座れるのですが」

そう言って説明する店員に三人は顔を見合わせたあと、頷き了承の意を伝える。よかったというように顔をほころばせた店員は、それではこちらにどうぞと言って予め許可を取っていたのだろう、三人を案内する。

案内されたのは店の一番奥にあるボックス席。そこに店員が近づき三人の方に背を向けて座る女性客に確認を取る。

すぐに確認をとれたのだろう軽く頭を下げたのを見て三人はそちらに近づいた。

それではこちらにどうぞ、と言って厨房の方に下がっていく女性に軽くお辞儀を返して、振り向き、

「なんや今日はついとるなあ。休日に可愛ええ後輩とお茶できるなんて」

当然休日なのだから制服姿ではなく、ハイネックの黒いセーターにジーパンと身軽な服装を纏い、背もたれにもたれて足を組み、ティーカップを持ったまま唇を釣り上げる、気怠げな色気を纏った女性を見て

三葉は純粹に驚き、玉藻は嫌そうな顔を、緑歩は溜め息を吐く、と三者三様の反応を返した。

「なんだ、クロ先輩だったんだな、相席って。知り合いでよかったな」

笑顔を浮かべて一番に席に着いた三葉は後ろの二人に声をかける。

「はあ、最悪ね。休日に赤白先輩の顔見なきゃいけないなんて」

玉藻は毒づきつつも座ろうとした三葉を引っ張り出して一番奥へと座る。

「ちょ、なにすんだよタマー？」

「せめて視界に入らないように外眺めてたいのよ」

「くっ。相変わらず狐くさい女、おっと違った違った。乳臭い女やなあ玉藻。そんなことばかり言ったら男に逃げられるよって」

「……ちっ。いいかげん先輩の顔に張り付いた汚物、塞いで上げま

しょうか？」

にやりと厭らしい笑みを浮かべる黒子と無表情に青筋を浮かべる玉藻。

それを見てああ、やっぱり帰っておけばよかったと、物理的な殺意が乱舞しだした空間にゲンナリとする繰歩。

それに袖をつかみ涙を浮かべて助けを求めてくる三葉にも溜め息を吐きたくなる。

いいかげんに学習しろと。いつもいつも学校で出会う度に同じような空気を体感しておいて次の日には忘れるのだからこの人は。基本的に自分の好きな人間に対して悪感情を抱かないお人好しを見て、こういうところは世界さんと同じ種類の人なんだけどねーと、いつも迷惑をかけられるのに嫌いにはなれない先輩を見て、溜め息を吐いてから三葉の隣に座る。

「ほら、先輩方。三葉先輩みたいな善良な一般人のいるところでそんな殺伐とした空気出さないでください。今日はお茶するのが目的なんですよ？」

その繰歩の言葉に玉藻は一つ息を吐いて黒子から視線を外す。黒子は何事もなかったかのように、静かに紅茶をすすっていた。

「あ、あの！」「ご注文は、よろしいでしょうか……？」

そこへタイミングを計ったかのように先程の店員が　　実際
遠目におどおどと、こちらの席を見ていたのに繰歩は気付いていた
のだが　　若干、いやさ、かなり怯えた様子で注文を取りにく
る。

それを横目に見て玉藻はやり過ぎたわね、と苦虫を噛み潰していた。

それと私を見て唇を釣り上げるあの女ブチ殺してやるうかしら、と再び不穏になりかけた所で、

「三葉先輩、注文ですよっ」

「っ！ アップルパイいっちょよう！..」

「私は紅茶をお願いしますっ」

「私はミルクティーだ！ タマはどうすんだ!？」

「え？ あ、私はコーヒーで」

「承りましたあ！」

「私も紅茶のお代わりもらおかな」

打ち合わせでもしてきたのかお前らという具合に息ぴったりにまくし立てられ、さしもの玉藻も目を丸くして素直に答える。そして自分の役目を果たした店員はばったばったと厨房へと逃げ帰るのだった。

漸く霧散した空気にほっとナイ胸を撫で下ろした二人であった。

「ところでクロ先輩は今日は一人で来てるのか？」

すぐに気持ち切り替え先程注文したアップルパイに思いを馳せていた三葉は淑やかにカップを傾け、持参したのだろう小動物の躰け方と銘打たれた本を読んでいた黒子に話しかける。自分にかげられたその声にそれから目を離して答える。

「そうや、なんやここの紅茶は美味しいって話を、『とある後輩』に聞いてな」

口角を僅かに吊り上げ目を細めた黒子はことさらに“とある後輩”という部分にアクセントをつける。それに反応を示す可愛い後輩たちに笑みを深くして続ける。

「ほんまはその後輩も誘おか思ってたんだけど今日は家族サービスの先約が入ってたみたいでなあ。残念やけど“また日を改めて誘ってくれる”ってことやから今日は一人で来たんよ」

目の前の獲物は狩らずにはいられない肉食系黒子であった。

「なっ、なっ、クロ先輩までっ！ は、はんたいい！ 二人つきりでなんて反対だー!？」

「そう言われても向こうから“二人で”行こって言うって誘われたから、なあ？」

いい感じにパニックに陥っている三葉をくつくつと笑いながらあしらう黒子。我関せずと外を眺める玉藻は当然止めることなどせず、繰歩は繰歩で知らぬ振りをしながらもしっかり耳だけは傾けていたのだった。

「はあー、美味そうだな」

「ほら、お皿貸して下さい。赤白先輩も食べますか？」

「気にせんでええよ。私はもう食べたからな」

しばらくしてやってきた今日のお目当てのアップルパイに目を輝かす三葉。それを切り分け三人の皿に載せる繰歩。

「それじゃいただきまーす」とフォークを使って口に運んだ三葉はほんとに美味しいなーと呟きながら味わう。

「確かに美味しいんですけど……。なんか引つかかるといっつか、うーん」

と一口食べてから首をひねって曖昧な言葉を口にする繰歩。

「そう？ 私はそこそこ好きだけどね、この味」

言いながらもフォークを持った手は素早く動かし続ける玉藻。

あつというまに無くなった皿の上を惜しみつつ、ミルクティーに口をつけた三葉はあつつと言ってカップから口を離して、舌をつきだした。

「ほら、あんた猫舌なんだから気をつけなさい」

とたしなめる玉藻。

そんな二人を横目に繰歩は自分の分の紅茶を口にする。

「それで、クリフ。最近調子はどうや？」

自分に視線を向け自然に尋ねる黒子に、すぐには返事せずにもう一口喉に流す。

「最近は、問題ないですよ。安定してきましたから」

「ユーゴーちゃんは？」

「三國も。いい友達が出来たみたいですから」

その、二人の間だけで理解しあった主語のない会話を二言三言交わし、けれどそれだけで満足だったのか黒子は繰歩から視線を切つて、カップの残りを飲み干す。音を立てずにカップを置いてしおりを挟んだ本を鞆にしまう。

「帰るんですか？」

「そや。あんまり後輩の時間邪魔すんのも気が引けるからなあ」

思ってもないことを言うなこのクソ虫が、と口には出さずに毒づく玉藻。

そちらをちらりと見たあと、鞆を肩にかけて席を立ち、そして今思い出したとばかりに三人の方を振り向いた。

「そついえば三葉」

ん、私？と首を捻る三葉に、

「私も最近火傷してもうてなあ。後輩の体温って結構高いから、

するときは気つけや」

何が、とは言わずに、上唇を舌で厭らしく舐めたあと、じゃあなあと踵を返し、艶やかな残り香だけを残して去っていく。

一瞬動揺した繰歩は頭を振った後、あの人がそんな甲斐性持つてるわけないのだから、どうせまた先輩の嫌がらせかなにかだろうと自分を納得させる。その後、いつもならここで騒ぎ出す人間が一言

も喋っていないのに気づき横を見れば、真っ白に燃え尽きたと言わんばかりに虚空を見つめている三葉が。

その打ち上げられた魚のように濁った瞳を見て、うわぁ重傷だなこの人と眉をすぼめ、その向こうで同じく眉間のしわを揉みほぐしていた玉藻と目が合い、お互いに盛大な溜め息を吐き出すのだった。

赤く染まりだした空の下、右手にコンビニの袋、左手にアップルパイの入った箱を持ち一人家までの道を歩く繰歩。

あれから、二人の懸命な励ましと持ち上げで自分を取り戻すことに成功した三葉。

気分直しにもう一度アップルパイを注文し、食べ終えた頃には店の中も自分たち以外の客はほとんど残っていないかった。それから三人は店を出て最初に出会ったところで別れた。

はぁ、と空を見上げて息を吐き出す。アイスを買うだけのつもりが随分な一日になったものだと言わんばかりに苦笑するのだった。

家に辿り着いた繰歩はただいまーと言ってリビングへと向かう。リビングのコタツでテレビを見ていた三國は遅いよと文句を垂れる。はいはいちゃんとお土産あるからと言って繰歩はコタツの上にプリンと箱を置き、それに瞳を輝かして飛び付く妹に、もうすぐご飯だからあとにしときなさいとたしなめる。それにおざなりに返事して『猫の瞳』で買ってきた箱を開けた三國は喜びの声を上げるのだった。

た。

「わあ！ これって世界お兄ちゃんのアップルパイだよねっ、私これ大好き！」

それを聞いた繰歩は自分の部屋へと向かおうとしていた足を止めて振り向き、ああ！と得心をしたように手を叩く。

あの違和感はそれだったかと。
喉につつかえた小骨が取れた繰歩はすっきりした顔で自分の部屋に向かうのだった。

ちなみに三日連続で『猫の瞳』に別の女性と行くことになった少年がそのマスターに冷やかされたり、姉たちに遊び過ぎだと折檻されたりする話は完全に余談である。

神山斬理の一日

「 、 、 」

深く深く深淵へと沈んだ私の心へ、優しく木霊するのは、形の無い言葉の羅列、誰かの声。

聞きなれた、その声に、私は心に纏った鎧を剥がしていく。

「 、 、 」

再度、響いたその声で、深淵へと光が差し込み

「おはよう斬理姉。ご飯だから早く着替えて降りてこいよ」

神山家の長男は、ベッドの上に座り両目を半開きにしてわかった
と呟く次女を残し部屋を出ていく。

それを見送ってからもしばらくじっとしていた斬理は、鼻をつく
いい匂いに反応してようやく起動し始める。掛け布団をたたんで、
ベッドの上に座ったまま寝巻にしているジャージを脱いでいく。寝
るときはブラジャーをつけない派の彼女はパンツードという非常に
扇情的な姿のままベッドから降り、手に持っていた刀のようなもの
をその脇に置いてからクローゼットへと向かう。そこから制服を取
り出して姿見の前に立った彼女は、そこに映る自分を眺めて両手で
胸のふくらみに触れる。

「ふむ、少し成長したか？」

大きすぎず、かつ小さすぎることもない、しかして完璧な造形美
を保持したそれ。男子として生まれたものならば憧れ、そして目指
してやまない桃源郷がそこにはあった。

「あまり大きくなってしまったては動くのに邪魔なだけなんだがな…
…。姉さんみたいになってしまうことはないだろうが」

自分はまだ成長半ばと信じている全国の少女たちを敵に回すよう
な言葉をぼやく斬理。

しばし形を確かめてから、弟に選んでもらったブラを手取る。そ
れから制服を着込み最後の仕上げに、その黒曜石のような長く美し
い髪をこれまた弟にもらった赤い紐を使い一つにまとめて結ぶ。頭
を振って感触を確認した斬理は鞆を手にしてから部屋を出て、朝食
が待つ階下へと向かうのだった。

今日も今日とて美味しくぺろりと朝食をいただいた斬理は見送りの
言葉を背に家を出る。

家から走って十五分（あくまで次女の足の速さの指標で）、豪華な門をくぐった彼女の眼前に聳え立つのは『桐野女学院』。

初等部から高等部までエスカレーター式で全校生徒数がおよそ一万人在籍する学校である。高等部に所属する斬理は向かって右手に建つ校舎へと向かう。ちなみに左手には中等部、その二つの建物の間を抜けた正面には初等部の校舎がある。

高等部の敷地内を進んで行く斬理の前にやがて見えてきたのはドーム状の建築物である高等部専用の体育館であった。彼女は遠慮なくその中に踏み込んでいく。中は広く、それぞれの部活ごとに練習に励んでいる少女たちの声が反響しあつて賑やかな様を呈していた。邪魔にならないようコートの間を抜けて行く斬理に練習中の少女たちが気づき、手を止めて挨拶をかけてくる。

大半の少女たちが斬理お姉様と呼んでいるところに彼女の学校での立ち位置が表されていた。

それらに笑顔で挨拶を返しながら一番奥で練習していた剣道部の下へとやってきた斬理。おはようございますと部員たちから次々とかけられる声に返事をしながら奥にある更衣室へと向かい、そこで家から持ってきた（長女にもらった）彼女専用の剣道着へと着替えて、これまた家から担いできた（長女にもらった）彼女専用の木刀を持って更衣室を出る。

「遅かったわね神山。もう練習始めてるわよ」

「うむ、すまない。今日は朝食が一段と美味しかったからな。やはり世界の作る料理に勝るものはない！」

「その言葉はもう聞き飽きたから。準備出来たんだったら混ざりなれよ」

お腹をさすり幸せそうな笑顔を浮かべる斬理に呆れる少女。

名を薬島やくしま 冴子さえこという。

鼻屑目に見て中学生程度の外見をしたこの少女は、斬理の同級生で三年が引退してからは剣道部の主将を任されていた。次女の言うところの身近な原石の一人で、一般人としては最上位に近い実力を有しているとは次女談である。そうして斬理も部員たちに混じり基礎練習を始めるのだった。

朝練を終えた斬理は体育館に備え付けのシャワールームで汗を流してから冴子と共に二年の教室に向かう。

自分の教室の前で冴子と別れてから中に入り、親しげに声をかけてくるクラスメートたちに斬理も軽く言葉を返しながら自分の席に向かう。

そこには、彼女の隣の席で窓枠にひじを突き、赤茶色の髪を風に揺らして微笑む少女、大野 燐火りんかが笑顔を浮かべていた。

「やあやあ、今朝もお勤めご苦労様」

「うむ、おはよう燐火」

「ああ、おはよう斬理」

燐火へと挨拶を交わしながら自分の席に座る斬理。彼女が落ち着いたのを見計らって燐火は話しかける。

「そういえばなんだけど、我が家の料理長がまた世界君を招けないかって言ってるね。この前の食事会で料理の腕を気に入ったみたいなんだ。それに人柄に関しても随分と褒めていてね。彼、今度はうちの未亡人まで口説いたみたいだよ？」

「む、うむ、またか……。料理長と言えばメイヤさんか。私も色々世話になっていくから連れて行くのは構わんのだが。しかし、やはり世界の年上好きが心配だな」

基本的に老若男女、つまり誰にでも優しい、まあ悪く言えば優柔不断な世界なのだが、過去にあまりの天然ジゴロっぷり（多分に身内鼻屑な視点によるものと明記する）に将来を心配した姉と二人、共謀して酔わして聞き出したところ、同年代よりも、年上で心の成熟した女性が好みだと漏らしていたのだ。しかも二十代後半がストライクだというのだから。ちなみにこのとき世界は小学校六年生だった。

「そのくせ妙に無防備だしね世界君。まあメイヤさんもいきなり襲ったりはしないと思うから安心して大丈夫だよ。……ただ世界君が彼女を本気にさせた場合の保証はできないけどね」

そう言ってニヒルな笑みを浮かべる燐火。

「うーむ、ならそのあたり世界にはしつかりと言い含めておくでしょう。ついでに危機感の無さ過ぎるところも合わせて言っておなければな！」

と何度目になるかわからない決意を固めるのだった。

「ああ、あとそれと山本さんが機会があれば鍛錬に付き合ってくれないかって言ってたよ」

「おお！ 國子さんかっ。勿論こちらも大歓迎だ！」

「それじゃあ今度の休みに早速行かしてもろおう」

「ふふ、歓迎するよ。他のメイドたちも喜ぶだろうっしね」

それから二人はHRが始まるまで雑談を講じ、

時間は飛んで放課後。

燐火に見送られ教室を出た斬理は廊下ではったりと出会った冴子と共に体育館へと向かう。

部内で斬理の練習相手を勤めることが出来るほどの腕を持つものは少なく、というより一人しかいないため彼女の相手を勤めるものも自然その一人に任される。

高速で剣戟が交わされるその様子は、まさにひとつの芸術のような美しさがあった。周りで練習に励んでいた少女たちも手を止めてその剣の舞いに見惚れる。

それはもはや剣道ではないだろうという無粋な突っ込みは、どこぞの長男のいるはずもないこの場でするものはいなかった。

夕方。練習を終え早々に学校から走って帰宅した斬理。

お腹をさすりながら玄関をくぐる。玄関まで漂ってくるいい匂いにお腹が鳴き叫ぶのを止められない。

ただいま、と言ってから心持ち急いで靴を脱ぐ彼女のもとに駆け寄ってくる小さな影。

「お帰りっ」といって飛びついてくる小さなお姫様を片手で抱きとめ、ただいま神啼かんなと頭を撫でる。ニコニコと笑顔を浮かべる妹を抱えたまま居間に顔を出せば、出迎えるのは溜め息と苦笑が似合う弟と、妖艶な笑顔を浮かべる長女、そして温かな食卓。

「むふう、美味しそうだな！」

「先に着替えてきなよ姉ちゃん。まだもう少しかかるから」

「あんまり遅いと食べちゃうからね、せっちゃんを」

こうして今日も彼女の日常は過ぎていくのだった。

神山斬理の一日（後書き）

本日のビックリドッキリアイテム。

？斬理専用木刀

二年前の誕生日にもらったもので、長女がどこぞの宇宙の果てで作られたが危険なために廃棄処分にされた重力制御装置を、バイト先でさらに改造して木刀に取り付けたもの。およそ五百万倍にまで木刀にかかる重力を操作できる。ただ斬理本人にしか影響しないよう、なんやかんやと安全な改造を施されている。部活動中はこれを使って練習している。

？斬理専用剣胴着

同上。

両アイテム共に斬理専用にはチューンナップを施した厨二使用のため、第三者の取り扱いの際には十分注意してください。

拳で語るのは何も男だけではないのだから

高速で剣戟が交わされるその様子は、まさにひとつの芸術のような美しさがあった。周りで練習に励んでいた少女たちも手を止めてその剣戟の舞いに見惚れる。

二本の木刀が交差する。責め立てるのは冴子の剣。自らの小さな体格などものともしないような剛剣をもって上下左右、変幻自在に責め立てる。常人には目で追うこともできない程の速さで振るわれるそれを、しかし、斬理はその手に持った木刀でいなしていく。

どれだけ攻撃したのか、汗一つかかずに全ての攻撃をいなし続ける目の前の美しい少女から距離をとり、いったん手を止め構えを解く冴子。

まったく、すぐそこに背中見えてるってのに、いつまでたっても手が届く気がしないわね。

「どづした？　こんなものじゃないだろ薬島」

と下段に構えたまま佇む斬理。

普段はどこか抜けたところのあるこの美しい少女は、こうして剣を突き合わせた途端に、日本刀のように鋭い、それでいてまるで底の見えない大海を覗いているような、そんな測り知ることのできな^{プレッシャー}い圧力を感じさせられるのだから、本当に人は見かけ通りにいかないものである。そんなことを心中で考えながら、ゆっくりと木刀を肩に担ぎ、腰を下ろす。

幼いころから自分の家、ひい祖父が築いた名門と謳われる薬島の道場で腕を磨いてきた彼女は、すぐにその才能を開花させ、周囲からは天才と評されてきた。自分でもその才能を認め、しかし、それに溺れることなく鍛錬を重ね、中学に上がる頃には周りに敵すらいなくなっていた。そう思っていた。思い返せば自分は長年の環境から少なからず天狗になっていたのだろう。

しかし、その長くなった鼻も中学生のとき、彼女たちに出会って簡単にへし折られた。

一人は二個下の後輩。飄々とした態度でこちらをおちよくる女。何度あのツインテールをもぎ取ってやるうかと思ったことが。

そしてもう一人は目の前の少女。二年の冬、噂を聞きつけ肩慣らしのつもりで挑戦した私を、これまで培ってきた十数年の自尊心ごとと完膚なきまで叩きつぶした後、笑ってこちらを褒め称え、入部を勧めるような変態。

そして私では触れることすらかなわなかった憎たらしい後輩を、簡単にあしらう程の実力者。そのうえ、彼女にとってはママゴトレベルの学校の部活に毎日顔を出すような変わり者だ。基礎は大事だからな、と言って笑った彼女を見て悔しくなり部活に入り、鍛錬も今まで以上に過酷なものをごなしてきた。その結果、今では高校で主将など任されてしまった。

なぜ自分より強い彼女ではないのか聞けば、あいつの剣は感覚的過ぎて教えるのには向いていないのだと苦笑していた前主将の顔を思いつく。

それから何度も剣を交わしてきたが結局一度も勝てたことはない。

そんなある日に気付いた、いつこうに縮まることのないその距離に、彼女が手加減しているのを。馬鹿にしているのかと問い詰めれば、彼女は満面の笑顔でこっちを褒めるのだから怒りも萎えるというものだ。

曰く、それに気付けるくらいに強くなっているということだと、さすがは私の友だと。

ただ本気は出していないけれど、手を抜いたことは一度もないとも言っていた。

それは、つまり私のレベルに合わせて、私がぎりぎり勝てないレベルで彼女はいつも戦っていたのだ。まったくそんなことにも気づくことが出来ないくらいにやつとは差があるのかとその当時は落ち込んだものだ。

でも、だからこそ、面白い。

今ではそう思えるようになった。つまり自分が強くなればいつか、いつか彼女の本気に辿り着けるのだから。……まあそれがいつになるのかは分からないが。

それでもいつかは必ずその背に届いて見せるから、と。

刹那、瞳を閉じて呼吸を整えてた冴子は、目の前で佇む少女に獯
猛な笑みを向ける。

「はっ、そんなわけないでしょ。こっからが本番!」

それに斬理も笑顔を浮かべ、

「
それでこそ、私の友だ」

呟く。

交わされる剣戟と舞う少女ふたり
言葉はいらす

親友たちは今日も剣で語り合う。

『ある一人の人間のそばにいと、他の人間の存在など全く問題でなくなる』

カーテンの隙間から差し込む光が、部屋の形を薄らと浮かび上がらせる。

その中をゆっくりと奥へと進むのは、一人の少女。奥にはシングルサイズのベッドと、そのうえで静かに寝息を立てている少年が。

ベッドの傍らに歩み寄った少女は、そのまま、ギシリとベッドを軋ませ、起こしてしまわぬように、少年のお腹を挟んで膝立ちになる。

その態勢から今度は少年の頭の横に両手をつき、覗きこむようにその寝顔に視線を落とした。何をするでもなくただ少年の顔を眺めていた少女は、やがてその瑞々しい唇を開き、静かに声をかけた。

「朝やで。起きや世界」

染み込むかのように耳に入ってくるその声に少年は、うんと小さく呟いてから口元まで布団の中へと沈む。

彼女は眠り続けようとする少年を見て微笑を浮かべる。昔からどこか大人びたところのある彼の、こつした無防備な姿を見ることが出来るこの貴重な時間が、彼女はお気に入りだった。

しかし、いつまでも彼の寝顔を眺めているわけにもいかず、惜しみながらも彼の柔らかな右頬をきゅっつつまむ。

「ほら、世界。私のお腹がこれ以上くびれてまう前に起きてや」

右頬を放してから、彼の目元にかかった前髪を手でゆっくりと払いのける。それに少し瞼を震わして少年、神山世界は覚醒する。

「ん、おはよう黒子、すぐ起きる、から。……えっと、……あのさ、どいてくれないと着替えも朝食の準備も、出来ないんだけど？」

拳一つ分けたところでこちらを見つめる美麗な御尊顔に向けてお伺いをたてる世界。そのぶつきらぼうな物言いの中に僅か照れが混じっているのを感じ取った彼女は唇を吊り上げる。

「なんやったら、世界が私のこと食べてみるか？」

「……生憎カニバリズムな趣向は持ち合わせて無いんでね。ほら、阿呆なこと言っていないでどきなさい」

冗談混じりの問いかけに情緒の欠片もなく返され慥然とした表情になる少女。そんな様子を見て諦めたように溜め息をついた世界は、彼女を抱き寄せるようにしながら起き上がる。慣れたように少女を抱えたままベッドから降りた世界はすぐに彼女を離、そうとして腰にまわされた手によって失敗した。

「……あの、黒子さん？」

「んふふ、まったく、世界はほんまヘタレやなあ。まあ今日はこれで誤魔化されてあげるわ」

胸の中で自分を見上げ厭らしい笑みを浮かべる幼なじみの少女、赤白黒子に言われた言葉に、彼は乾いた笑みを浮かべることしか出来なかった。

二人揃って一階に降りた彼らは台所に向かう。

「そんなにおなか減ってるならわざわざ起こしに来ないで自分で作ればいいのに」

「それはそれ、これはこれってやつや」

あくびをかみ殺しながら問いかける世界とにやにやと楽しそうに笑みを浮かべて答える黒子。もはや定例句となった問答を今日も繰り返しながら彼は冷蔵庫の中を確認する。

「んー卵が余ってるな。サンドイッチにするか？」

「それはええな。世界の作るサンドイッチは好きやで」

「黒子もそれくらい作れるだろ？」

「だったら世界の分は私が作ってあげよか」

「ああ、それじゃあそっちは頼むよ」

「任せとき。愛情たっぷり入れといたるから」

「悪いけど、うちは愛の押し売り販売はお断りしてるんで」

「残念すでに完売済みや。ちなみにクーリングオフの期間は終わってるから諦めや」

それからしばらく。朝食を食べ終え準備を済ませた二人は揃って玄関を出る。先に家の前に出た黒子は世界が鍵をかけるのを待ってから隣に並んで歩き出した。

「世界、今日の夕飯はどうするんや？」

「ん？ ーそうだな。とりあえず買い物行って考えようか。週末は斬理姉が帰ってくるみたいだから多めに買っておきたいし」

「先輩帰ってくるんか。それは久々に賑やかになりそうやなあ。じやあ帰りはいつつものところで待っててや？」

「ああ、わかってるよ」

言いながら世界が差し出した手を、黒子が握り返す。

寒さのせいか、少しだけ頬を染めた少女と、それに気付かぬように空を見上げて白い息を吐く少年は、互いが互いを感じる事が出来るその距離で、今日という日常をゆっくりと歩いて行くのだった。

『ある一人の人間のそばにいと、他の人間の存在など全く問題でなくなる』

人物紹介

神山 世界

17歳。5人家族の末っ子。現在は一人暮らし中。黒子とは同じ高校に通っている。普通に凡人。

赤白 黒子

18歳。小学校の時に神山家の近所に引っ越してきてから世界とは幼馴染をやっている。高校3年で部活を引退してからは四六時中世界と一緒にいるとの噂が。普通の女子高生。

神山 斬理

20歳。普通の大学生。寮生活中。ブラコン。

神山 謳歌

25歳。とあるIT系企業の社長として世界中を飛び回っている。普通の社会人。ブラコン。

なおこの物語は本編とは違う、いわゆるパラレルワールドの物語となっているのでご注意ください。

後悔と絶望と恐怖と洗濯日和

「、さん。だ、め」

熱のこもった息を吐き出し、弱々しく、制止の声をかける。しかし、すでに体に力は入っておらずその抵抗もただ上目遣いに見つめる程度のことしかできていなかった。

「大丈夫だから、安心して下さい。アタシに任せてくれたら天井のしみを数える暇もないくらい気持ちよくしてあげますから、ね？」

その声を振り切ってしなやかな指を自分の指に絡めていく。その自分のものとは違う、たぎる情欲の熱を感じて、自分の体が熱で溶かされて混じりあっていくような、そんな曖昧な錯覚を覚える。

「っ、いつ、だめ、麒麟さん、んっっ、俺、ソコは、弱

」

「……あのさ、姉ちゃんたちさ。さっきから、ナニ、やってんの？」

ソファーに座ってお茶をすすり我閉せずを貫こうとしていた世界は、隣で繰り広げられるソレが濡れ場に突入したあたりでついに我慢出来ずに問いかけるのだった。

「見たらわかるでしょう？　せつちゃんは受けです」

なにを言っているんですかあなたは、というような表情を浮かべた桃子は、先程までの艶を含んだ弱々しい声とは打って変わって凜とした声で見当違いな答えを返す。

「うふ　昨日偶然こんな本見つけて、とおっても面白かったから是非せつちゃんにも見せてあげようと思って」

手に持った青色のカバーのノートをこちらに見せて極上の笑みを浮かべる謳歌。心底楽しそうな笑みを浮かべる姉からゆっくりと視線を外した世界は、そんな彼女たちの横で床に手について滂沱と涙を流し、この世全ての不幸を背負わされたと言わんばかりに暗黒色のオーラを垂れ流す女性に視線をやる。

「……出来心、出来心だったんすよお。悪気はなかつたんすよお。だからもう勘弁してください」

先までナレーションをやらされていた彼女は、自らの暗黒面から滲み出たその作品を目の前で朗読されるといふ苦行に耐えきれず話半ばにして心は碎けていた。

「夜久、何を言っているのですか？　あと半分も残ってるんですから頑張つて下さい。この後はようやく氷の女王の出番なんですから。確か、彼氏に振られて魔神に堕ちたところを主人公の青い髪の美少女に退治、されるんですよね？」

「そうよお、その後はたしかあ、主人公の青い髪の美少女がヒロインの中学生の男の子を『ビッチ・マイスター変態姉妹』から助け出すんだったわよねえ？ うふ、うふふふふふ」

氷の微笑を浮かべた桃子と妖艶な笑顔を貼り付けた謳歌に挟まれた麒麟はひうつ、と悲鳴をこぼし小さく肩を揺らす。

「うふつ。しょうがないわねえ、この辺で勘弁してあげるわあ」

ほんとうすか！と喜色の笑みを浮かべた麒麟が喜びの声を上げようとして、顔を上げた彼女は両腕にかかった圧力に声が萎み、顔面を蒼白にする。

「だから、この続きは私の部屋でやりましょうか。だいじょうぶよ麒麟ちゃん？
すぐには楽にしてあげないからねえ」

「そうですね、安心して下さい夜久。たとえ内臓だけになってもあなたはあなたなんですから。ちゃんと油性ペンで名前書いて上げますから」

「ひいつ！ 先輩方、ま、まっってくださいいい！？ 死にたくないっす！ 死にたくないっすううう」

黒服に連れられたグレイよろしく、両脇を抱えられた麒麟は二人と共に階段へと消えていく。

居間まで響いていた悲鳴が突然プツリと途切れたところで、世界は階段の方から目を放してソファーに座り直す。そして湯のみに残ったお茶を飲み干してから思う。

麒麟さんって結構チャレンジャーだよなあ。

「 さて、洗濯物干したら買い物行くか」

膝をパシんと叩いて気持ちを切り替えた世界はソファーから立ちあがり風呂場へと向かう。

そうして彼は今日も今日とて平和な一日を過ごすのだった。

後悔と絶望と恐怖と洗濯日和（後書き）

その後、彼女を、見た者は、誰もいない。

世界に響く少年たちの詩 前編（前書き）

時間軸的には十月初めくらいの話です。

世界に響く少年たちの詩 前編

「バンドやるうー！」

とある朝の教室。自分の席（廊下側の窓際）で静かに読書していた玉藻は、登校してくるなり目の前でトンチンカンなことを言い出した親友を一瞥して、そのまま読書に戻る。

「む、無視するなよー！ バンドだよバンドっ。今流行りの！ 波に乗ろうぜっ、なっ？」

「……はあ。で、その心は？」

「か、神山も誘って、お、思い出作りをゴニョゴニョ……」

玉藻は本から顔を上げ白けた瞳を目の前の、顔を赤く染めてイヤンイヤンと悶える三葉に向ける。

「はあ、こんなこと言ってるけど、あんたたちはどうするの？」

そのまま玉藻は三葉から視線を外して開いた窓から、たまたま廊下を通りかかった世界と鬼心に問いかける。それにつられるようにして慌てて顔を向けた三葉を見て、世界は苦笑する。

「バンドって言っても、そんな簡単にできるもんじゃないだろ？
そもそも俺楽器弾けないし、なあ？」

「……ああ。俺は人前に出たくないから、やるなら他を当たってくれ」

「というわけだから諦めなさい」

そんな男二人と親友の言葉で三葉は泣く泣く諦めるのだった。

「 ていうことが学校であつてさ」

夕食後、ソファで神啼かんなを膝の上に乗せたまま雑談に講じていた世界は、ふと今朝学校であつた会話を思い出しそれを家族に話す。

「ほう。それはもちろん世界が歌うんだらうな？」

その話を聞いた斬理きりは嬉々として問いかけた。

「え？ いや、だからやらないって」

「私、あれがいい。お兄ちゃんがいつも歌ってくれるの」

「いや、あのね神啼。だからお兄ちゃんは」

「うふつ。だったら御披露目する場所はお姉ちゃんが準備してあげるわあ」

どンドンと雲行きうみゆきの怪しくなってきた会話に世界は冷や汗を浮かべる。

「だからさ、本当に、ちょっとだけ聞いて？ 俺はやらないって」

「そつといえ、姉さんの大学でもうすぐ学園祭あつただらう？」

「そうねえ。実行委員の子に私の知り合いがいるから話は通してお
くわ。うふ、よかったわねせっちゃん」

「いやいや冗談きついな謳歌姉。だいたい中学生の即席バンドなん
か」

「うむ！ 宣伝は任せておけ世界。燐火にも手伝ってもらうからは
つちりだ」

「うふふ ヴォーカルがせっちゃんなんて、とつても楽しみねえ
なっちゃん？ 麒麟ちゃんにもポスター作らせておかなきゃ」

「うん。お兄ちゃん、楽しみだね」

「
という訳なんだ。すまん」

翌日。放課後の教室で悲痛な表情を浮かべた世界は昨晚の出来事を
説明していた。それを聞いた三人の反応は様々。三葉は喜色満面、
玉藻は嫌そうな顔を、鬼心は諦観の表情を浮かべた。

「そうかあ！ さすが謳歌お姉様だなつ。一カ月後かあ、たのしみ
だな」

「……世界の姉たちが動いたとなると中止など許されんだろうな」

「……はあ。なんて無駄な行動力なのかしら。もうどうにかするし
かないわよね。断花あんな何かできる？」

「……太鼓なら」

「じゃあ、あんたドラムやりなさい。三葉はギター、私はベースやるわ」

「ええー？ 私ギターなんか弾けないぞ？」

「弾けない？ 弾けるか弾けないかじゃないのよ三葉。一か月でどうにかするのよ。元はと言えばあんたが言い出したことなんだからね」

「でもさー、私歌いたいー。タマと違って私は細かい作業に向いてないんだよ」

「……。だったらその役に立たない両手ネジ切ってあげるわよ？」

「あ、あははー！ 冗談だよタマ！」

「……それで、俺は？」

「神山以外にヴォーカルやらしたときの面倒事は全部あんたが取ることになるってことはわかってるんでしょうね？」

「ははっ、わかってる、わかってるさ。聞いたただだよ……」

あれほどやる気にあふれた姉たちの意思に抗うことなど出来るわけもなく、まあいつものことかと盛大に溜め息をついた世界。

「ところでさ、どこで練習するんだ？ 私ギターとか持ってないんだけど、買わなきゃいけないのか？ 今月はお小遣いピンチなんだよー」

「ああ、それなら心配しないでいいよ。燐火さんがなんだか張り切ってるみたいで、用意しといてくれるらしいからさ」

「大野 燐火、っていったかしら」

「……大野グループの？」

「ああ、二人は直接面識なかったっけ？ まあ、あの人が任せろって言った以上心配する必要はないと思うよ」

「燐火さん綺麗だもんなー。おっぱいもおっきいしなー」

「それで、具体的な話は？」

「ああ、それは聞いてみないと、ん？ メールみたい、

……、今日から大丈夫だって、ははっ、スタジオ建てたんだってさ。スタジオって一晩で建つんだなあ。楽器に関しては使い寄こすから気に入ったのを好きに使ってくれて」

届いたメールの内容を読んで乾いた笑いを零す世界。なんだこのブルジョアはいつたい、といった心境である。

それから一行は学校から歩いて一五分、メールに添付してあった地図を目印に雑多とビルが並ぶ隙間を潜り抜けていき、やがて四人は開けた空間に出る。周りをビルに囲まれているのにそこだけまるで意図的に避けられているように不自然なくらい開けた空間。その中心にあるのは鋭角的なフォルムの三階建て程の高さの建物。真っ白な外壁に窓はなく、ただ不自然なくらいに豪華な扉だけが窺えた。

「えっと、ほんとにここであってるのか神山？」

「そのはずだけどな。住所もあってるし、ていうよりこれ以外にそれらしい建物ないしな」

扉の前に立ち止まった世界と三葉は、その建物を下から上まで見遣つてから顔を合わせて首をひねる。

その二人から少し離れた、建物全体を視界におさめることが出来る場所に立った二人は声をひそめて言葉を交わす。

「……ねえ断花。この場所の違和感って」

「……ああ。詳しくは分からないが、恐らく認識障害かそれに準ず

る結果だろう。『招待』されてなければ俺たちでも気づけないレベルだな」

「はあ、本当にどうして、あいつの周りにはまともな人間はいないのかしら？」

「……俺たちが言えたことではないがな」

目の前の建物を前に立ち止まっていた四人だったが、唐突に、ガチヤンと音がなり、扉が内側から開けられる。出てきたのは一人の女性。一八〇以上ありそうな長身、そして顔の右半分を覆う黒い眼帯をつけた、『メイド服』を着た女性は四人を視界に入れ、緩やかに頭を下げてから、扉の前に立つ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「えっと、あの、あなたは？」

「……………メイド」

無言で佇むその女性に耐えきれなくなった世界が尋ねてみるも、首を傾げたあと一言呟いてまた黙ってしまふ。そして話しかけたからなのか、世界のことを見つめたまま黙ってしまった女性に、思わず少年も視線を外すことができないまま口を噤んでしまふ。微妙な緊張感が二人の間を支配し始めたその時、朗らかな声が響く。

「あーやっぱりっ。ハチコちゃんったら、ちゃんと案内してっつたのにー！」

「……………ヤチルうるさい」

現れたのは、これまたメイド服を纏った小柄な女性。彼女は扉の前で突っ立ったままの同僚の姿に苦言を呈し、それから慌てて世界たちの方に顔を向ける。

「ああー！ 申し訳ありません！ 神山様、断花様、白九尾様、龍波様でございますね。お待ちしておりました。わたくしたちは焔火様より皆様方のお世話をしようとおおせつかいましたヤチルとハチコと申します。本日より任につかしてもらいますのでよろしくお願いたします」

「おおーメイドさんだ。よろしくな！」

「ああ、やっぱり焔火さんところのメイドさんでしたか。いつもうちの姉がお世話になってます」

「そんなことありませんったら！ わたしたちのほうこそ斬理様にはお世話になってますから」

「……………斬理様、凄く強い」

「あれが、大野の守護刀、護邸十三隊ね。話には聞いてたけど」

「……………隙が、ないな。死神部隊の名は伊達や酔狂ではなかったか」

「あのレベルのが最低でもあと一三人もいるなんてね。嫌がられるわけよね」

世界たちと言葉を交わしていたヤチルは、離れたところで呟く二人に向けてニコリと笑顔を浮かべ、優雅に一礼したあと、それでは中のほうへどうぞと言って扉の脇に控えるのだった。

中に入り周りを見回した世界は感嘆の溜め息をもらす。飾り気のない外観とは違い、中はゴージャスな感じで、自分がいても違和感がない程度に綺麗に飾り付けられていた。四人が中に入ったのを確認してから扉を閉め、四人に歩み寄ってくるヤチルと八チコ。

「どうですか？ 気に入ってはいただけたでしょうか？」

「すごいなー、バーカウンターまで付いてるぞタマ！」

「分かったからあんたは少し落ち着きを覚えなさい」

はしゃぎまわる三葉を見て呆れたようにたしなめる玉藻。それを横目に収めながら世界はボヤク。

「……………これ、なんだか燐火さんにすごい迷惑かけたんじゃない？」

斬理がまた無茶なこと言ったんじゃないだろうかと冷や汗を流す世界。まさか一日でこんな大事になるとは、と溜め息を漏らすのだった。そんな世界の横に立った八チコが切れ長の瞳を向ける。

「……………大丈夫。優秀だから」

「はい。わたしたちの手にかかればこれくらいあつという間ですよ。ですから燐火様のお手を煩わせるようなことありませんでしたので、そのような心配は杞憂ですから安心してください」

「ああー、そうなん、ですか？ まあ取り敢えず暫くはヤチルさんたちにお世話になるかもなんで、よろしくお願いします」

「……………お世話する」

そう言っ頭を下げた世界に八チコも頭を下げ返す。それに慌てるように反応したのはヤチル。

「いはいえー！それが私たちの仕事なんで、そのように頭を下げられたらわたくし困ってしまいますー！」

「……………ヤチルうるさい」

「もう！ ハチコちゃんもそんなことばかり言って！ 仕事してないと山本隊長に言いつけるからねーっ、もう子供扱いしないでー！！！」

騒ぐヤチルは頭を上から押さえつけるように撫でられたことでさらに騒ぎだす。

そんな二人を見ながら世界は苦笑いを浮かべ、これから本番の学園祭までにするだろう苦勞を思い、ゆっくりと溜め息を吐きだすのだった。

世界に響く少年たちの詩 前編（後書き）

『護廷』ではなく『護邸』なのは誤字ではありませんのであしからず。

メイド服の描写が少ないと思われるかもしれませんが仕様です。皆様方の脳内補完で対処するようにおねがいます。

世界に響く少年たちの詩 中編

みんな、こんにちはっ！ 私の名前は龍波三葉って言うんだ。青春真つ盛りな十四歳！ 趣味は読書で好きなものは甘いもの。か、彼氏はいないんだけど、す、すす、好きな人はいるんだ。

……… 神山って好きな人いるのかなー。かっこやさしいからきつともてるよなあ。あの包み込まれるみたいな優しさがたまらないんだよなー。週に一回は頭なでなでももらわないと手が震えてくるし……。神山とチュウなんかした日には私どうなっちゃうのか想像するのも恐ろしすぎるな！

……… ぞ、それ以上はまだ私には早いよな？ で、でもでも神山がしたいって言うなら

「………で、あんた、結局なにがしたいの？」

本格的に脳ミソ駄目になったの？死ぬの？ と蔑んだ瞳を向ける玉藻。その視線の先には、先ほどまでマイクを握り壁に向かって一人で喋っていた少女が顔を赤くして狼狽えていた。

「お、おお、おい！ い、いたのかよタマっ、いつから

「あんたがマイク持ってキャルーン とか言い出したところから
よ」

「さっ！ 最初からじゃないかよそれーっ!？」

涙目で地団駄を踏む三葉に呆れたように首を振る玉藻。

「で、結局ナニしてたの、アレ？」

「ううう。練習してたんだよ。ヤッチーに聞いたんだけどマイクパフォーマンスってのがあるんだろ？」

「マイクパフォーマンスっていうのはあんたの恥辱と汚物まみれの煩惱垂れ流すための時間じゃないからね？」

「乙女の純情を汚物なんて表現すんなよーっ！」

心に直接突き刺さるような視線と言葉に耐えきれず、涙を振りまき逃げ出す三葉を、イイ笑顔で見送る玉藻だった。

世界は商店街で買い物を買ったあと、一旦家へと帰る。このあとは最近恒例になってきたバンドの練習があるのでまた出かけなければならぬのだが、楽器の練習をする必要のない彼はそれほど急ぐ必要はなかった。というよりも三葉の練習がはかどらなくなるからすぐに来るかと玉藻に言われたためであった。

そういうわけで迎えに来た妹を引っ付けて家に帰った彼は服を着替えた後、軽く料理の仕込みを済ませる。

「さて、こんなもんか。神啼かんな、今日はどうする？」

手を拭いながら隣で自分を見上げる妹に問いかける。練習を始めて

すぐの頃、一人で留守番することになる神啼を心配した世界が他の三人と二人のメイドに了承をもらって、姉たちの帰りが遅い日や神啼が望んだときに連れて行くようにしていたのである。

そういうわけで、笑顔でココココと頷く妹を伴った世界は自転車の後ろに彼女を乗せ、しっかりと自分の腰に掴まったのを確認してから家を後にするのだった。

ホワイトハウス（三葉命名）に辿り着いた世界は、自転車を建物の横に止めて、扉のほうへと向かう。

いつも通り世界が扉を開くより先に、タイミング良く出迎えてくれるハチコと三人で向かい合って頭を下げたあと、神啼の手を引いて中へと入る。

豪華な扉をくぐってすぐの談話室に顔を出した世界は、バーカウンタ―に突っ伏し嗚咽を漏らす少女を見て一瞬固まり、それから溜め息をこぼす。

うとう、ヤッチーおかわりーと少女が手に持ったグラスをカウンタ―の内側に立つヤチルに手渡す。ヤチルは丁寧な仕草でグラスを受け取り、そこに白濁色の液体、つまり牛乳を注いでから三葉へと手渡す。それを受け取り彼女が一気飲みするところまで見た世界は裾をクイクイと引っ張られる感触でそこから視線を外し隣に移して、自分を見上げる神啼を見やる。神啼は一度三葉を見たあと再度世界を見上げ問いかける。

「ミツバお姉ちゃん、どうして泣いてるの？」

「ああー、と。なにがあったか知ってますハチコさん？」

「……………玉藻がいじめていた、かもしれない？」

「いや、俺に聞かれても……。まあいつも通りのことか」

「なぐさめる？」

「そうだなー。頭なでなでしてあげれば気分も晴れるかもな」

何だかよくわからない使命感に燃える神啼はコクコクと頷いてからトテトテと三葉へと近づいて行く。それを苦笑混じりに見送る世界。

談話室の入り口に立って様子を見守っている世界とその横に控える八チコの下へやってきたのは黒いＴシャツ姿で首にタオルをまいた鬼心^{きしん}。

「世界、来てたのか。……………あれは、何をしているんだ？」

休憩のついでに飲み物を貰いに来た彼は、幼女に頭を撫でられデレデレしている三葉を見て眉を寄せ問いかける。

「ん？ お疲れさん鬼心。あれはだな、慰めてるんだよ。いやあなんか和むよな。ほんと神啼は優しく育ってくれてるよなー」

「……………小学生に慰められる中学生、か」

ふうと息を吐いて眉間を揉む鬼心。

チラリと横を見れば、まるで我が子たちを慈しむかのような優しい笑みを浮かべる世界が。

無力な彼には、少女の思い描く儂く脆い将来設計に、ただ黙禱を捧げることしかしてやれることはなかったのだった。

暫くそのような光景を繰り広げていたのだが、後から談話室に入っ

てきた玉藻が呆れた表情で三葉をスタジオの中へと引きずっていき、鬼心はそれを見届けたあと何をしに来たのかを思い出してカウンタ―に近づく。

「お飲み物ですか？ それではこちらをどうぞ断花様」

近づいて来る鬼心に手際よく適温のスポーツドリンクを入れたグラスを手渡すヤチル。それを受け取り、一気に飲み干した彼はグラスをヤチルに渡し、小さくお礼の言葉をかけてから世界の下へとやってくる。

「……しばらくは、白九尾シクビも忙しいだろうから落ち着いたら呼ぶ」「わかった。程々にな？」

「龍波がいらんことを言わなければ大丈夫だろう」

どうせいらんことを言うのだろうが、と言う表情で眉を寄せて、一層目つきを悪くする鬼心に世界は苦笑して、頑張れよと送り出すのだった。

「世界様、神啼様、お飲み物はいかがいたしますか？」

鬼心の後ろ姿が消えるまで見送っていた世界と、その彼の腕に張り付いた神啼の隣、ボーっと突っ立っていたハチコの横に並んで二人へと問いかけるヤチル。

「それじゃあ何か温かいものをひとつ。神啼はどうする？」

「私も、お兄ちゃんといっしょがいい」

「そうか。それじゃあお願いしますヤチルさん」

とって神啼の頭を撫でながら微苦笑を浮かべる世界。そんな仲の良い兄妹を見てヤチルは微笑みを浮かべる。

「ふふ、それではすぐに用意いたしますね」

そう言うってから彼女は横に立つ同僚を、怒ってますよという表情を浮かべて見上げる。

「こらっ！ ハチコちゃんったらいつまでボーっとしてるのよっ。

それに皆様のことを呼び捨てにするなんてメイド失格なんだから。

そんなだと職務怠慢で山姉様に報告するんだからね!？」

「……………ヤチル、我が儘？」

「違いますーっ！ ハチコちゃんが悪いんですーっ！！」

ムキーン！と怒るヤチルを上から片手で押さえつけて首を傾げるハチコ。そんな仲の良いメイド二人を見て世界は苦笑を浮かべるのだ。

「も、申し訳ありませんでした。お恥ずかしいところをお見せして」

カウンターに座る世界と神啼にホットココアを差し出したヤチルは、恥ずかしそうに頬を染めて俯く。

効果音をつけるならショボンが付くだろっとな、と益も無いことを頭の片隅で思っていた世界は苦笑を浮かべる。

「そんなに気にしなくていいですよ。完璧過ぎるよりもヤチルさんみたいなの方が親しみやすく、俺は好きですよ?」

「す、好っ!? えっと、あ、有難う、ございますう」
「……………ヤチル、顔真っ赤」
「いけないことは言わなくていいですってばーっ!!」
「……………ヤチル、褒められたことないから嬉しい?」
「どこ見ていつてるんですか! そんなに優しい目で見ないでくださいっ!? むきーっ! そのお胸ですか! その無駄に育ったお胸が悪いんですねーっ!」

「お兄ちゃん、私は?」
「ん? 勿論神啼も大好きだよ」
「私も、お兄ちゃんのこと好き」
「ははっ、ありがとうな」
「お姉ちゃんたちのことも、好き?」
「へ? ああ、それは、勿論好きだよ」
「良かった。みんな仲良しで」
「ああ、そうだな、神啼」

くんずほぐれず暴れるメイドたちと甘々な空間を形成する兄妹という非常に混沌とした場に、世界を呼びに来た鬼心が遭遇し目つきを鋭くさせることになるのは余談である。

それからは四人で二時間ほど練習した後、解散という運びになった。世界は神啼と一緒に帰宅してから家でお腹をすかせて待っていた姉妹と共に夕食に取り掛かるのだった。

世界に響く少年たちの詩 後編

はぁー、と空に向けて息を吐き出す。口から吐き出された息は白く染められ瞬く間に空へと散っていく。始まりは色のないそれが、やがて色を付け、しかし刹那の内に散っていく様は、まるで人生の縮図のようだと物思いに耽る。そして、ふとした瞬間にそんなことを考えている自分に気づき苦笑いを浮かべるのだった。

町の中心を分断するように流れる『神裂川』を見下ろすように架けられた橋の上。その途中で何とはなしに足を止めていた神山世界は、思考を振り切るようにもう一度空へと息を吐き出し、首に巻いたマフラーを口元まで持ち上げてから歩き出すのだった。

ジーパンのポケットに手を突っ込み僅かな暖を取りながら歩く世界が、暫くしてようやくたどり着いたのは、ここ最近で随分と慣れ親しむことになったホワイトハウス（仮）であった。

彼は慣れた足取りでゆっくり扉を目指し、そして、やはり彼が手をかける前に内側から開かれたことで足を止める。

扉を押し開いて出てきたのは一人の美女だった。

清閑な空気をふり撒き世界の視界へと現れる、上から下までバリエーションに富んだその肢体には戦闘服を、その戦闘服でも隠しきることのできない熟れた桃を二つ引っさげ、彼女の顔の半分を覆う黒い眼帯はしかし、彼女の伶俐な美しさを損なわせる要因にはなり得ることはなかった。

神秘的なオーラを纏った彼女こそ我らがメイド・オブ・メイド、つまり八チコである。

露わになっっている切れ長な左目を見つめながら世界は口を開く。

「こんにちはハチコさん」

「……………うん、こんにちはセカイ」

「ハチコさん今日も眠たそうですねー」

「……………昨日も、ヤチルが五月蠅かったから、あまり寝れなかった」

まったく、ヤチルは、まったくと言って目をしょぼつかせるハチコに世界は苦笑する。

思い浮かべるのはこのひと月で見慣れた光景。立っ
たまま眠ろうとするハチコと、それに気付いて吠えるヤチル。

毎日やって飽きないのだろうかと思ひ、そういえば姉ちゃんたちに
いつもいつもいつも振り回されてる俺が言えたことじゃないかと、
こぼれそうになった涙を堪えたのは記憶に新しい思い出である。

「まあ、ヤチルさんもハチコさんのことが心配でたまらな
いんですよ、きつと」

「……………分かってる。ヤチルはお子ちゃまだから、仕方ない」

ボクは大人だからと表情筋は使わずにフッフと笑うハチコに苦笑す
る世界。

立ち話もなんですし、そろそろ中に入りましょうか。とそんなハチ
コの、少し体温の低いひんやりした手を引いてようやく中へと入る
世界なのだった。

「なんだ、俺が一番最後だったのか」

談話室に入った世界は開口一番そう呟いた。

「神山様お疲れ様で、ああーっ！な、なんでハッチと手繋いでんだよ神山ー！？」

カウンターに座って談笑していた三葉は遅れてやってきた世界に振り返り、世界がメイドと仲良く手を繋いでいてしかもラブイ空気を醸し出しているような気がしたりなんかしてそれに何だかっこ可愛いハッチの手を優しく引いてる神山はやっぱり頼りがいがあるてかっこいなあ私も手握ってほしいむしろ握らせてくださいっいでに頭撫でてくださいっあんです。ここまでコンマ五秒程で考えた三葉は、メイドらしく楚々と挨拶しようとしたヤチルの言葉を遮って悲鳴を上げる。

涙目で叫ぶ三葉の隣、耳元で大声を出された玉藻が無表情に三葉へとアイアンクローをかけて黙らせたところで世界はハチコの手を離してカウンターの方へと近づく。

「……遅かったな。また先生に捕まっていたのか？」

マフラーと制服の上着を脱いでヤチルに手渡す世界に話しかけたのは鬼心。

「ありがと、ヤチルさん。いや、今日は桃子さんじゃなくてだな、スーパ―の特売日だったんだよ。 こればかりは姉ちゃんたちに任せられないから、さ」

思い出すのはかつての愚かな自分自身。ただ、少しばかり忙しいからと姉たちに任せてしまったせいで。

そのせいで、 多くの罪無き血が流れてしまった。そして、

残ったのは後悔と決意。未だこの町に打ち立てられたままのレジエ
ンドは、彼にとつて戒めの楔としてスーパー春田に行くたびに心を
震わせるのだった。

とまれ、無駄に遠い目をして回想し出した世界に友人二人がどん引
きしていたかどつかは定かではない。

「と、言うわけで、まあなんとか無事終わったということ
とで、お疲れ様」

カウンターに座った四人とキッチンに立った二人はそれぞれが持つ
たグラスを軽く打ち合わせる。もちろんハチコとヤチルの手にもグ
ラスが握られており、最初はヤチルが渋っていたのだが、二人にも
世話になったから今日ぐらいは一緒に楽しんでほしいという世界の
説得により陥落したのだった。

「でも、ほんとやればできるもんなんだなあ」

「……そうだな。まあ二度とごめんだがな、あんな派手な舞台でや
るなど」

「そうね。あんたの身内張り切りすぎよね」

確かに、という二人分の視線を向けられ彼は乾いた笑みを浮かべる。
某宇宙歌姫もびっくりな特設ステージに宣伝用の横断幕と垂れ幕、
そして校内のいたるところに張られた無駄にかっこよく作られたポ
スター。演奏する曲も謳歌が知り合いに特別に作ってもらったから

と言つて準備していたのだ。いざ始めれば身内が最前列に並び、その後ろには数百人の観客が。たかが即席バンドの演奏のためにここまでやるとは、とさすがの世界も頭痛を覚えたのだった。

ただ、謳歌の知り合いが作ったというだけあって曲自体の完成度が非常に高かったためか、美少女二人が演奏していたのも良かったのだろうか、とにかく演奏終了後にはスタンディングオベーションでアンコールをもらうくらいには盛り上がったのだった。ちなみに鬼心は怖がられたらいけないので猿のきぐるみを着せられていた。

「えー？ 楽しかったからまたやりたいけどなあ私は。あ、でも次は客席で神山の歌聴きたいなあ」

「そうですね。皆さんの演奏も一カ月しかやっていないとは思えないくらい上達してましたし」

「まあ白九尾の指導の賜物だろうな……」

「ううー、思いだしたら胃が痛くなってきたよ。やっぱり時間って大切だよなあ。一か月で詰め込むもんじゃないな」

「ふん。もとはと言えばあんたの莫迦な思いつきが原因でしょう？ 阿呆なことばかり言つてたらちぎるわよ」

「ひ、ど、どこちぎるつもりだよ……っ!？」

「……んぐ……もぐもぐ……もぐ……ってこらー!! 八チコちゃんてばどうして一人だけ黙々と食べてるのっ!」

「……んぐ、ぷふうー。……ヤチル、ご飯のときは静かにしなさい」

めっ、と言つて怒るヤチルの額を人差し指でつつく八チコ。

そうして、いつも通り走り回る二人の姿を着に四人はしばしの間憩いの時を過ごすのだった。

大学近辺で青い髪の浮浪死体が見つかったとか見つからなかったとかいう話を学校で聞いた世界が、冷や汗を流して急ぎ携帯電話に入っている知人のアドレス帳を開いたとか開かなかったなどというのはまた別の話である。

ガンパレード/デスマーチ

鳴り響く銃声に警報。間断なく響く発砲音に怒号。窓の外から聞こえてくるその音で、何が起きているのかは想像するまでもなく、彼女は形の良い眉を窄めた。

「ふう、まったく。無粋だね。レディーのティータイムを邪魔するなんて」

彼女は手に持ったティーカップを置き、腰かけた椅子の上で足を組む。耳にかかった赤茶色の髪を払いのけ、傍らで静かに控える自らの従者に問いかける。

「それで？」

「はい。数はおよそ四十、武装はレベル三といったところでしょう。なるほどなるほど。それでパゾリーニ氏は？」

「すでに脱出された様ですね。襲撃があつてすぐ、運よく敵に接触することなく避難されたようです。そのときに大半の警備もひきつれていったみたいですね」

「おやおや、これはまいったね。すでに屋敷は包囲され、この警備は穴だらけ。そして、こちらは私を含めて二人だけ。おやおや、おやおや絶対絶命じゃないか。だがしかし、こんなところで死ぬつもりはさらさらないから抵抗させてもらおうかな。ちょうどタイミングよく試作品を持ってきていたしね」

長々とした台詞はまるで定例句を読み上げるかのように、計画通りだとも言わんばかりの笑みを浮かべた彼女は、椅子の横に置かれたアタッシュケースを手取る。

「はあ……、やはりそのためですか。無理やり護衛を一人だけにしたのは」

机の上で鼻歌を鳴らしながらアタッシユケースのロックを解除する、自らが護るべき主のそんな嬉々とした姿を見て彼女は溜め息をつく。

「まあこれもメイドの仕事のうちだよ、っと。ふふ、素晴らしいなこれは」

傍らの存在には目もくれず、彼女が取り出したのは二丁の拳銃。全長がおよそ四百mm程度。黒く塗り潰されたフォルム。その一つを手にとれば、その馬鹿げた重量に笑いが零れる。長方形の鉄塊でも取り付けたと言わんばかりの無骨な銃身を撫で、そして撃鉄を上げ、おもむろに銃口を扉の方へ向ける。

中へと入ろうとしていた武装した男はドアノブに手を掛け、そして気付く間もなく絶命した。

引き金を引いたと同時に、轟音が鳴り響く。

「いやあ、凄いな。馬鹿げた重量に馬鹿げた反動、しかしそれに見合うだけの破壊力。まさに趣味人の逸品だな。相変わらず技術局長は興味深いものを作る」

彼女の視線の先には木端微塵に吹き飛んだ扉と体の真ん中に巨大な風穴を開けた男が反対の壁に突き刺さっているというなんともスプラッタな光景が広がっていた。

「弾という概念を排除し、圧縮した窒素を弾丸にして打ち出す空気

砲か。青狸もびつくりじゃないか。ふふ、しかしこれなら

「お嬢様。考えるのはそのあたりにして下さい。今の銃声で増援が来ます」

状況も考えずに構造について考察を始めようとする主をたしなめた彼女は、スカートの下、太ももに取り付けたケースから二つの得物、ナツクルガードを取り出し両手に装着する。

「ん？ ああそうだね。それじゃあ私は東側をやるから西側は任せよ」

ガツンガツンと両手を打ち鳴らして調子をかめている傍らの小さなメイドを見て告げる。

「はあ、お嬢様が出るのは確定なのですか……。分かりました。東側を殲滅し次第、そちらに向かわせていただきます」

「いやいや、こちらは心配しなくても」

その言葉が最後まで言い終わる前に、窓から飛び降り姿を消した自らの従者にやれやれと頭を掻く。

だらりと垂らした両手に銃を握りしめたまま廊下へと踏み出そうとして、しかし足を止め両手を持ちあげおもむろに引き金を引く。廊下に面した壁に向けくると回転しながら引き金を引く。引き金を引くたびにかかる反動を利用した回転は独楽のように、無数に風穴をあけられ壁としての役割を失ったそれは音を立てて崩れる。

と同時に回転する勢いそのまま駆けだした彼女は粉塵立ち込める廊下に向け跳躍し、廊下の壁に着地、そのまま左右に向け引き金を引く。

廊下の先にいた者たちをその一撃で片づけ、トンつと壁を軽く蹴つて地面に着地、そのまま回転するように再び引き金を引く。廊下の角から飛び出してきた敵は、しかし角から姿を現す前に壁ごと穴を開け、後ろから現れる敵は振り向きすらせずに一撃のもとに沈める。踊るようにして放たれるのはいかなる敵をも逃さない精密射撃。

彼女の舞いを阻めるものはこの場にはいなかった。

二階の窓から飛び降りたメイド服の彼女はスカートの裾がめくれないように押さえながら着地する、と同時に視界に入った敵の排除行動へと移る。先ほどの銃声に気付き屋内に向かおうと背を向けていた敵に近づき跳躍、振り下ろすように後頭部へ攻撃を加える。

それはまさに単純明快、近づいて殴る、ただそれだけ。

背を向けたまま攻撃されたその男は何が起こったのか理解することすらできず、赤い花を咲かせる。

それは彼女の敵に定められたものにとっては悪夢だった。なにせ、銃弾よりも早く動き、銃弾を拳で弾く。そして、その一撃は遠慮容赦なく人を原材料にタンパク質の塊を生産していくのだから。

粗方視界に入る範囲を片づけた彼女は携帯を取り出す。呼び出す

相手は彼女の上司に当たる人物、今回の一件の報告のためである。

「もしもし。ええ、そうです。予想通りに襲撃されていますね。パゾリーニ氏の確保はお願いしてもよろしいですか。ああー、お嬢様はいつも通り試作品の動作確認をするとか……、え？ いや、無理ですつてば！ 私にお嬢様止めれるわけ！！ えーっ！？ 滅俸のうえにアレを！？ まっ、切らないで」

ア、アレを、やらされるなんて……と、口に出すのはばかれる訓練という名の地獄を思い出して落ち込む。今すぐ力チューシヤを投げ捨てて逃げ出したい気分だよーと涙がちよぎれそうになるのを我慢した彼女は、振り向きざまに飛んできた銃弾を右手で弾き、そのままこちらへ銃口を向ける男に接近、着弾する軌道の弾丸は拳でたたき落としながら、刹那の攻防の末、彼女の拳が男の胸部に吸い込まれる。

ゴギユンと、決して人体が発してはいけない鈍い音を響かせながら地面へと叩きつける。さながら人身事故のごとく地面を跳ねながら転がっていくそれを視界から外す。

彼女は先ほどの会話の内容はひとまず頭から追い出し、殲滅を最優先事項として行動を再開するのだった。

ズンツと腹の底にまで響くような音を響かせまた一人仕留めた彼女は足を止め、銃を肩に担ぎあたりを見回す。彼女がいるのは玄関ホール、そこには既に蹂躪し終えたとばかりに身体のいずこかに風

穴を開けた男たちが転がっていた。

「さて、こんなところかな。しかし、威力も申し分ないし弾切れが起きないのもいいのだがこの重量と大きさ、反動はどうにかならぬものか……。この大きさではガンもカタも使いにく」

独り言の途中で彼女はそこから一步飛び退き、振り向きざまに後方頭上に向けて窒素弾を撃ち込んだ。

「くく、なるほど。すばらしい反応だ。それにその見たこともない武器。それが合わさればたかが傭兵崩れの殺し屋では相手にすらならんか」

振り向いた彼女の視界に入ったのはスーツ姿の男。頭部は大きく後退しており、その顔には醜悪な笑みが浮かんでいた。

确实にお陀仏コースだった攻撃はしかし男を傷つけることは叶わず。自分が先ほどまで立っていた場所が大きく陥没しているのを視界の隅にとらえながらも、彼女は面倒くさそうに溜め息をつく。

「くくく!!! だが運が悪かったな小娘! この私、北欧の魔人アンドンル・テュローを前にして生きて帰ったものは生憎と『ズドンツ』ひと『ズドンツ』ないのだよ。……ふん、無駄だよ。そんなおもちやでは私に傷すらつけられん」

長々した口上は聞き流し試しに撃った弾は男の前方に広がった陣によつて逸らされあらぬ方向へと飛んでいく。

「なるほどなるほど。魔術師か。しかし、その程度で『魔人』を名乗るなんて少し自信過剰ではないか?」

「ふん、だったら今から教えてやろう。私が『魔神』と呼ばれる由

縁を。殺してしまうには惜しいがこれも『ズドンッ、ズドンッ』、
つち！ 無駄だと何度言えばごげっ」

こちらへと意識を張り付けるために発砲、そしてさりげなくその場から右側へと二歩移動して、後方から接近してきたメイドに頭を叩きつぶされた男が吹き飛ぶための道を譲る。自分のすぐ横を通り過ぎ、床に汚いペンキをぶちまけたのを確認した彼女は、階上から目の前に降ってきた従者へと視線を移す。

「お怪我はありませんかお嬢様？」

「ああ、心配しなくても傷ひとつついてないよ」

「そうですか。それでは、間もなく迎えが参りますので行きましょ
う」

「ああ、さて帰ったらやることが山積みだな」

そう言ってうっとりと両手の銃を見て舌舐めずりする重度のハッ
ピートリガーを患った主を見て、メイドが溜め息をついたかどうか
は知る由もない。

第一次神山家ヒエラルキー頂上血戦（前書き）

『日曜日の過ごし方』でちょこっと出ていたあの話です。

第一次神山家ヒエラルキー頂上血戦

草木も眠る丑三つ時。

物音のしない暗闇の中、気配を殺す影ひとつ。絹のような黒髪はくくらず背に流し、真つ黒なジャージで暗闇に溶け込みながら彼女、神山斬理が向かうはただひとつ。そのために眠たい目を擦りながらも皆が眠りにつくのを見計らい、最大の難関である長女の部屋の前を自らが持つスペックをフル活用、石橋を叩きに叩いて通り過ぎてここまでやってきたのだった。

そう、彼女の目的地、神山家長男にして自らの最愛の弟の部屋の前へ。

理想の男性像は？と聞かれて、刹那の時間さえ迷うことなく、一切の疑問すら抱くことなく弟と即答された焔火が珍しく彼女の頭を本気で心配してしまうのだが今は余談である。

そうして斬理は、扉を蹴破ってでも突入しようとする己の中の猛獣を押しさえつけ、ゆっくりとドアノブへと手を伸ばし

あらあら コンナジカンニ ナニヲ シテイルノ
カシラ キリちゃん？

「おうふ」と思わず奇妙な声が漏れる。脳髓に直接響くような声と、自らの肩に置かれた手を横目で見て冷や汗が浮かぶ。

しかし、しかし！と彼女はここで引くわけには行かないのだと扉

の先に広がる近くも遠き理想郷を幻視、己の目的を心に刻みなおし
気持ち奮い立たせる。

肩に置かれた手から素早く身を離し、シュバッとそこから飛び退
きざまに振り返り着地する。

そして、泰然と、しかし幽鬼のように佇む姉を視認。そのプレッシ
ヤーで震えそうになる心を突貫工事で補修し、膝に力を込めて対峙
する。まずはジャブからだと言口を開く。

「姉さんどうしたんだこんな時間に起きていては美容に悪いだろう
？ 早く自分の部屋で寝たほうがいいと思うが？」

その言葉で、黄金の悪魔は口角をつり上がる。艶やかな、相対し
たもの全てを魅了してやまない妖艶な笑みが顔に張り付くのを直視
して、斬理はやっべー姉さん本気で切れてない？と言った感じに生
唾を飲み込む。見事にクロスカウンターで返された気分であった。

「うふ、キリちゃんったら、先に聞いたのはお姉ちゃん
でしょ？ セつちゃんのご飯に薬混ぜただけでも万死に値するって
いうのに、その上お姉ちゃんのこと騙そうだなんて、少しお仕置き
したほうがいいのかしら？」

くうっ、やはりばれていたか！と内心で舌打ちをする。冥王や魔
王ですらたやすく眠りへと誘うことができるなどと言っていたのに
一日も持たないとは、とまがい物をつかませた青い髪の女性を脳内
で百回ほど殺してから、斬理は覚悟を決める。

「ふむ、さすがは姉さん、全て気付いていたか。しかし、私も今更
引くことなどできん。世界と神啼に挟まれて寝るという至福、姉さ
んと言えど譲るわけにはいかんっ！！」

「うふふ　今朝ベッドが届いてからそわそわしてばかりだった
せに本気で隠せてると思っただけならお姉ちゃん残念だわあ、主に
キリちゃんの頭が。それに、そんな美味しそうな時間、譲るわけな
いでしょ？」

「ならば、今日こそ謳歌姉さん、あなたを越えて見せる！！　姉さ
んの屍を越えて理想郷へと至って見せるぞ！！」

「うふふ　キリちゃん、そういうのを死亡フラグって言うのよ？
千回死んで出直してきなさい」

その言葉が合図。斬理はどこからともなく木刀、のようなものを
取り出す。とある破壊魔もびっくりなとんでも技術で作られた木刀
である。

それに対する謳歌はもちろん徒手空拳。泰然と微笑を浮かべ斬理
が構えるのを眺める。まさに王の風格を纏ったようなその姿に、し
かし斬理は引くことはなく。

故に、ここに、第一次神山家ヒエラルキー頂上血戦の
幕が開く。

一撃。一撃に全てをかけなければならぬ。自身と姉の彼我の実
力差は明白。しかしここで姉が本気を出すこともまたありえないこ
と。ならば、初撃、姉がこちらを嘗めてくれている初撃に全てをか
ければ、勝てる、はず、たぶん、そうだといいな。

千分の一秒にも満たない間に思考を展開、最後が尻すぼみなのは
ご愛敬。そして、切っ先を姉に向け、駆ける。狙うは顎。いくらキ
チガイな戦闘能力を誇る姉といえど人体の構造までは手は加わって
いないはず！と先ほどの人外用の睡眠薬が効かなかった事実など忘
却の彼方へと放り投げ、全力の一撃を斬り裂き放つ。

それは斬理にとつては最高の一振りだった。今まで振るってきた中で、これほど完璧だと思える剣を振るったことはなく、故に自身にとつて至高の一振り当たれば。

そう、まともに、当たったならば

パシッつと、まるで風船から空気が抜けたようなそんな乾いた音と共に、自分の一撃が姉の右手、正確には親指と人差し指に阻まれるのを茫然と見遣る。そして、反対の手、『ギチリギチリ』とまるで空間そのものを握りつぶすかのようなそんな耳障りな音と共に握りしめられる拳。それがいつの間にか視界いっぱいになり

「
うふ
キリちゃん相手に油断も手加減も、するわけ
ないでしょ？」

意識が途切れる寸前、彼女はそんな言葉を聞いた気がした。

翌朝、神山世界は悪夢と共に目覚め、いつのまにか隣で眠る姉を
発見。何とかしなければと決意。

さらに廊下でボロ雑巾のように血だまりで倒れ伏す次女を見て、
自分の中の何かが崩れる音を聞いた。

食事のマナーはきっちり守りましょう。

学校からの帰り道。本日は買い物物の必要もなかったため、真っ直ぐ帰路に着いていた世界は、前方、神山家の玄関先でうずくまる黒い固まりを見てなんだアレは？と怪訝な顔をする。

「ううう……苦しい」という、その存在が自らの状態を自己主張する呟きの聞こえた世界は、立ち止り周りを見渡して、自分以外に誰もいないことを確認し溜め息を零す。

長年の生活で培われたKITAROUの妖怪アンテナに匹敵するほどの第六感がピンピンと厄介事の臭いを嗅ぎ取ってはいたのだが、現在進行形で聞こえてくる声に早々に諦めをつけた世界は澁々と、凄く後ろ髪を引かれる気分で、その発生源へと近づく。

「えっと、……大丈夫、ですか？」

とその黒い固まり、真っ黒なコートで覆われた背に問いかける。その声に、うずくまっていたそれが緩慢な動きで振り向いた。

振り向いたその姿も、なんとというかやはり黒く、足先まであるコートはフードをかぶり、前はきっちり上から下まで留められ、唯一窺える肌色はフードから覗く部分だけだった。

世界は自然、そこへ視線をやり、全身を彩る黒色とは対照に白い、そう、病的なまでに白く、蠱惑的な雰囲気を含んだ容貌、特に印象的なのはその瞳。全くの混じり気のない黒。まるで闇の底を映したような両の瞳に視線を奪われた。

しばし見つめあつて時を止めていた二人は、しかし、世界が正気に戻ったことで時計の針を進める。

「あの、どこか具合でも 「と口を開き問いかける世界の言葉にかぶせるように女性が口を開く。

曰く、「お腹 空いた」と。

世界は溜め息を吐きだし、しかし、お腹をすかした存在に人種年齢性別善悪は関係なし、とその女性を家へと招くのであった。

女性をソファーに座らした世界はうつむくその姿を一瞥、

「何か簡単なもの作ってきますから少しだけ待っていてください」と言ってから台所へと消える。

フードの下から台所へと消える少年をじつと見送り、その姿が見えなくなったところで視線を切つて家の中へと巡らせる。家に染みついた温かさ、とでもいうのだろうか。そのような見えるはずもないものがしかし、確かに彼女の視界の中に収まる。それに少しだけほんの少しだけ感嘆のこもった息を漏らした。続いて頭上へと黒い双眸を向ける。何も見えないはずの天井を見つめしばらく、なにかに納得したように小さく喜悦のこもった笑みを浮かべ、「クウ」と鳴った自らの腹の虫に浮かべた笑みが消え、お腹空いた、と台所へと視線をやればお茶請けとお茶を乗せたお盆を持って世界が姿を

現すのを見て。

世界はお茶請けとお茶を女性の前のテーブルに置いて、

「取り敢えずすぐに用意するんでこれで少しの間我慢してください」
と振り向きざまに声をかけて、

あはっ

いや、かけようとして、女性が浮かべたその笑みに、頬まで裂けるような強烈な笑みに声が萎む。彼は思った。

あ、これは、やばい、と。

「あはっ　　そうネ、もう我慢できないからいただくとするわ

」
蛇に睨まれた蛙のように、彼はその漆黒の双眸から視線を外せないままに一步後ずさり、しかしテーブルに足を取られ、

「　　アナタヲ」

そして、視界を影が覆い、唇に熱が入り込んだ。

一瞬意識が飛び、思考の空白を通り越して現実へと帰ってきた世界は、自分の両手を押さえこみ現在進行形で口内を這いずり回る熱の発生源である目の前の黒い双眸に向け、ムゝゝゝゝと声にならな

い声を上げる。

それが聞こえたのか聞こえなかったのか。女性は銀の糸を引きながら世界から顔を離して彼の腹の上で膝立ちになる。

「っ！ な、な、な、何を？」

世界は驚愕し、解放された両手で顔の下半分を守るように隠して、壊れたラジオのように声を出す。

それを見て恍惚とした笑みを浮かべた女性は淫猥な仕草で己の唇に舌を這わす。

「……美味しいさすが神山ねエ、魂の密度が違うわア あは取り敢えず、何って、ナニをするわけだけど」

「ひい！ なんかい方が卑猥!？」

「そういえば自己紹介がまだだったわね、ん、取り敢えず、アスモって呼んでちょうだい」

「自己紹介がついで過ぎる!! そしてなんで脱g!？」

言葉の途中で再び思考が飛ぶ。

全裸だったから。

チャックを下ろしたコートの下が。

病的なまでに真っ白な肌、瞳と同じ漆黒の色をした髪が鎖骨と女性の象徴を覆い隠し下へと垂らすその姿。

まるで、彼岸花のような、そんな美しさ。

世界は顔を染める。

「ひいひい!?!? 本物の痴zyoっ!?!?!?」

主に驚愕と混乱と恐怖が一：二：七で。本物の変態を前に、性別は関係ないと悟ったのはこの時だったとは長男談。

乙女のように錯乱する世界を見てアスモと名乗った女性は自分の体を掻き抱き恍惚と体を震わせる。

「ハア、ハア、イイ 反応 そんな顔されたら食べがいがあるわア」

「やめて！？ 手を合わせないで！？ 美味しくないから！ 美味しくないから！？」

目前で手を合わせて食の神様？にお祈りを捧げる光景に少年は逃げ出そうと体を踏ん張る。が、いかなる力が働いたのか、ピクリともしない。まるで腹をコンクリートで固められたかのように。

祈りが済すましてから、合わせた手を離し、世界の腹をいやらしく撫でる。服の下を這うように入り込む冷たい手の感触に背中が泡立つ。

そして、世界の視界一杯に舌舐めずりする痴女が映る。

「あはっ いただきまアす」

ギシィッと音を立て

「あらあら　この腐ったあばずれったら、そんなに早く死にたいのかしら？」

頭部を鷲掴みにされた。

「人が留守にしている間に入り込むなんて、賤のなつてない犬ねえ」
「あらア？　なアんだもう時間切れか」

ギチギチと音を立てる自分の頭に、しかし平然とした様子で笑みを浮かべたあと、スルリとその戒めから逃れてその声の主、謳歌と相対する。

「思ったより早いお帰りねエ？　おかげで食べ損ねちゃった」
「うふ、ふふつ　喋らず動かさずただ死になさい」
「あは　怖い怖い。少し惜しいけど、まだ死にたくないから退散するよ」

セーラー服姿で艶やかな笑みを浮かべた謳歌が全裸の女性の頭部へ右手を繰り出し、握り締める。バグりと耳障りな音と共に握りしめられた手のひらには、しかし、歪んだ空間以外何もなかった。

先ほどまでそこにいた人影は消失していた。

あはア

という耳障りな笑い声だけが握りしめた手の平から響き、謳歌はさらに唇を釣り上げる。

「あらあら、うふふ、うふふふ　少し、お話する必要があるかしらねえ、あの雌犬とは。さて、せつちゃん、大丈夫だった？　もう大丈夫よ？　お姉ちゃんが来たからね？」

机の上でせめて最後の抵抗とばかりに魚類へと成っていた少年は、その懐かしく感じる声に意識を取り戻す。そして目の前で微笑む姉を見て、貞操が守られたことに安堵の涙を流すのであった。

神山世界十歳夏の出来事であった。

空というものは一日として同じ顔を見せることはない

「いらっしゃいませ、って、あ、神山君。それに妹さんも！」

カランカランとベルを鳴らして店に入った兄妹を迎えたのは喫茶『猫の瞳』の店員、種子島。名前はまだない。

「はあ、こんにちはは種子島さん。今日は厨房のほうじゃなくて客として来たんですからね。仕事してくださいよ」

世界のことはそっちのけで神啼のほうへキラキラした視線を飛ばす顔見知りの店員に向け、相変わらず可愛いものに目が無いんだなこの人はと、少しだけ呆れを含んだ声で話かける世界。

「じゃあ妹さんだけこっちで面倒見てようか？」

「ようか？ じゃないですから。仕事してください仕事」

ええーと唇を尖らして可愛く不満を漏らす御年二十六歳独身。神啼が世界の後ろに隠れるように張り付くのに苦笑を浮かべる世界。

「大丈夫だから神啼、気持ち悪、怖いかもしれないけど害はないから。それですね、青い髪の女の女なんですけど、もう来ましたか？」

「もう、神山君のいけずう。まあいいや、その人ならさっき奥に通したよ。なにになに？ 神山君の彼女？ この間連れてきてたかわい子ちゃんとはどうなったのっ？」

修羅場？ 修羅場？ とひどく楽しそうな笑みを浮かべて尋ねてくる昼ドラシンドローームを拗らせた種子島に溜め息を吐く。

「いやいや、そういうのじゃありませんから。それと前の二人ともそういう事実はないので勘弁してください」

ほんとにー？と未だ首を傾げる種子島の言葉を無視した世界は、神啼を引き連れ待ち人のもとへと向かうのだった。

「どうもすいません麒麟さん。待たせてしまいましたね」

「こんにちは、麒麟おねえちゃん」

「いえいえ、アタシもさつき来たところなんで気にしないでください。急に誘ったのはアタシっすからね」

それとこんにちは弟君に妹ちゃん、と笑顔を浮かべているのは青い髪からきらきらと粒子を撒き散らす我らが美少女、麒麟さんである。

麒麟の向かい側へ腰かける兄妹。いつも通り仲のよさそうな二人の様子をニコニコしながら見守る麒麟。基本的に某先輩が絡んできたり下心が暴走したりしなければいいお姉さんをしていたりするのだ。

「弟君は相変わらず妹ちゃんと仲良しっすね」

微笑ましいといわんばかりに瞳を細める麒麟の顔を見て、世界も笑顔を返す。

「それはもう、大事な妹ですからね。神啼に嫌だって言われるまでは目を離さないで守っていくつもりですよ」

そんな恥ずかしい台詞を素面で言っただけの世界。それに反応した

神啼はぶんぶんと首を振って世界の顔を覗き込む。

「絶対に嫌いにならない。だからずっと一緒」

とそんなことを真剣な顔で告げてくる妹の姿を見て世界は誓う。神啼が彼氏を連れてきたら絶対に一発殴ってやろうと。

ふふっ、と声を漏らした麒麟はそんな二人を楽しそうに眺めながらティーカップを傾けるのだった。

それを遠巻きに見ていた店員とマスターが吐血していたり、その日来店した客のおかげでブラックコーヒーの売上が莫迦みたいに上がったらしい。

「あー、注文、聞いていいですか？」

マスターに尻を蹴飛ばされ、いやいやながらもオーダーを尋ねる種子島店員。それはもう花が咲き乱れる様が幻視出来るような甘々な空間に突入するには一人身六年目の防御力（リアル充実度）では低すぎるのであるからにして。

「ああ、それじゃいつものマスター特製と、神啼はどうする？」

「ん、お兄ちゃんと一緒がいい」

「それじゃあそれ二つと、あとアップルパイお願いします」

承りましたーとそそくさと立ち去る店員をどうしたんだろ？と訝し

げに見送る世界であった。

「そういえば髪、随分伸びましたね？」

紅茶を飲みながらポツポツと喋っていた世界は、麒麟の鎖骨あたりまでかかるくらいに伸びた青い髪を見て思ったままに口を開く。

「ああ、そういえばしばらく切ってなかったすね。んー、短いほうが何かと楽なんですけど、弟君はどっちのほうがいいと思います？」

基本的に自身の外見に頓着しない質の麒麟だったが、毛さを弄りながら何となくこの場にいる唯一の男性へと意見を聞いてみることにした。

「んーと、そうですねー。俺はそういうのあんまり分からないんですけど麒麟さんだったらどっちでもいいと思いますよ？ 麒麟さんの髪綺麗ですからね。なあ髪啼？」

「うん。青空みたい、綺麗」

おっとこれは拙いと、麒麟は鼻を押さえて視線を窓の外に移す。外見に頓着しないとはいえ褒められればうれしい麒麟。ましてや普段彼女の周りには謳歌を代表とした色々限界突破した美女がいるのだから外見で褒められることなど皆無である。おまけに世界の心からの贅辞プラスとっておきのスマイル、それに神啼の笑顔まで添えられてしまったのだから麒麟の心はゴール寸前である。

外の景色を見ながら深呼吸、頬の熱が引いたあたりで視線を戻す。

「ありがとうございます。それじゃあ当分はこのままにしとくっす

「よ」

「麒麟おねえちゃんも私とお揃い？」

「ふふ、そうですね。それもいいかもしれないっすね」

にこにここと笑顔を交わす二人。眩しそうにそれを眺める世界も、かすかに口元を緩めて

そんなとある日の午後のことであった。

空といつものは一日として同じ顔を見せることはない(後書き)

なんだこれは？

こんな綺麗な麒麟需要あるのか？

雪山に赴く際は雪崩に注意してください

黄金色をたなびかせ、白銀の大地を滑走する。

傲慢に、ただただ傲慢に。

己がこの世界の支配者であると主張するかのように。

ただ、世界を切り裂いて進む。

やがて目の前に現れる大地の終わりにすら、一欠けらの迷いなく。

神山世界は諦観の浮かんだ瞳でそれを見送ったあと自然と刻まれた眉間のシワを指でほぐす。

コースから逸れて迷いなく崖の下へと消えた姉の後ろ姿に、滑るといふよりむしろあれは落ちると言ったほうが正しいのだろうかと埒もないことを考える。それに続いて飛び出していった次女のことなど見ていない、見ていないっただら見ていない。

だから周りで女性が落ちたと騒ぎ立てる声も聞こえないし、周りの証言（父親に見えたのは気のせいだと信じたい）により身内だとばれた、ばらされた？ 世界のもとに警備の人が駆けつけてくるのも自分の目がいかれちまったせいなのだろう。

それからしばらく、ほくほく顔の姉妹といつの間にかバックレていた両親が迎えに来るまでの間、この少年の身に降りかかった心痛

がいかほどのものであったのかは、知るべくもなし。

「……いやな夢を見た」

そう呟いた世界は汗で額に張り付いた前髪を掻き上げる。確か神啼が来る前だから、四年前の冬だったかと回想する。

当時からそのいかれっぷりを発揮していた神山家の面々。まだ常識に縛られていたあのときの若々しい自分を思い出して諦観の笑みを浮かべてしまう世界だった。

世界はベッドから降りて、部屋に備え付けの洗面所に向かう。寝汗で体を冷やす前にとシャワーを浴びた彼は着替えを済まし、薄明かりの漏れるカーテンに手をかける。

曇ったガラス戸をあけて外に出れば視界一杯に広がる雪景色。欄干に手をつき眼下に目をやれば陽の光を反射して白銀に輝く大地と、大地に突き立った十字架にくくりつけられた青い髪の乙女。

……視界の端に奇妙なものが移ったがおそらく気のせいだろうと視覚情報の一部を即座に遮断。そして少し視線を上げれば雪化粧を纏った山々が聳え立っていた。

当然ながらここは神山家などではない。ではどこなのかというと、

なんでも謳歌のバイト先の知り合いが所有する山の一つで、その中腹に建てられたまるで要塞のようにも見える壮観な造りの別荘、そこに世界を含めた神山家一行は滞在しているのであった。もちろん日本ですらなく、どこなのかと問えば日本の外だというなんとも曖昧な返事が返ってきた。

今回も今回とて拉致されてきた世界は、茫然としたままいつの間にか着せられていたスノーウェアを見降ろしつつそのような話を謳歌に聞かされるのであった。

ここにお邪魔してからの二日間のことを走馬灯のように思い出していた世界はかぶりを振って気持ち切り替える。

そうして彼は晴れやかな気持ちのまま振り向くことはせずに部屋の中へと戻っていく。振り向かなかったのは、急に轟いた爆音により白銀の山肌が崩れ雪崩となったからでもなく、なすすべもなく雪崩に飲み込まれる青髪の乙女が見えたからでもないのである。

部屋に戻った世界は後ろ手にガラス戸を閉めカーテンを引く。そのまま真っ直ぐ部屋を横切り廊下へと出た。

飾り気がなく鉄の冷たさが満たされたような外観に、天井には埋め込み型の電球が等間隔に並び廊下全体にその光を届けている。

廊下の冷たい空気にぶるりと身を震わせる世界。この要塞、もとい別荘に漂う空気は好きになれそうにはないなと嘆息する。

そもそも山の中身をくりぬくようにして建てられてるそれを別荘と呼ぶには無理があるだと漏らしながら世界は歩き出す。

辿り着いたのはもちろん食堂である。スライド式のドアをくぐっ

た世界は漂ってくる匂いに少し出遅れたことを悟る。

「やおおはよう世界。少し顔色悪いみたいだけど大丈夫かい？」

厨房に顔を出した世界はフライパンを握ったまま笑顔を見せる男性、山本明人に苦笑いを返す。

「ああ、今朝は夢見が悪くて、たぶんそれが引き摺ってるんでしょ」「そうなのか、大丈夫なのかい？」

「ええまあ、寝ても覚めてもたいして違いありませんしね」

はははと乾いた笑いを浮かべる世界を見て困ったように笑顔を浮かべる明人。

「それで、何か手伝おうかと思っただけでああはいらないですよねすいません」

自分も手伝うと申し出ようとした世界は明人の後ろ、標準装備のスーツ姿ではなく黒いワイシャツにジーパン、そしてエプロンとお玉を装着した一夜須桃子と一瞬視線が絡み、その瞬間背筋にナイフが這ったような悪寒を感じて即座に断りを入れる。

「なかなか良い状況判断ですせつちゃん。もし私と明人の時間を邪魔しようというのなら引きちぎっているところでしたよ」

どこをだよ！？ と内心で戦々恐々とする世界。ふふふと無表情に嗤う桃子を見て冷や汗が浮かぶ。

「こら桃子、もともと僕らのほうが謳歌君の話に便乗して連れて来てもらったんだから、あまりそういう我儘は言わないの」

明人は人差し指で桃子のおでこを突いてたしなめる。

叱られた桃子は顔に縦線が幻視できそうな勢いで落ち込む。それを見た明人はやれやれ仕方ないな僕の可愛い彼女は、とでもいうように笑顔を浮かべて桃子の頬にを両手で挟みこむ。

「そういう我儘は二人つきりのときに聞かせてくれないかな？ 桃子の我儘を独占したいと思うくらいに僕も我儘なやつなんだから」

ふつとさわやかな笑みを浮かべて桃子の耳元で囁く。それを聞いた桃子は瞳を潤ませながら花が開いたような満面の笑顔を浮かべ、頬に添えられた明人の両手に自分の手の平を添え、

「……明人」

「桃子」

禁則事項なシーンに移りそうな二人からさっさと逃げ出した世界は既に廊下を歩いていた。

「あの分だと朝食は当分先、かな」

まさか本番までいかないだろうなとゲンナリとする世界。謳歌姉起こしてきて強制撤去したほうが早いかなと思案しながら部屋へと戻る。

とはいえ現在の時刻はまだ日が昇ったばかりの早朝である。朝食を作る時間に充てようと思っていたのだが予想外（まさか担任と友達とのラブシーンに出くわすなど予想出来るわけもなく）に空いた時間を無駄にするのももったいないと、タオルをひつつかんだ世界はすぐに部屋を出て温泉へと足を運ぶのだった。

近頃、趣味の欄に入浴という文字が書き足されるようになった世界少年は鼻歌を口ずさみながら意気揚々と温泉に向かっていったのだが、しかし、目前に広がる水たまりとその真ん中でうつ伏せで倒れ伏す青髪の乙女を視界に入れ鼻水が出そうになった。

競泳水着を着用し全身ずぶぬれでところどころに雪の塊をくつつけた後ろ姿を見た世界はその奇怪すぎる画面えいばに眉を寄せ見る。見て見ぬ振りをすべきなのか、それとも関わらなければならぬのだろうかと思案していた世界はうぐーという呻き声を聞いて諦めたように溜め息を漏らす。

ひどいっす先輩ほんとにやるなんて罰ゲームのスケールでかすぎっすさすがに死ぬかと思っただっすと嗚咽混じりに呟いていた青髪の乙女、改め麒麟はふと人の気配を感じ顔を上げる。そこには目の幅の涙を流す麒麟に向け仏のような笑顔を向ける世界が。

麒麟の呟きから大体の状況を把握した世界は新たな仲間をパーティーに加え温泉へと向かうのだった。

「……ちなみに麒麟さん、なんで水着なんですか？」

「うづう、雪崩の中を泳ぐなら水着を着ておいたほうがいって先輩が」

そんな言葉を交わしながら女湯と書かれた暖簾の向こうに背負っていた麒麟をポイする世界。

途中水着を着た麒麟が背中を流すといって突入してきたり、のぼせた麒麟が鼻血たらしめて倒れたりとひと悶着もありはしたけれど、それなりに湯を堪能した世界はのぼせた麒麟を再び背負って食堂に向かう。

さすがにもう大丈夫だよなと思いつつながら扉をくぐった世界は、すでに席について談笑しているカップルの姿を見てほっと息をつく。

「おはよ、せつちゃん」

「おはよう、お兄ちゃん」

そんな世界の後ろから聞こえてくる声。振り向いた世界の前には謳歌が神啼の手を握り艶やかな笑みを浮かべていた。

「おはよう姉ちゃん、神啼。斬理姉は？」

「うふ、斬理ちゃんならさっき起こしてきたからもう少ししたら来るんじゃないかしら？」

「なんで疑問形？」

「今朝は少し力加減間違えちゃって、そんなことよりどうしてせつちゃんが麒麟ちゃんのことおんぶしているのかしら？」

「いや、お風呂でのぼせた」

へえ？

と、それだけで事情が全て分かるわけないだろうと思う世界だった
がしかし、謳歌の浮かべる笑顔を見て自分の口がひきつるのが分か
った。

「そう、大変だったわねせつちゃん。それじゃあ後の
事はお姉ちゃんに任せてちょうだい？ なつちゃんもせつちゃんと
一緒にいてね」

そして、いつの間にか、世界も気付かないうちに麒麟を両手で抱
えていた謳歌は微笑みを浮かべたまま廊下の先へと消えていく。

「……さて、ご飯にするか！」

世界は不思議そうに廊下の先を眺める神啼の手を引いて食堂へと入
るのだった。

それから遅れてやってきた斬理と、斬理から少し遅れて戻ってき
た謳歌を加えて朝食を終えた世界たちは荷物をまとめた後、いつの
間に戻っていたのか終始無言のままの麒麟が操縦するへりに乗って
帰路に着くのであった。

過去を乗り越えてきたからこそ、今の彼がいるのだろっね

「息子よ。人生というものは、常に立ちはだかる壁に遮られているものだ」

「急にどうした父さん？」

「まあ聞け息子よ。俺も若かりし頃はそれはもう多くの壁を乗り越えて来たもんだ」

「へえー」

「そして壁にぶち当たるたびに何度足を止めそうになったか。それでも俺は決して止まることはなかった。なぜかわかるか息子よ？」

「……さあ？」

「そうだ、息子よ。とある偉人は言った。人の足を止めるのは絶望ではなく諦観、人の足を進めるのは希望ではなく意思なのだ。そして、俺は絶望の中でも己の意思を見失うことがなかったからこそエルデに出会い、愛を知ったのだ」

「……なあ、父さん、さっきから何」

「息子よ。俺は俺とエルデの愛の結晶であるお前を、勿論二人の娘たちのことも愛しているが、やはりあれらは女の子だ」

「女の、子？」

「お前がそこに疑問を抱いたことは後でしっかり娘たちに伝えておくとして、」

「なあっ！ そんなことしたら」

「話がそれたな息子よ。つまり俺はお前に期待してるわけだ。俺のように大器を持った男になってくれることを。神山の男に相應しい成長を遂げてくれると」

「……父さんだからさっきからあんたはなにをいグボアツ！？」

「かっかっか、油断したな息子よ。そうだな、一週間くらいしたら
迎えに行つてやるか。それまでナイフ一本で頑張るんだな世界」

世界は眉間に寄つたしわを解きほぐし、そして思考を
なるべく冷静に保つように努力しながらも、切り立った崖から見え
る、眼前に広がる壮大な光景に絶望する。

「どことだよここ……っ」

現代日本で暮らしていたはずなのに、今現在彼の視界にはコンクリ
ートのひとかけらすら見つけることはできず、その視界に映るのは
緑一色だけだった。コンクリートなんてちやちなもんは付かないモ
ノホンのジャングル。

自分の両目で確認できる範囲でどこまでも広がる緑一色の光景は、
ブラウン管越しであれば感動を覚えることもできただろうが今の彼
にはそんな気持ちはかけらも湧くことはなかった。

頭を真つ白にしていた世界は、『ガサリ』、と背後から聞こえた音に肩を震わせ恐る恐る振り向く。

しかしそこには何もなく、相変わらず、少年の困惑など知らぬとばかりに悠然とした大自然が横たわっているだけだった。

世界は自分が混乱していたことを自覚し、頭を振って現状について真面目に考えることにする。手の中にあるのはサバイバルナイフ一本。そして意識を失う直前に聞いた父親、いやさ糞親父ヒトデチンの言葉から現状を推測する。

キーワードは『一週間』、『ナイフ一本』。

まあ考えるまでもなかった。

崩れ落ちる膝。世界は両手を地面についてあまりにも馬鹿馬鹿しい己の現実に、自然と乾いた笑いが口から零れる。確かに自分の父親は人の親として致命的に頭のネジが何本か欠けているような人物ではあったがしかしこれは酷い。

そしてあの父親のことだ。本当に一週間後まで迎えに来ることはないのだろうと、それはなぜだか確信できた。少なくとも今まで、良くも悪くも自分の口から出た言葉は絶対に有言実行し続けてきた父親であるからにして。

そこまで思考を整理した世界。こんな状況でこんなにまとまな思考ができるなんて存外自分もやるではないかと、未だ混乱した頭でそんな事を考える。

となると自分はこの大自然の中で一週間、この身ひとつで生き抜かなければならないわけである。世界は手の中にあるサバイバルナイフを見つめる。

これ一本でどうしろというのだろう？

口から、乾いた笑いが漏れる。

そうして幾許か。少年はゆっくり立ち上がり、息を吐き出す。

そうだ、自分の中にある数十年分の知識とナイフ一本があればなんとかなるはずだ、と己を奮い立たせる。

そして誓う。

生きて帰った暁には絶対に報復してやると。

世界はその幼い顔に不屈の意志を刻み、ジャングルの中へと消えていくのだった。

一週間後。言葉通りに迎えに来た父親は、ジャングルの中で野生の動物たちに囲まれて生活している息子を見て腹を抱えて爆笑するのだった。

そしてその翌日。長女と母親を味方につけた世界の報復により、一週間ほど父親は神山家より姿を消すことになる。

神山世界八歳のことであった。

過去を乗り越えてきたからこそ、今の彼がいるのだろっね（後書き）

こうして彼は気付かぬうちに狂った常識に犯されていくのだった。

裏話・非日常の日常（前書き）

今回から非日常パートです、以前までと違い色々としています。
名前伏せてやるのがめんどくさ（ry

裏話・非日常の日常

カチャリ、と微かに食器の擦れる音が静寂を震わした。

黄金色の髪を微かに揺らし、口元に笑みを湛えた女は愉しげに瞳を細め。

そして、ゆっくりと円卓を囲んだ豪華に過ぎる顔ぶれを眺めた。

彼女の正面、組んだ足を小刻みに揺らしながら、まるでこの世全てが気に食わないと言わんばかりに歯軋りする男。

無造作に、というよりは手入れをしていないのだろう、椅子の下に散らばるくらいに長く伸ばした髪は澱んだ紫。顔を覆う程に伸びた前髪から覗く髪と同じ色の瞳は肉食獣のように縦に割れ、目元には大きな隈を作っている。

男の名はスパイダ・エルレイズ。

冥界に君臨せし、冥界の支配者たる原初の王。

向かって左側。腕を組み静かに瞑目する女。

シーツのような真っ白な布で身体を覆い隠し、長くのばした新雪のように汚れのない色の髪は、時折呼吸をするかのように鳴動し。

露わになっている色が抜け落ちたかのような白い肌には、まるで相反するかのように真紅の紋様が描かれており、女の呼吸と同調するかのように明滅を繰り返していた。

名をセロス・メリクルス。

霊界の女王にして、霊界で最も偉大なる力を持つ君臨者。

向かって右側。短く切りそろえた燃えるような赤い髪、いや文字通り灼熱を孕んだ髪は火の粉を散らし、褐色の肌を覆い隠す黒衣。深紅の二重円を描く両の瞳は閉じられ、しかし額に浮かぶ第三の眼、幾何学模様が浮かぶ赤い瞳が油断なく動き回る。

その身から漏れ出る熱に耐えきれず、燃え尽き灰になった椅子の上で仁王立つ、少女のような外見の女。

名を、ラース・パールバティ。

魔界を支配する七柱の王の一柱、憤怒を司るサタンの称号の継承者。

残る二人、右隣に座す男。白地に金の刺繍をあしらった法衣を纏い、長く伸ばした金の髪は腰の近くで結われている。柔らかな笑みを携えたその表情は見るもの全てに安らぎを与えるかのようで、白縁の眼鏡が瞳の奥に宿る感情を覆い隠していた。

名を、大天使ガブリエル。

ガブリエルの名を継ぎし、天界を統治する大天使の一人、序列第一位にして不滅を冠する大天使。

最後の一人、左隣に座す少女。二つに結った髪を背中に流し、椅子に深く腰掛けている。厭らしくつり上がる口元を隠すように紅茶を

含む。

少女の名を赤白黒子。

絶夜と不陽の二刀を継承した今代の地上の守護者にして、世界を構成する陰と陽を飼いならす人類最強。

そして、何れも最強を冠し、単独で世界すら滅ぼすことが可能な力を有する五人を見回して、更に笑みを刻む黄金色を携える女。

絶対不可侵にして絶対不可逆。歩く治外法権。純真無垢な暴力。全能の支配者。

付けられた二つ名は数知れず。

畏怖と嫌悪を持って囁かれるその人類失格の名を、

神山謳歌。

あらゆる界にその名を轟かす神山家において、さらにその頂点に君臨せし規格外、生命の特異点。

こうして、いかなる理由をもってか？

それぞれの世界において頂点たる六人が、ここに集った。

誰もが惚けるような、妖艶な笑みを浮かべていた美女
こと神山謳歌は、ポンと両手を胸の前で合わせ、口を開いた。

「うふふ、偶にはこうして異種族間交流するのも悪くないわね。
そうは思わない黒子ちゃん？」

場に漂う殺伐とした空気にそぐわない暢気な言葉を聞き、親しげ
に名を呼ばれた少女、赤白黒子はチラリと横目で謳歌に視線を向け
る。何を考えているのか分からない笑みを口元に浮かべる美女に、
ジワリと苦手意識が湧き出るのを抑える。そうして一拍の後、口を
開こうとした黒子の言葉を遮るように空気を震わすような怒気が溢
れ出し、そして大きな舌打ちの音が響く。

あーああ、やっぱり爆発しよったなあ、と。謳歌へ向けかけた視線
を戻し、椅子の肘掛けを握り潰す男へ顔を向ける。

『キサマの、戯れ言に、付き合う心算ナド、ワレにはない』

頭の中へと直接響くようにして紡ぐがれる言葉。苛立ちのこもった
その声がその場にいた全員に届く。

握りつぶした椅子の破片を消したスパードは、つい先日自身へと届
いた招待状の内容を思い出し、更なる怒りの念を募らせる。

『あのようなフザケタ手紙、寄こしたのは貴様だ、本題を言え』

簡潔に、ただ苛立ちの込められたその言葉を向けられた謳歌は、し

かし、ただ笑みを深める。

「ほむほむ、たしかにのう。ワシ等もそれほど暇な身ではないのでの、あのような強引な恋文で呼び出された身としては、ちやつちやか要件を言つてほしいもんじゃ。お主ほどのもんが主催するんじやから、戯れなんぞではないのだろう？」

片目を開き、あらあらうふふと笑みを零す謳歌に問いかけるセロス。それに同調するかのように声を発したのはラーズ。きつく結んでいた両目を開き、常人ならばその一睨みで魂すら消し飛ばせるほどの眼力を持つて謳歌を見据える。

「貴様が動き、オレたちまで集め……、三千世界でも相手どるか？」
「うふふ、それも面白そうだけどハ・ズ・レ。今回の相手は『世界』の狭間の住人よ。あなたたちならここまで言えば分かるでしょう？」

スパードは苛立ちを隠しもせず舌打ちを零し、他の四人は表情を変えることなく艶やかに唇を釣り上げ嗤う謳歌の姿を見つめる。

「なるほどのう、しかし解せんな。もし『あれら』とやりあうといふのならいつも通り、お主が好きに動けばいいじゃろう。どうせ誰も邪魔だてなぞせんのだ」

「私も、あなたの気紛れに付き合うほど暇ではありませんので。今度は何をしでかすつもりですか？」

「うふふ　セロスちゃんもガつちゃんもつれないわねえ」

楽しそうにセロスとガブリエルの顔を順番に眺め、そして謳歌は隣で黙って紅茶を味わっている少女へと視線を向ける。

「それで黒子ちゃんは何か聞きたいことはあるかしら？」

コクリと喉を鳴らし、最後の一滴まで飲み干したカップを置き、漸く口を開く。

「そうやね、この間の人形の件に、その前の異界の神兵とか名乗ってた侵略者共の件。たしか両方とも姐さんが処理したんやっただよな？」

確認するように告げられた言葉に嬉しそうに笑みを深める。

「あらあら、さすが黒子ちゃんね、いいところ突いてるわよ？」

「人形……、神の玩具。アスモダイの管轄域でもそのような存在が現れたという話をしていたな」

ラーズの言葉に各々が自分のいる界での似たような事象を想起して、眉をひそめた。

「うふ、そうなのよね。私だけで片付けてしまってもいいんだけど」

そこで言葉を切った謳歌は視線だけを動かして全員顔を眺める。五人は、ただただ愉しそうに笑う謳歌の言葉の続きを黙って促す。

「あはっ、神界って呼んでるらしいわよ。最上なる生命の生れし場所、だつて。一匹ばかり捕まえて少しお願いしたら色々教えてくれたのよね。例えば、そこには数千に及ぶ神が住んだり、例えば、その神界が、愚かにも私たちの暮らすこの世界を侵略しようと考えてる、とか。自分たち以外の生に意味はないとかなんとか考えてた

わねえ、あまりにも不愉快だからすり潰しちゃったんだけど」

その瞬間、円卓が消し飛び、空間が軋みを上げる。憤怒の名に相應しき破滅の炎が身から溢れだすラース。その炎に巻き込まれぬように、距離を開けて立つ、謳歌以外の五人。

「ふふ　ラースちゃんったら気が早いわねえ」

「やはり、やつらは下らんな。所詮は過去の遺物。オレの世界に足を踏み入れさせるには汚すぎる。……気に食わんがな、貴様の思惑通りというのが」

『ちっ、雌狐が、ワレらを、使うつもりか？』

「あら？　使うなんて心外ねえ。パーティーは一人でやっても盛り上がらないでしょう？　それと同じよ、どうせ叩きつぶすことに変わりはないんだし。それにあなたたち、侮られたのよねえ？　このままだんまりなんて、せつかくの最強が廃っちゃうわよ」

うふ　どうせなら、私と一緒に踊ってみないかしら？

椅子に足を組んで座り、妖然と笑みを刻む謳歌。

その身から溢れだすは、事象を捻じ曲げ、概念を力ずくで引き裂き、時の流れにすら縛られない。

人の身でありながら、もはや人の物差しで測るのもおこがましく、圧倒的という言葉で飾るには異常に過ぎる力の一片。

自然と漏れるプレッシャーが世界を軋ませた。

そのあまりにも隔絶した強者の姿に、しかしそれぞれの心のうちに湧きあがる感情を表に出すことはなく。

ただ、彼らは

その炎はあらゆる全てを燃やし尽くし。冥府から這い出た淀んだその紫は貪るように食い荒らす。死の容認者は全ての生を否定し。天の使いは魔の法によって世界を書き換え蹂躞する。陰と陽を支配する刀はただの一振りです。星の数の斬撃を生み出し。黄金色の女王はそこに存在するという事実を力づくで引き裂いた。

そうして、かつて『神』と呼ばれた者たちは、終わった。

裏話・非日常の日常（後書き）

謳歌のチート設定が伝わっていただければ嬉しいです。

裏話・麒麟の日常(前書き)

短いです。

裏話・麒麟の日常

『神』とは超次元精神生命体の別称であり、かつて数多の『世界』を支配していた存在。

『神』は情報そのものへと干渉し操作・改変する能力を有しており、精神生命体故にこちらから干渉することすら困難。

『神』は嘗てのラグナロクによりその絶対数を減らし、現在では『世界』と『世界』の狭間を主な生息域としている。

『神』が再び『世界』への干渉を始めたため最小限の最大攻撃力を持ってこれを殲滅する。

緑色の髪は汗で濡れ、服は体に張り付き、その何ともいえない不快感に麒麟は眉をしかめた。しかし、それに意識を裂いたのもコマ数秒、すぐに意識を切り替えた彼女は、彼女にとって何物にも代えがたい大切な居場所を守るため。そして、何より自信の身を守るために力を解放する。

彼女が持つ唯一の力、とある黄金色の女王によって絶対防衛と名付けられたそれは、事象の介入すら拒み、あらゆるものを拒絶する異質の力。何物にも害することができない最強の盾。

名付けた数秒後には喜々とした名付け親渾身の浴びせ蹴りをくらい文字通り頭から地に沈んだ犬神家な麒麟がいたりするするのだが今はどうでもいい話である。

その絶対たる護りが麒麟を中心に展開され、その瞬間、彼女の身は絶対不可侵の安全を約束される。

そう、約束されたはずであった。

呼吸は乱れ、膝が笑う。目には涙が溜まり、口からはあわわわと言葉にもならない音が漏れる。

ただそれでもなお視線は逸らされることなく前だけを見据え、そしてその瞳には一片の決意がこもっていた。

曰わく、死にたくないでござる、と。

『神』すらも切り裂く斬撃が走り、『界』すらも歪める概念魔法が飛ぶ。

裏の世界、非常識の側に身を置く彼女であってすらそれらは常識の埒外にある非常識な光景。

それらを見て喚起されるのは単純なまでの生存本能。

簡単な状況説明の後、あれよあれよという間に引きづられてきた彼女が見たのは、神と呼ばれる存在が千切っては投げ千切っては投げされるファンタスティックな光景。

時たま飛んでくる斬撃は絶対防御を展開して安全地帯に居るはずの彼女の頬を掠めていき、広範囲殲滅魔法の余波があらゆる事象の介入を遮断する盾の内側にいる彼女をゴミくずのように吹き飛ばす。

安全のあの字すら守られていなかった。

嵐が過ぎ去るのをただ傍観することしかできない、そんな彼女の思
いはただひとつ、

「アタシがここにいる必要ってないっすよね？　ないっすよねーっ
！？」

その一言に集約されていた。

裏話・斬理の場合

ジリリリン

ジリリリン

穏やかな空気を切り裂くように鳴り響く黒電話の音。正確には斬理の携帯に設定されている着信音。む？と呟き携帯へと手を伸ばし、着信相手を確認した斬理は通話ボタンを押して耳へと当てる。聞こえてきたのはいつも通りの愉しそくに弾む声。

『うふふ〜、チャ・オ キリちゃん。お姉ちゃんよ〜』

訂正。いつもの三割増しで愉快にタガの外れた声の調子に彼女は姿勢を正す。姉がアッパーなテンションになるのは長男を弄るときか後輩を苛めるときか、あるいは自分の領分を犯そうとするものが現れた時くらいのものだから。

「うむ。私は何をすればいい姉さん？」

そしてこの電話越しですら感じる、背筋を這いずり回るような不快に愉しげな気配からして、

『あはあ！ さすがキリちゃん話が早いわあ〜！ 実は今から皆でお掃除に行ってくるんだけどもしかしたらそつちにも打ち漏らしがいくかもしれないから駆除しといってくれないかしらあ？』

後者であることは明白である。

「ああ、それは構わんが、相手はどこのだれなんだ？」
『うふっ　引きこもりの　か　み　さ　ま　よ　　黒子ちゃんはこのちに連れて来てるから、キリちゃんが動いてくれるならお姉ちゃん安心できるわあ』

なるほどと一つ頷く斬理。

『詳しい話は帰ってからしてあげるから、そつちのことは任せたわよ〜』

それだけ言い残し通話が切れる。斬理は携帯を折りたたみポケットに突っ込んで立ち上がる。久しぶりの戦闘にジャージで出向くというのも趣に欠けるかと、まずはそれなりの格好に着替えるために自分の部屋に向かうことにする。

ジャージを脱ぎ棄て、正装に着替える。姉が仕入れてきた特別仕様名づけるなら超スーツだろうか？　と考えつつ。

黒いネクタイを締め、姿見で確認。愛刀を鞘袋に仕舞い肩から下げて部屋の扉を開けて、

「お姉ちゃん、私も行く」

そこにいた妹の姿に足を止める斬理。唇を引き結び、真面目に可愛い表情を浮かべる妹に内心萌えながらも、それをおくびに出すことなくキリリとした表情を維持する。

「戦うことになるぞ？　しかも相手は神だ」

言葉には出さずに、様々な意味を込めて、戦えるのか？ と問いかける斬理。

「私のお父さんとお母さんはお父さんとお母さんだけ。私の家は、帰る場所は此処だけ。だから戦える」

そう言って斬理の右手の裾をちょこんと握る神啼の姿に、彼女は思わずニヤリと男らしい笑みを浮かべてしまう。

「ふふっ、そうか、強くなっ たな神啼」

二年前とは見違えるようだな、とは言葉に出さず妹の頭を乱暴にこねくり回し、

「それじゃあ、神啼、お姉ちゃんを手伝ってくれるか？」

そう問いかければ、

「うんっ」

力強く頷いて見せた。

姉が差し出した手を握り二人は階段を下りて居間に顔を出す。

「ん？ 姉ちゃん出かけるのか？」

テーブルで人生ゲームに勤しんでいた世界が、顔を上げて問いかけ

る。

「ああ、少し用事が出来たからな。夕飯までには帰ってくる」

「神啼も行くのか？」

スーツ姿の次女と手をつないだままの妹に視線を移して問いかける。

「うん、お手伝いして来るっ」

「？　そうか、よくわからんが、怪我しないようにしなよ？」

空いた手で握り拳を作って見せる妹の姿に疑問を浮かべつつも、斬理がついてるから大丈夫だろうと苦笑を浮かべておくに留める世界。

「そうなんすかー、お二人ともお気をつけて行ってらっしゃ

「うむっ！　それでは行ってくるぞ世界！」

「行って来るね、お兄ちゃん」

「え？　ちょ、斬理さん？　なんで頭掴んで

「よし行くぞ神啼！　麒麟さん！　世界の手料理にありつく前にし
っかり働いて来ようじゃないかっ」

「うんっ」

「うひよっ、なんでアタシもナチュラルに加わってるんすか！？
取り敢えず説明をちょ、痛い痛い痛い頭が割れる手を離して

両手に確かな感触を携えながら、斬理は笑顔のまま神山家を飛び出して行くのだった。

裏話・斬理の場合（後書き）

一応次で最後です。

しかし次いつ上げれるか分からない。

一週間後か一ヶ月後か……。

それでもこの駄作者にここまでついて来てくださった方ならもう少しくらい！などと言いつつ、だらだらと過ごしてしまうのです。

近いうちに皆様のお目にかかれるようラストスパークかけていきます。

神山世界の変わらぬ一日

「夢を、見てたような気がする」

何の変哲もない、ただの幸せな夢を。

長い、長い夢を。

少年は静かに呟き、ベッドに寝転がったまま天井を見つめる。

そのままぼんやりと眺めていた彼の瞳にやがて理性の光が灯り始める。

と同時に両手で顔を覆い、同衾した少女を起こさないように器用に悶え出した。原因は羞恥心からであると推測される。時折手と手の間から「俺はいい年して何をつ……!?」「やら「なんで戦い終えた主人公みたいなた台詞を……!?」「といった言葉が漏れ聞こえることから間違いないだろう。

ひとしきり悶えきった少年、神山世界はやけにすつきりとした顔で 恐らく先程までのことは無かったことにしたのだろう

隣で無防備な寝顔を浮かべている妹の銀色の髪をサラリと撫で、ソフューと満足そうに口元を緩める姿に僅かに心を癒やしてから部屋を出る。

朝食の準備のために一階に降りた世界は、テーブルに置かれたそれに気付いた。無駄にハートマークの散りばめられたA4サイズの用紙を手に取りれば見慣れた長女の文字が。要約すると夜まで出掛けるから朝と昼は抜きでいいという内容が書かれている。そして八割以上が全然関係のない話であった。読み飛ばせないようにパズルのピースのように無駄に散りばめられた要件それを三分ほどかけて読み終えた頃には、深々と描き出された眉間の皺を解きほぐさなければならぬ世界だった。

朝食の準備を終えた世界は階段を上がって次女のもとへと向かった。

達筆な文字でKIRIと書かれた木板のかけられたドアをくぐり部屋へと足を踏み入れる。閉められたカーテンを開けて行き、差し込む陽の光で部屋の輪郭がくっきり露わになる。そうして目をやった部屋の主は未だ眠りの中。静かにベッドの上で惰眠を貪っている。

「ああー、また脱いでるし。……ほんとにどうしたものが」

この頃暖かくなってきたからといってシヨーツ一枚で寝るのは年頃の娘として如何なものだろうかと眉を寄せる世界。姉たちが素直に言うことを聞きはしないと頭というか魂で理解していても、きつと必ずいつかはおそろくわかってくれるはずと考えてしまう世界のその思考が、いわゆる現実逃避と呼ばれるものであるということを理解する日が来るのかどうかは誰にも分からない。閑話休題。

姉の絶対領域（無意識に攻撃される範囲）に踏みこまないように声をかけて目覚めを喚起した世界はベッドの脇にまで歩み寄り、しっかり仕事を果たしている掛け布団のおかげできわどい部分の隠れた

姉の耳元に顔を寄せ、両手でメガホンを作って声をかける。

「斬理姉朝だから起きな、朝ごはん出来てるから。今日は姉ちゃんの好きな焼き肉サンド作ったから冷め」

くわっ！と両目を開いた斬理が世界を跳ね飛ばす勢いで立ち上がる。

「うーむっ！目が覚めたぞ、おはよう世界。今日は実に良い朝だな！今日は焼き肉サンドかつ！」

ベッドの上で立ったまま伸びをする斬理がイイ笑顔を浮かべる。世界は姉の体を掛け布団で隠してやりながら「ほら、いいから前を隠しなさい」とそれを斬理に渡し「あ、うん」と素直に受け取る斬理に溜め息を零す。

「それじゃあ、ちゃんと服替えてから降りてくるんだぞ」

「うむ！すぐに行くっ、焼き肉サンドだしな！」

キラキラした瞳で元気よく返事する姉の姿に苦笑を返しながら、部屋を後にした世界は階段を下って自分の部屋に向かう。

静かにドアを開けて部屋へと入る。薄暗い部屋の中、ベッドを通り過ぎカーテンを開ける。とたんに差し込んできた光に僅か眼をしかめた世界は視線をベッドの上でくすか眠る妹へ移す。こちらは世界の努力が実ったおかげだろう、すっかりTシャツに短パンを着て寝ていた。

ふっ、とその姿に一抹の安堵を覚えたりしながらよっこらせつとベッドに腰掛ける。気持ち良さそうに眠る可愛い妹をもう少し寝かせて上げて上げたいと甘やかしたくなる気持ちを抑えつつ、小さな肩

に手をかけて優しくゆする。

「神啼、ご飯の支度出来たから起きてくれるか？」

体を揺さぶる心地よい振動と大好きな兄の声に神啼は薄く目を開いて「んー」と夢心地で返事をする。

猫のように顔をゴシゴシこする妹の姿をパシャッと携帯に収めつつ、世界は「ほら」と言いながら手を差し出す。

「……んう、おに、ちゃん、おはよう」

と呟きながら世界の手を掴む神啼をよいしょっと引っ張り起こす。

「おはよう神啼。目覚めたか？」

「ん、大丈夫、起きた」

「それじゃー下に行くか。斬理姉が待ちくたびれちゃうからな」

「うん。今日はきりお姉ちゃんだけ？ おつかお姉ちゃんは？」

「ああ、謳歌姉は夜まで出かけてくるんだってさ。朝早くからでかけてるみたい」

「ん。お仕事？」

「あー、今日は仕事じゃないみたいだけど、っと。先にご飯にしようか」

「うん」

階段を降りた二人は会話を切って斬理の待つテーブルに座る。短パソとジャージに着替えた斬理が二人に向けて笑顔を向ける。

「おはよう、おねえちゃん」

「うむ、おはよう、世界に神啼」

朝の挨拶と一緒に鳴り響くお腹の音。うぐう、と腹をさすりながら苦悶の表情を浮かべる姉の姿に苦笑してしまう世界。

「それじゃあ姉ちゃんが限界みたいだし」

腹を押さえてよだれを垂らす姉をチラリと見つつ、手を合わせた世界。神啼も兄を見ながら手を合わせ、斬理はバチンツと音をたてながら（最早拝む勢いで）、いただきますと言う世界に続く二人。

待つてましたと言わんばかりに食事に飛びかかる斬理を見ながら世界と神啼も自分の分に手を伸ばす。

十斤の食パンを使ったサンドイッチの山が見る見る内に消えていくいつもの光景は特に気にかけることもなく。

「ぷふう、うむっ、今日も美味だったぞ世界！」

「お粗末様でした」

満足気な様子でごちそうさまでしたと手を合わせる斬理に返事を返しながら空になった湯のみにお茶を注いでやる世界。ありがとうと言いながら注いでもらったお茶で喉を潤す。

「そついえば姉さんはバイトなのか？」

三人での食事を済ました後では、今更感の拭えないその質問。姉不在の理由く朝ご飯、という等式を頭に浮かべながら、まあそれも今更かと一人納得する。

「そついえばさつき神啼にも聞かれたんだけどな。今日はバイトじやなくて知り合い集めてパーティーするんだってさ」

自分専用の湯のみを傾けながら溜め息混じりに答える世界。おそらく朝から無駄に長い文章を読まされたことを思い出しているのだろう。

どうでもいい話だが、空になった湯のみの底を見つめながら憂鬱な表情を浮かべる少年の横顔を恋する三葉少女が見つめていたなら、きっと影のある横顔ごつつあんです！　と言いながらかぶりついたことは間違いないはずだ。

「ばーてぃー？」

「いやたぶん何かの例えだと思うけど。……姉ちゃんが何考えてんのか俺には一理解できないんだらうなー」

立ち上がりながら、まあ姉ちゃんならたぶん大丈夫だらうけど、とよくわからないまま特に心配はしていない世界。

「ふむ、パーティーか。……それは興味深いな」

瞳を細めてニヤリと笑みを浮かべる斬理をなるべく見ないようにしつつ、そのまま朝食の片付けを始める世界、とその後ろに引っ付くようにしてついて回る神啼。手に空の湯のみが二つ握られているので世界の手伝いをしているのだろう。

ニヤリと笑みを浮かべる斬理を放置して洗い物を済ました世界は、朝の内に洗い終わった洗濯物を洗濯機から取り出して籠に入れていく。

庭に出た世界は物干し竿の前に籠を置き、その中から洗濯物を取り

出す。そして素早くハンガーを渡す神啼。
二人の連携プレーにより洗濯物の山は見事に消えていくのだった。

ソファーに横並びに座る三人。休日とはいえとくに用事があるわけでもなく、取り敢えずやらないといけない家事は一通り終わらせた世界は昼食までの僅かな時間をのんびり過ごすことにしたのだった。

兄と姉に挟まれた神啼は足をぶらぶら揺らしながら、眠気に誘われたのかうつらうつらと船を漕いでいる。斬理にいたってはすでに神啼の肩に頭を乗せて可愛く寝息を立てていた。そんな二人の家族を微笑ましそうに頬を緩めて眺める世界。

いっつもこれだけ静かなら俺の心労も随分削減されるんだろうけどな。

と益体もないことを考える。ついに撃沈した妹の頭の重みを肩に感じながらテレビの中で面白おかしく政治を批評するコメンテーターをぼんやりと眺めつつ、じわじわやってくる睡魔に身を預ける世界。

ピンポン、と鳴り響いた来客を告げる音が世界を夢からすくい上げた。

「ん、っと、寝てたのか」

呟きふあーつと欠伸を噛み締める世界。肩でもぞもぞつと頭を動かした神啼が目をゴシゴシしながら兄から離れ、神啼に頭を預けていた斬理がひよいと体重を離し、「ひる、ご飯？」と呟きながらジュルリと口を鳴らす。

まどろみから抜け切れていないところへ再度来客を告げるベルが鳴らされる。

寝ぼけ眼のまま立ち上がろうとした斬理を手で制した世界が神啼を任せて立ち上がる。

はいはい今出ますよつとこぼしながら玄関へと向かい鍵を外してドアを開ける。

「あ、おはようございます、セカイさん」

空色の綺麗な髪、黒いズボンと色即是空とプリントされたTシャツを着た麒麟が笑顔を浮かべてぺこりと頭を下げる。これはどうも、と世界も頭を下げ返す。

「もしかして起こしてしまいました？」

眠気の抜け切れていない世界の顔を見ながら申し訳なさそうにしている麒麟にいえいえと否定しつつ苦笑する。

「暇だったんで、少しうたた寝してただけですから気にしなくていいですよ。それより今日はどうしたんですか？」

話を変えるように問いかける世界。

「あ、はいっす。これ、実は少し遠出して来たんで」

お土産ですと差し出された袋を受け取る世界。

「わざわざありがとうございます麒麟さん」

「ふふ、セカイさんたちにはいつもご迷惑おかけしてるっすから、これくらい気にしないで下さい」

そう言って笑う麒麟。謳歌といるときには見せることのない大人っぽい魅力的な笑顔にちよっぴり見とれてしまう世界。いつもこんな感じなら普通に美人なだけだなこの人と、勝手に残念がられる麒麟。もちろんそんな事を考えているとはおくびにも出さず、世界はニコニコ笑顔を浮かべている。

「それじゃアタシはこれで」

「あっと、麒麟さん。よかったら、お昼食べていきます?」

「え、っと、それは非常にありがたいんですけど、いいんすか?」

「もちろんですよ。今日は謳歌姉が居ないんで。三人で食べるより四人のほうが楽しく感じませんか?」

謳歌より麒麟の食事量の方が少ないため、同じ人数分のご飯を作るにしても手間もかからないし、と言う言葉は心の中で呟く。

「ふふ、そうっすね。それじゃあ、お言葉に甘えさして貰ってもいいっすか?」

「はい、いらっしやい」

笑顔で麒麟を招く世界。うひーっ、笑顔がまぶしいっす! とテレテレしながら神山家の玄関をくぐった麒麟は世界の後を着いて居間へと向かう。

「うむ？ 麒麟さんだったのか」
「んー、きりんおねえちゃん？」

ソファーに座ったまま振り向いた斬理が居間に入ってきた二人、世界の後ろにいる麒麟に向けていらっしやいと声をかける。斬理の膝の上で丸まっていた神啼もその声に目を覚ます。

「今日は麒麟さんもお昼食べてってもらうことになったから。それじゃ麒麟さん、今から準備するんで適当にくつろいでいて下さい」「だったらアタシも手伝うっすよセカイさん。滅多にない腕の見せ所っすから」

そういつて細い腕を曲げてむんつと握りこぶを作って見せる麒麟の姿に嘖き出しつつ、「それじゃあお願いします」とお願いする世界。

「むっ、お姉ちゃんも手伝うぞ世界！」
「お兄ちゃん、私も」

どたどたと何やら対抗心を燃やした斬理と、姉に片手で抱えられたままピヨコンと手を上げて参加を表明する神啼。
先ほどまでの静けさが嘘みたくに慌ただしくなった家の中、少年の溜め息は喧騒に掻き消されるように空気に溶けて行くのだった。

「……うっぷ、ちそうさま」
「うっ、もっ、入らない、っす」

世界と麒麟がお腹を押さえながらうめき声を上げる。目の前には山のように積まれた皿が。

「むふう、流石に私もこれだけ食べれば満足だ」

肌のツヤツヤした斬理が満面の笑みでうんうんと頷き、その横で神啼がエツプと小さくげっぷを零す。

「二人とも調子に乗って作りすぎだつて。明日の分の食材まで使つて」

また買い出しに行かないととぼやく世界。

「むう、なんだ、それくらい気にするな世界！ 美味しかったんだから」

胸を張って開き直る斬理をじと目で見る世界。この姉は普段食べる方専門のくせにたまにやる気を出して料理をすれば自分基準で作るために、いつも作りすぎて世界のお腹と冷蔵庫の中身に多大な被害が被るのである。

「うっ、申し訳ないつす。なんだか楽しくなつてしまつて。誰かのために料理作る機会つてあんまりないつすから」

斬理に便乗して得意料理を手当たり次第に披露した麒麟がしょんぼりした様子で頭を下げる。

いやそんなこと言われたら怒れないよという表情を浮かべる世界。

「ああー、いや、美味しかったから、えっと、そう！ 結果オーラ

「イツ、結果オーライだから!!」

「え? え?」

「美味しかったから結果オーライ!」

「え、えへ、そうっすか? そう言ってもらえるところれいっす」

何が結果オーライなのかは分からないがとりあえず大きな声で誤魔化しておく世界だった。

皿洗いぐらい任せてくださいという麒麟の言葉に甘えた世界は神啼を膝に乗せたまま縁側でくつろぐ。

神啼の頭に顎に乗せたまま「あー、」と力の抜けた声を喉から零す世界。クスクスと鈴のような笑い声にその態勢のまま腕の中の神啼に「どした?」と世界が問いかければ体を震わせて「頭、こしょばい」と小さく返事が返ってくる。

「ああ、そっか、ごめんなー神啼。ちょうどいいところに頭があったから」

とその態勢のまま答えた世界はこりこりと顎を使って神啼の頭をこする。

「ん、お兄ちゃん、こしょばい、んーふふ」

背中を世界の腹に擦りつけるようにして抗議する神啼。ごめんごめん、こしょばいこしょばいと言い合いながら一向にやめる気配のない二人。

兄妹のスキンシップにしては甘すぎる空気を発する空間に、ちよつと前に皿洗いを終えてお茶を持ってきた麒麟は廊下の影で足踏みし

てしまう。えー、あれ？ アタシどうしたらいいんすか？ ツッコ
ンだほうがいいんすか？ と混乱しつつ鼻から垂れる赤い汗という
名のリビドーと荒れる息を手で押さえる麒麟。まるつきり不審者の
アレであった。

「うん？ うわっ、麒麟さん大丈夫ですか！？」

妙にしつとりというかねっちよりとした気配に振り向いた世界は、
血だまりで倒れ伏す麒麟の姿に慌てふためきながら駆け寄る。

「……う、いや大丈夫、っす。ちよっとのぼせただけっすから、の
ぼせただけっすから」

まさか正直に「あなたとあなたの妹をネタにえろい妄想してました」
とは言えるわけの無い麒麟はあははと笑って誤魔化す。

顔の下半分とシャツを血で染めて笑う麒麟の姿にどんびきするが、
そこは何も言わないのが男というものだろう。取り敢えず顔洗いま
しょうと言いながら、肩を貸してやるのだった。

遠慮する麒麟を風呂に放り込み、血濡れの服を洗濯する。風呂か
ら出た麒麟に自分のジャージ（斬理の服はウエストが合わなかった
ため）を貸した世界は、連れたつて居間へ。

どうやら本格的にへこんでいる（ネタにした相手に優しくされて罪
悪感がえらいことになっている）麒麟の気を紛らわしてやろうと人
生ゲームを引っ張り出す世界。

中学生に気を使われるダメオ（20）にも五分の魂。

つまり大人の余裕を無理やり取り戻した麒麟は世界の優しさを無駄

にしないよう全力で人生ゲームを楽しむのであった。

なんだかんだで久しぶりに引っぱり出してきた人生ゲームに白熱していた世界と麒麟（銀行は神啼担当）。そこに黒電話の着信音が鳴り響く。

「ん？ ああ、斬理姉か」

ソファで携帯片手に正座している姉の姿に首をかしげる世界だったが、その内容にまで興味はないのですぐに視線を戻した。

「なっ、また、赤字、っすか……！」

おおお！と頭を抱える麒麟。

とそれを横目に急に立ち上がった神啼が妙に真面目な顔を世界に向ける。

「お兄ちゃん、用事。ちょっと抜けるけど。いい？」

トイレかな？ と考えながら頷く世界を後にして急ぎ足で階段を上っていく神啼。それをぼんやり見送った後、視線を手元に戻してルーレットを回す。

「お、よっしゃ。いち抜け」

「うひゃあ、セカイさん早いですよー。アタシまだ半分しか進んでないのに」

「いやいや、麒麟さん弱すぎでしょ？ そこまで運悪いとなんかこ

「つちが申し訳ない気分になっちゃいましたし」

「うー、いいんすよいいんすよ。アタシの運の悪さは先輩の折り紙つきですから」

「あー、なんかごめんなさい」

謝らないでくださいと涙目の麒麟に苦笑いを浮かべる世界。

「あれ？　そういえば斬理さんもいないっすね」

「ん？　あれ、ほんとだ。いつのまに」

麒麟に言われていつの間にか斬理の姿が無くなっていることに気づく世界。

「斬理さんと妹ちゃんは何か用事でもあつたんすか？」

「いや、特に何かあるとは聞いてないんだけど」

と答えようとしてトントンと階段を下ってくる音が聞こえた世界がそちらに視線を向けると、斬理が神啼の手を引いて降りてきていた。部屋着からスーツに着替えている斬理。

「ん？　姉ちゃん出かけるのか？」

と問いかける世界に夕飯までには帰ると返事をしながらテーブルの横に歩いてくる。手をつないだままの妹の姿に疑問を浮かべつつ、「神啼も行くのか？」と問いかければ握り拳を作って元気の良い返事を返され、なんでそんなにイイ顔してんだ？とさらに疑問が浮かぶ。

「？　そうか、よくわからんが、怪我しないようにしなよ？」

まあ取り敢えず、斬理がついてるから大丈夫だろうと苦笑を浮かべておくに留める世界。それにならって麒麟が椅子に座ったまま笑顔を浮かべて手を振り見送りの言葉を述べようとして、その途中で斬理に頭を鷲掴みにされた。

「うむっ！ それでは行ってくるぞ世界！」

「行って来るね、お兄ちゃん」

満面の笑顔を浮かべた斬理が片手で麒麟を引きづっていく光景を見送る世界。

玄関の方から姉妹の元気な声とそれに混じって悲鳴が聞こえたような気がするけれどおそらく気のせいだろう。

台所に向かった世界は、冷蔵庫から冷えた緑茶を取り出しコップに注ぎ、麒麟にもらったお土産片手に居間へと戻る。

ソファーに腰掛け、お茶を一口すすり、土産の袋を開ける。

「はにーべあー、ぱいくつきー？ ……麒麟さん、少し遠出したって、……アラスカまでいったのかよ」

アラスカって何市にあるんだよと訳の分からないことを呟きながら包装をはがして取り出したそれを口に放り込んで咀嚼。敢えて感想は口にせず、お茶を飲む。

はあー、と一息ついた世界はソファーに背中を預けて力を抜く。

「……………静かだ」

思ったことをそのまま呟いた世界はそのままぼんやり天井を眺める。

「あー、あー、っと。うつし、休憩終了」

しばらくそうしていた世界は立ちあがって、体を伸ばす。

さて、腹をすかして帰ってくる姉ちゃんたちのために美味しいもんでも作って待ってますかと腕をまくって気合を入れる。まずは買い出しに行くかと財布と買い物カバンを持った世界は頭に献立を思い浮かべながら鼻歌交じりに商店街へと繰り出していくのであった。

神山世界の変わらぬ一日（後書き）

次こそ最終話です。

蛇足と言つ名のエピソード(前書き)

本当は前回で完結予定だったんですが、勢いで書きちゃったんで、
そういう意味も込めたサブタイトルです。

蛇足と言つ名のエピソード

「せつちゃん。ただいま。お姉ちゃんが帰ったわよ。」

玄関から聞こえた声に包丁を振るう手を止め、台所から顔を覗かせた世界はぞろぞろと居間に入ってきた女性陣を見て「……うわあ」と呟く。

「ただいま世界いい匂いがする。凄くいい匂いがする。」

入ってくるなりくんくん鼻を鳴らしたす斬理。そのまま肩に担いでいたものをガンツという音と共に地面に落として台所に駆けより覗きこむ。

「おにいちゃん、ただいま。」

その後ろでひよこりと片手を上げた神啼が謳歌と手を繋いだまま笑顔を浮かべる。それに曖昧な笑顔でお帰りと返す世界。

「うふふ、せつちゃんいつもみたい。ただいまのチュ。」

斬理の隣までやってきて、んーと唇を突き出す謳歌を努めて無視しながら床に転がる麒麟というより最早ただの襦袢雑巾にしか見えないう麒麟をチラリと見、三人の格好を順々に見ていく。

「うふふ　そんなに見られたらお姉ちゃん濡れちゃうわあ。」

一体何処で何をしてきたのやら、と溜め息を零す。

「取りあえず、ご飯の前に四人ともお風呂にきなさい。あと、ぼろぼろになった服は洗濯機に入れないでいいから、わけておくように」
厳かに宣言する世界の言葉には「いと元気に返事した謳歌が斬理と神啼の手を引き、床に転がったままピクリともしない麒麟の腹に気付け代わりの蹴りを喰らわせた後、一緒に風呂に連れていく。慌ただしく去った四人に溜め息を零しつつ再び包丁を握る世界。」

風呂場の方から聞こえてくる賑やかな声を聞きながら台所に立っていた世界は「バーン！」と突然玄関のほうから鳴り響いた大きな音に「……今度はなんだ」と眉間にしわを寄せつつ玄関に続く扉に視線を向ける。

勢いよく開かれる扉、そこから飛び出した二つの影が弧を描くようにくるくると回転しながら居間の中へと降り立つ。まるで特撮みたいだなと場違いな感想を抱きつつ呆れた視線をテーブルの横、ポーズを取ったままドヤ顔を浮かべる二人に向ける。

「……で、なにしてんの二人とも？」

その言葉に二人はパンパンと服を払いつつ立ちあがる。

「ふうー、息子よ、久しぶりに返ってきた親に向かってなんと冷たい対応だろうか。いったいどこで育て方を間違ったんだろう」

「親父よ。むしろあなたの教育でグレなかった息子を褒めるべきだろう」

「まあまあ、世界さんたらしばらく家を留守にしている間に見違え

るくらいに立派になって……っ」

彼らが世界の、彼ら四兄妹の父と母、神山英雄と神山エルデ。

短く切りそろえた黒い髪と、どう頑張っても二十代前半の美青年にしか見えない英雄。

後ろで結わえられた艶やかな金髪、謳歌に劣らぬほどの兵器^{オッパイ}、やや垂れ目がちなながらも絶世と呼ぶに値する美貌を携える三人も子供を産んだとは思えないくらい美少女で母親のエルデ。

溜め息を零して苦悩に塗れた言葉を零す英雄と、ハンカチで流れてもない涙をぬぐうエルデ。

「というわけで、これからしばらくの間は家でゆっくりするから」

「ふふふ、そうなのよ。お母さんたち世界さんの手料理が恋しくて恋しくて返ってきちゃった」

「なに？ 俺はエルデの手料理が世界のそれに劣るなんて思ったこととは一度もないぞっ。お前が一番だ！！」

「……っ！？ 英雄さん！ うれしいっ、他の誰でもない、英雄さんがそう言ってくれるのが……！！」

「ふっ、おいで、エルデ」
「英雄さん！」

ひしつと抱き合う両親。三文芝居を無理やり見せられたような空虚な気持に襲われる世界。

「……まったく、姉ちゃんたちが風呂から出てきたらご飯にするから、それまで大人しくしてなよ」

「まあっ！ それじゃあみんなの成長具合を確かめなくっちゃっ」

後光が差したかのような錯覚を巻き起こすほどのキラッキランとした笑顔を浮かべてスキップしそうな勢いで風呂場の方へと消えていくエルデ。少ししてから風呂場の方から一際大きな黄色い声上がる。「ふ、エルデも久しぶりの我が家で舞いあがってるみたいだな」腕を組んでしみじみとつぶやく英雄。

ああ、たぶんきつとまた麒麟さんが犠牲になるんだろ
うな、と妙に確信に満ちた想像を浮かべた世界は心の中で手を合わせた。

「ところでしばらく家にいるってことは仕事はいいのか？」

「ああ、今日一日で随分片づけることが出来たからな。ほとんど謳歌のおかげなんだがな」

そういつてどこか誇らしげに、呆れたように唇を曲げる英雄。

謳歌姉、親父の仕事の手伝いもしてたのかとよくわからないまま納得する世界。

「そうなんだ。まあ神啼はきつと喜ぶだろうな」

「ふん？　なんだ息子よ。お前は喜んではくれんのか？」

今頃嬉しさのあまり母に飛びついてるだろう妹のことを考えて笑みを浮かべる世界に、冗談交じりに問いかける英雄。

「俺は皆が健康でいるならそれが一番うれしいよ」

とおじいちゃんみたいな遠い目を浮かべる世界。

「冗談ならともかく、本気で言ってたんだからなあ。自分の息子ながらなんでこんな育ち方したのやらさっぱりだ」

風呂場の方から時折聞こえる悲鳴や嬌声を聞き流しながら、調理を再開する世界。

そんな息子の後ろ姿を眺め、少しだけ真面目な顔をした英雄が声をかける。

「なあ息子よ。お前は今、元気か？」

なにか、いろいろ省略したようなその問いかけに、考えることなく世界は答える。

「ああ、あなたの息子は毎日元気にやっていますよ」

トントントンとリズムよくまな板を叩く音。

風呂場の方から聞こえる楽しいげな声。

そうか、と小さく、満足げに呟かれる声。

それはまぎれもなく、神山世界にとっていつも通りの、いつもより少しだけ賑やかな一日。

父さん、母さん。息子はこっちでも元気にやっています。

蛇足と言つ名のエピローグ（後書き）

というわけで完結しました。

連載から半年、途中でネタ切れや体力切れを起こしつつのなんとか終わらせることが出来ました。

なんだかんだと思うところはあるものの、エピローグを書き終えて十分に満足できたので良しということにしておきたいと思います。

ですので神山世界のお話はひとまずここで終わります。

最後に、稚作を最後まで呼んでくださった読者の皆様。ここまで気長に付き合ってくれた読者の皆様。ここまでお付き合いいただきありがとうございます。

この作品が、少しでも皆様の暇な時を過ごすための時間つぶしになっていたのなら幸いです。

番外編いち（前書き）

息抜きにぽちぽちと。三時間で完成。短いです。

番外編いち

【例えばこんな後日談】

「んー、平和っていいっすねー」

「ん、そうですねー」

「お客さん来ないっすねー」

「閑古鳥が鳴き出しそうですねー、これだけ暇だと」

「閑古鳥っすかー。閑古鳥と言えば、昨日焼き鳥食べに行ったんすよ」

「へー、三丁目に新しく出来た？」

「はいっす。そしたらですね、白九尾さんに出くわしまして」

「ん、白九尾？へー、元気そうでした？」

「それはもう凄く元気そうでしたよ。ずっと断花さんとイチャコラしてたっす」

「……ああ、鬼心もいたんだ。あいつら、付き合いだしてから周りに対する遠慮が無くなったからなあ。デレというか最早ドロドロですよね」

「はい、おかげでご飯の味もわからなかったす。リア充とか爆発すればいいんすよー」

「まあまあ。って、そう言えば麒麟さんこそ。この間某企業の跡取り息子さんに求婚されたとか」

「うえっ、何でそれを!？」

「この間の麒麟さんが休みのとき、謳歌姉が店に来て色々喋ってたんですよ」

「ひいっ！色々ってなんすか、色々って!」

「あ、えつと、その」

「なんで目逸らすんすか世界さんっ、一体アタシの何を知ったんすか!？」

「まあまあ、それは今は置いてくとして。で、どうしたんですか？」

「うう、いや、それは勿論丁寧にお断りしたつすけど」

「あ、そうなんですか？折角の玉の輿だったのに」

「むう、世界さんはそんなにアタシはお金に靡くような女に見えるつすか？」

「え、そんなわけ değildirよ」

「……そ、そんなにはつきり否定されると、それはそれで恥ずかしいつすね」

「麒麟さんって、ほんとにこういう話題に弱いですねー」

「うう、ほっといてください」

「あはは」

「あ、あはは」

「……」

「……」

「……」

「……」

「それにしても」

「お客さん来ないつすねー」

「そうですねー」

「んー、あ、そういえば明日先輩たち来るっていつてましたよ」

「姉ちゃんが？達ってことは桃子さんですか？」

「そつす。仕事終わってからなんで12時くらいだそうです」

「おっけです。明日は忙しくなりますね」

「先輩たちはよく食べますからねー」

「あー、食材足りなくなるかも。買い出しに行かないとなあ。麒麟さん明日の昼とか大丈夫ですか？」

「はい、勿論お付き合いですよ。車、家の方にまわしたらいいですか？」

「うん、そうしてもらえますか。明日は斬理姉だけだから、昼ご飯の用意しなきゃなんで」

「あー、妹ちゃんはお出かけですか？」

「神帝は三國ちゃんとか高校の友達と遊びに行くらしいんで。いい加減、俺や神帝に頼らないようになってくれないですかね。姉ちゃんもいい年なのに」

「まあまあ。斬理さんも先輩も世界さんと妹ちゃんの作るご飯が大好きなんですよ」

「まあ、いまさらどうにかなるとは思ってないんで、それはいいんですけど。はあ。相手見つけるの苦労しそうですよねあの二人」

「な、なんとも言い辛いデリケートな問題っすねー」

「誰かあの人達引き取ってくれる剛の人いらないかなあ」

「それはまあなんというか。いたらいいですねー」

「ですなー」

「……」

「……」

「……」

「……」

「もし明日死んでしまつとしたら」

「なんですかそれ？」

「いや、昨日テレビでやってたんですけど」

「ふーん。麒麟さんだったらどうするんですか？」

「そつっすねー」

「……」

「あはは。なんか、いつも通りここに来ていつも通り世界さんの手伝いしてるのが一番しっくりくるっすね」

「麒麟さんらしいですねー」

「まあーアタシはそんなもんでいいっすよ。それで、明日死んでしまつとしたら世界さんだったらどうします？」

「うーん。そつですね。じゃあ麒麟さんと結婚でもしよっかな」

「……え？」

番外編いち（後書き）

もしかしたら有り得るかもしれないという話でした。

作者的にはこの二人の組み合わせが一番しっくりきてたり。

番外編は気が向いたらポツポツ書いていこうかと。

番外編に

ザーザーと雨が地を叩く音と共に、【CLOSE】の板がかかった扉を開けて駆け込んできた少女を、神山世界は苦笑と共に出迎えた。

「うー、お兄ちゃん、濡れちゃった」

額に張り付いた銀髪を指で引っ張りながら少女、神山神啼はそう言っ
つて唇を尖らせる。

急に降り出した雨にやられたのだろう。

制服はびっしょりと濡れ、腰まである銀色の髪は水を滴らせていた。

世界はそんな妹の姿で状況を把握したあと、苦笑を浮かべたまま作業を中断して調理場の奥に入っていく。

神啼は、張り付いた制服を気にするフリをしながらそつと、兄の姿を目で追う。

自分が『神山』になってから十年。

あの頃は、自分にとっての世界はとても狭かったと、記憶している。
『神山』とそれに濃く繋がる人達。

そして、そんな世界の中心にいたのはいつでも優しく苦笑を浮かべ

ていたその人で。

そんな社会不適合者予備軍だった自分が今では立派に女子高生をやっているのも、やれているのも、誰でもないやっぱりこの人のおかげだろうと、若干火照りだした頭で考える。

独りの夜が嫌だといえば、小さな両手一杯に自分を抱きしめてくれた。

それでも眠れないと言えば、今日だけだからと言って、いつもいつも歌を口ずさんでくれた。

自分が泣いたときはいつも側にいてくれた。

哀しいときも、嬉しいときも、喧嘩したときも、いつも。

いつも、その暖かな掌で。

「ほら、神啼。そのままじゃ風邪ひくぞ。ちゃんとふいとけよ」

そう言って、頭にかけられたタオル越しに、優しく撫でつける手の感触。

それは、あのときから変わることなく。

でも、だからこそ、もどかしい。

タオルの向こうで、しょうがないなとばかりに微笑む兄の、あの頃からまるで変わらないそれが。

自分は、こんなにも、鼓動を打ち鳴らしているのに。

兄の仕草一つに、馬鹿みたいに気持ちを振るわされているというのに。

やはり胸なのだろうか？

二人の姉と比べるまでもなく小振りな自分の胸を見下ろす。
つま先が見える。

実に忌々しい。

「？ 何拗ねてんだ神啼。ほれほれ可愛い顔が台無しだぞ」

笑えー、と。

屈み込むようにして顔を近付けて、グニリと、頬を挟まれる。一步踏み出せば触れ合えるその距離で、兄は笑顔を浮かべる。

「くっ！？」

まるで、小さな妹を相手にするようなその無邪気な行動は、今の自分にはあまりにも刺激が強すぎて。

真っ赤に染まつた顔を見られるのがなんだか無性に悔しくて、夕オルを跳ねのけ、昔より逞しくなったその胸に飛びつく。

「おわっ、こら、神啼。まったく、相変わらずだなその抱きつき癖」

濡れたまま抱きついたらいかんと昔言っただろうにと溜め息を零して、けれど突き放すことも、抱きしめることもせず、クシヤリと頭を撫でられる。

「誰にでもするわけじゃない。今は、お兄ちゃんだけ」

悔しさの後押しされて。ドキドキしながらも、少しだけ勇気を出したというのにこのニブニブな兄は。

「んー、まあ、兄としては嬉しいんだけどねえ。お前ももうすぐ大学生なんだから、早く兄離れしないと。姉ちゃんたちみたいにはならんでくれよ」

そんなことをのたまって笑うのだから、本当にどうしようもない。

だからもうそんなニブニブな兄にはきつちりとここで告げておいてあげることにする。

いい匂いのする胸元が名残惜しいけど、今は我慢する。

最後に思い切り深呼吸して兄分を補給してから、顔を上げる。

不思議そうにこちらを見つめる兄。

自分の大好きな、優しい笑みを浮かべる兄に、少しでも近付けますようにと背伸びして。

「私は、ずっとお兄ちゃん離れなんかしないから」

おでこが兄の鼻に触れる。

今はまだ、届かないけど。

いつか。

きつと、なんて言わない。

絶対に、届いてみせるのだから。

番外編に（後書き）

兄×妹話でした。補足として、このルートでは謳歌も斬理も両親も神啼の味方だったり。つまり家族公認。

さて、次は誰にするかな

番外編さん

カランカランと、来客を告げる音に、グラスを拭く手を止めて顔を上げた。

「いらつしゃいませ」と最近身についてきた言葉を反射的に告げながら、入ってきた客に目を向ける世界。

ぴっちりとしたパンツスーツに、きらりと光るフレームレス眼鏡。カツカツと、背筋を伸ばしたまま歩く姿にはいっそ貴賓すら感じさせ。

紅いルージュを引いた唇に、知的な光を漂わせる瞳は強く視線を惹きつける。

「ここ、いいかしら？」

耳に栄える涼やかな声が紡がれる。

「ええ、どうぞ」

がらがらの店の中で、敢えて目の前のカウンター席を選ぶその女性は。

腰まで真っ直ぐ伸ばした黒い髪を揺らし席につく。そうして、沈黙。女性は両肘をつき、組んだ手の甲に顎を乗せ、アンニュイな視線を流していて。

だから、というべきか、世界は溜め息を吐き出す。

「んで、こんな朝早くから何やってるんだ。何プレイだよそれ？」
「……むう、プレイとか言うなよ」

呆れを多分に含んだ視線を向けられて女性、『龍波 三葉』はくずおれるようにしてカウンターに突っ伏した。

「神山こういうのが好きなのかなって思ったんだよ」

「いや、その根拠は何さ？」

「だって神山って、お姉様たち大好きだろ？」

「うん。いやいや、うん。わかった、もう何も言うな。大体予想は出来たから」

むう、と眉を寄せて世界を上目遣いに見上げる。

「こういうのは好みじゃなかったのか？」

「好みとか以前に、なんかぶっっちゃけ違和感しかなかったけど」

だって三葉だから、とは流石に口にはしない世界。

そして。

「なんだよー、今回はいけるとおもったんだけどなー」

と、そう言って彼女は頬ずえをつき小さく呟く。

「……何か飲むだろ？」

何が『いける』と思ったのかは、ツツコまない。それは、世界から問にかけていい話ではないだろうから。

「うん。神山に任せる」

彼女に背を向け、棚から少しきつめの清酒を取り出し、杯に移す。

「ほら」

「ありがとう」そう言って、受け取った酒を一口流し込む。

世界は杯を傾げる彼女から視線を外し、再び手元に視線を戻し。

「なあ、神山」

彼を呼ぶ声に、思わず手を止める。

何故なら、その声は、彼の知ってるはずの“少女”の声なのに。それは、彼の知らない艶を含んだ“女性”の声だったから。

「まだ、神山にとって私はあのときのままなのか？」

自分を見つめる彼女の表情は、どうしようもないほどに少女ではなく女性だったから。

だから彼は、そんな彼女の言葉に答える前に、大きく溜め息を吐き出すのだった。

番外編さん（後書き）

テーマは微妙な関係。テーマ通りに書けてるかどうかは別の話。補足説明として、三葉は高校時代に一度振られています。次誰にしようかな。

裏話・とある少女の追憶

“ 汝、我等が力を求めるかえ？”

“ 汝、我等の力を欲するかえ？”

耳が痛くなるほどに静まり返る空間に、光と闇が渦巻く混沌とした空間に、『音』が響く。

“ 汝、その生ある限り戦い続けるかえ？”

“ 汝、その生ある限り殺し続けるかえ？”

その『音』は、ただただ選択を迫る。

無慈悲に、無感動に、求めるがままに。

“ 汝、その生を我等に捧げると誓うかえ？”

“ 汝、その生を我等を振るうために使うと誓うかえ？”

“ 汝、その魂を我等に捧げるかえ？”

“ 汝、その魂を我等のためだけに使えるかえ？”

『音』は途切れることなく、問いかける。

そして、『少女』は、既に覚悟を済ませていた。

その“音”が問いかける事の意味も、それに応えることの意味も、全て、全て。

自らに流れる血の意味も。

早すぎる母の死の理由^{しみ}も。

この家に女として生まれたことの意味も。

“ 汝、我等を使う資格を欲するかえ？”

“ 汝、我等の一部となる資格を欲するかえ？”

だから。

「
」

その答えに、空間が震える。光と闇が渦を巻き、明滅し、溶け合い、混ざり合って、殺しあう。

“ ああ、ああ！ ならば汝、その魂をいただこう！！”

“ ああ、ああ！ ならば汝、その魂擦り切れるまで我等を使い続ける！！”

歡喜か、狂気か。その『音』は、光と闇に呼応するかのよう
いや、逆である。

その『音』に呼応するかのよう
光と闇が打ち震えたのである。

少女を中心に、空間が崩れる。

いや、そうではない。

崩れるのではなく、少女へと流れ込む。

光と闇が、陰と陽が、世界そのものが、彼女へと溶け合い、混ざり
合い、殺しあう。

人だったはずの幼い少女を、『鞘』へと作りかえるために。

痛みは、なく。

与えられるのは、不快感。

自らの存在を、『それ』の手に依って書き換えられる不快感。

自らの意味が、『それ』のためだけのものへと作りかえられる不快感。

自らが、『それ』の手で世界の一部へと墜とされたことにたいする不快感。

そして、残ったのは。

圧倒的な、力。

人類最強。惑星の守護者。

その所以。

その証明たる二振りの、刀。

光と闇を、陰と陽を、世界を支配する白と黒の刀、『不陽』と『絶夜』。

彼女は、両手で強くそれを握り締める。

その瞳にあるのは強い意志の光。

死に際の母に誓った言葉。

母の好きだった儂くも美しいこの世界。母が唯一残したこの世界。それを、今度は自分が守って見せると。

彼女は『不陽』と『絶夜』を交差するように構え。

、
まずは。

斬、と。闇を切り裂き、光の元へと空間を渡る。

視界が広がる。

右目は、世界中のありとあらゆる闇を捉え。

左目は、世界中のありとあらゆる光を捉える。

視線を眼下に向ける。足元に広がるのは、少女が住む街。

かつて、龍神の咆哮により引き裂かれてできたと言われる『神裂川』

が街を縦断するように走り、街の周囲は、多くの自然に囲まれた場所。

母との記憶が色濃く残る、世界中で彼女が最も愛する場所。

、二二二。

そこに存在する空白地点。

自分の全てと引き換えに、世界へと成った少女に見ることができないという異常。

紛れもなく、守護者たる少女にとっての障^{てき}害。

“ 汝、力を振るえ震え奮え！”

“ 汝、その魂擦り切れるまで斬れ切れ伐れ！”

『 絶夜』と『 不陽』が敵を殺せと打ち震える。

ならば、捨て置く理由などどこにもなく。

空の上。光を踏みしめ、二刀を交差させるように構える。

少女が、『 黄金』と敵対しない理由も、その時はどこにもなかった。

裏話・とある少女の追憶（後書き）

あらあら、随分可愛らしいお客さまねえ。

うふ、でも。でもでも、あなたの持つそれ。

あなたみたいな子供がもつには早すぎると思うのよあ。

それに随分と耳障りで不愉快な音。

そんなもののために、あなたみたいな綺麗な魂を捧げちゃうなんて、
うふふ、気に入らないわ

ただの『力』に小賢しい知恵なんて必要ないと思うのよねえお姉さん
はあ。
だから。

握りつぶしてあげる。

補足説明

少女は手を出してはいけない相手に手を出した模様。

その際に力の四割ほどを壊され、しかもその相手がこちらから手を出さなければ無害であったことを知る。

さっきまでのシリアスな展開はなんやってん、とやけっぱちになった少女は、命をすり減らすなんてこともなく概ね普通に暮らしていくことになるのだった。

またこの時のことが強く記憶に残り、後年、この少女はその相手に対して苦手意識を覚えることになる。

裏話・異世界より愛をこめて (前編) (前書き)

残酷な描写や下品な描写があるので苦手な方はご注意ください。

裏話・異世界より愛をこめて（前編）

【異世界生活一日目】

気が付いたら全く見知らぬ場所に立っていた。

回りを見渡せば、俺を囲むようにして槍やら剣やらをもった騎士つぽいやつらと、その奥に目が痛くなるような金ピカな衣装に身を包んだ老人たちが。

やけに高圧的な態度で喋りかけてくるのがムカついたので騎士つぽいやつらを含めて全員黙らせたあと、その場所で唯一の女であるお姫様つぽい格好をした少女に、代わりに事情説明させることにする。しかし、お願いしただけなのに小便漏らすとはなんて失礼な女だろうか。

まあそれはいいとして、どうやら俺は異世界に召喚された。しかも勇者として。役割としては、この世界の半分を支配する魔族たちの駆逐。

そして魔族の支配者たる魔王フアラクシアスの討伐。

ありきたりだが、簡潔に言えばそういうことらしい。

ふん。なんだこれは、じつにおもしろい展開じゃないか。

どうやらあの野郎に最後に掛けられた攻撃は『界』との繋がりを断ち切る効果があったようだ。俺を倒せないと踏んでの苦肉の策だったのだろうが。

まあ、奴は帰ったら絶対に殺すとして、今はこの『界』を満喫することにする。

【異世界生活二日目】

さて、昨日はいろいろ疲れていたの、王様（老人改め老害のなかでも一際不愉快だった金ピカ）と誠意を持ってお話して部屋を貸していただいた後、ぐっすり眠りについたらのだが。どうやら人が寝ている間に暗殺でも企んだのだろう。ベッドの周りには多くの騎士甲冑らしきもの（ぐちゃぐちゃになっており原型を留めていない）が転がっている。

愚かだな、と無駄に高笑いなんぞしてみた。

俺の百八ある特技の一つ、自動防衛を侮ってもらっては困る。

自動防衛とは、脳が睡眠状態にありながら殺意や敵意に肉体が自動的に反応し、迎撃する特技である。

あとの百七個は随時募集中。

まあ、それはともかく、王様含めた老害のもとへときっちりお礼しに行くことにする。

さて、城の一番奥の広い部屋、謁見の間に立てこもって何やら悪だくみしていた老害たち。

守っていた騎士たちは半殺し程度で勘弁してやるとする。彼らも仕事なのだろうし。

だがしかし老害たちには加減はしない、といたいところだが、このような汚物で手を汚すのはつきり言って不快でしかないの、命だけは勘弁してやることにする。

腕の一本や二本は全員からもらっておいたが。

で、指を一本ずつへし折りながら丁寧をお願いして隠してることを全部話させたのだが。

やつらが勇者に期待していたのは魔王討伐などではなく、この国エインデルゲードに敵対する国への抑止力。戦争に勝つためなのだ。ついでに魔族領を奪い取ることができれば、とか考えていたようだ。ほんとにただの老害だったか。

しかし、この俺ならともかく。

勇者が力を持たない一般人だったらどうするつもりだったのかと、興味本位で問い掛ければ。

どうやら聖剣なるものがあるようだ。その素晴らしさについて必死に説明する王様。それに便乗して老害A、B、Cも説明に加わる。必死の形相を浮かべて唾を飛ばす老害たちがあまりにも不愉快だったので代表して老害Cを蹴り飛ばし黙らせてから、離れた場所で座り込み震えていた妙齡の女、この国の女王らしいに話を伺うことに。

丁度いい位置にある頭を両手で優しく包み込んで、聖剣が本当に使えるものなのか聞いてみる。一瞬視線を老害に向けた後、慌ててガクンガクンと頭を縦に振る女。じゃあ嘘だったら針千本飲ますから、と微笑んでおく。

ガクンガクンと体を震わす女王は無視無視。

さて、振り返ってみれば、何やら得意げな笑みを浮かべるやつら。ム力つくので老害Cの右手を踏み砕いておく。

笑顔を引っ込めたので、聖剣がどこにあるのか尋ねてみれば、玉座の裏に王族のみが開けることが出来る隠し通路があるというので王様の頭をひつつかみ引きずっていく。

認証パスとかパスワードは必要なかったようだ。王様を壁に投げつ

けたらあっさりと開いた。

そのまま再び引きずりながら奥へと進んでいくと古びた小部屋に出た。

その中央の台座に突き立てられているのが所謂聖剣なのだろう。ゴテゴテとした無駄な装飾に金色の刀身。

そんな悪趣味な片刃の長剣である聖剣は、はつきり言って俺の趣味ではなかったのだが、足元で王様がさあさあ！と喧しく急かしてくるので一度黙らせてから、仕方なく突き立てられた聖剣を引き抜く。

そして、予想通り。

流れ込んでくる膨大な精神汚染の波。

肉体、魂の両方を根本から支配するために押し寄せる呪詛のごときそれを。

溜め息混じりに、壊す。

壊す壊す壊す壊す犯す犯す犯す侵す侵す侵す侵す

。

掌握完了、と同時にゴテゴテした装飾が崩れ、金色の刀身が剥がれ落ちていく。

現れたのは純白の剣。シンプルに、どこまでもシンプルに斬ることだけを目的とした剣。

聖剣の名に相応しい、汚れなき剣。

そして、姿を変えた聖剣と、平然と笑みを浮かべる俺にありえないことでも見たかのような視線を向ける王様。

まあ、こんなことだろうとは思っていた。

あの装飾やらは後で付けられたものなのだろう。力を得た勇者を傀儡にして都合のいいように操るために。

この剣自体は、紛れもなく『本物』なのだろう。

一度だけ見たことがある、赤白家の保有する不陽や絶夜と同様の力を感じるし。

まあいい。異世界くんだりまで来た餞別としてこれは有り難くいただくとする。

一応の機能を掌握しはしたが、まだまだ潜在能力があるみたいだから。これからどれだけの力を扱えるようになるのか楽しみだ。

もはや用もなくなつた王様は捨て置き小部屋を後にする。

謁見の間に戻れば、なにを期待していたのやら。嗜虐と期待に満ちた目を向けていた老害たちに、飛びっきりの笑顔をプレゼントしてやれば途端にわめき出すやつら。

わしに手を出せばどうなるかわかっているのか、とか。

金か女か地位か何でもくれてやる云々、とか。

貴様如き小僧などわしらのうんちゃらかんちゃら、とか。

耳障りなことこの上なかつたので、試し斬りもかねて、聖剣を一振り。

斬撃は城を輪切りに刻むだけでは満足せず、遙か彼方の雲まで引き

裂いた。

軽く振ったつもりだったが、予想以上の切れ味のようだ。

言葉を失い茫然と、いきなり現れた空を見上げる老害たち。

こうなりたくなければ俺の前で俺に許可なくその汚い口を開くなど
しっかり釘をさしておく。

さて、やることもやったので、取りあえず街にでも繰り出すことに
する。

出来れば綺麗な女性の案内が欲しいところだったが、女王様は失禁
してらっしゃるので諦めて寂しく一人で行くことにした。

【異世界生活三日目】

昨日は夜遅くまで異世界を堪能した。

何がとは言わないが実に気持ちよかったとだけ言っておく。

いくら最強の俺でも若さには敵わないのだからしょうがないだろう。

さてさて、そんな下世話な話は置いておくとして。

どうやら勇者召喚の話は城以外ではまだ知られていないようだ。

枕語りで色々聞き出したので間違いはないだろう。ただ、王城がい
きなり切り崩れたのはかなり騒ぎになってしまったようで、敵国の
仕業だとか、魔族が攻めてきたとか色々噂になっているようだ。

正直俺にはどうでもいい話なので適当に流しておいた。

そんなわけで、色々楽しんだ俺は行くあても特になかったので再び
王城に戻って一泊した。

その際にこの国は好きにはさせない云々と喧嘩ふっかけてきた騎士（他の騎士よりかなり豪華な装備だったので騎士Aと名付ける）がいたので、聖剣の調整のために襪襦雑巾になるまでつきあってやった後、王族専用の風呂に入ってから王様の部屋で就寝。

朝目が覚めたらベッドの周りに複数の死体が転がっていた。

どうやら今度は暗殺のプロを用いたようだが、ところがどっこい。俺には百八ある特技以下略。

しかし、少し見直した。あれだけ脅したというのに未だ俺を殺そうとするとは。

大した度胸である。

まあ、それはそれ、これはこれ。せっかく命だけは助けてやったというのに、自分から溝に捨てるような真似するとは。

廊下に出ると、昨日は見かけなかった御老人が三人と騎士Aを含めた八人の騎士、加えて女王様とお姫様、最後に見慣れない青年が盛大に土下座しており、その彼らの前には糞虫にされ猿轡をかまされた王様含めた老害A、B、Cがいた。

殊勝な態度だったので、取りあえず話を聞いてやることにする。

口を開いたのはこの二日間で見かけなかった青年で、彼はどうやらこの国の王子だったらしい。詳しい事情は知らんが王様によって幽閉されてたとか。難儀なことだ。

で、王子が言うには昨晚の暗殺者は王様と三公爵（老害A、B、Cのこと）の独断によるものなので他のものたちは勘弁して欲しいとのこと。

つまり、元凶は好きにしていいるから自分たちは助けて欲しい、と。実に素直で好感をもてる青年である。

まあ、俺は俺に敵対するやつには容赦するつもりはないが、それ以外は基本的にどうでもいい。

なのでこの四馬鹿にはきつちり示しをつけて死んでもらうことにする。

体内に収納していた聖剣を引き出し、一振り。ただそれだけ。

四馬鹿は胸元につけられた掠り傷を見て、安堵するかのように表情を緩めた。

俺は、それを見て呆れてしまう。どれだけ平和な頭をしてるんだこいつら。

まさか、助かるとでも思ったのかと聞いてやれば、怪訝そうな表情を浮かべ。

そして、突如悲鳴が響き渡る。

その場にいたものたちは、茫然とその光景を見ている。

ああ、違うな、王子様だけは冷徹な瞳を向けている。なかなかどうして。

これを見て冷静でいれるとは。

自分の胸元に付いた切り傷に、飲み込まれていくという異様。

失禁した王女とお姫様は、彼女たちの名誉のために無視しておくとして。

まあ、つまり俺が奴らにつけたのは当然ただの掠り傷などというわけがない。

俺が切り裂いたのはやつらの世界そのもの。

人間とか生物の存在というやつは案外単純な作りで、簡単に言えば魂という超質量の概念を蓋のない薄っぺらい箱に閉じ込めたようなものなのだよ。

あとは簡単な話。穴のあいた箱で超質量の概念なんてものを閉じ込めておけるわけがないので、中身に引きずられて自然消滅。ただそれだけの話、とわざわざ俺が説明してやったというのに、意味が分からないと畏負の目を向ける御老人と騎士たち。

なんだよ、説明のし甲斐の無いやつらだ。

これくらいなら聖剣がなくてもできなくはないが、効率という部分を見れば圧倒的に便利な城物のようだ。

ついでに、今のでどうやら聖剣自体が学習したようなので次はもっと色々なことが試せそうである。

【異世界生活六日目】

さて、今俺がどこにいるのかというと相も変わらず王城だった。

なにやら俺が王様以下三名を消滅させて以降随分待遇がよくなった。どうも、この国はもともと勢力が二つに分かれていたらしい。王様率いる旧体制派と王子様率いる新体制派。

それで、勇者召喚を強行したのはどうやら旧体制派だったらしく、そんな彼らが勇者の怒りを買ったせいで国を滅ぼしかねないような事態になっている。なら、彼らに責任を取らせようということ、ついでに旧体制派も解体。新体制派は見事勝利を収めたのだとか。政治の話はよくわからんからちゃんと聞いて無かったのだが、おおよそそんな感じだったと思う。

そこで、勇者であるところの俺の扱いに関して。

王子様直々の言明により、王城のVIPな客人扱いとなった。

まあ、扱いに困った末の判断なのだろうけど。

あと、勇者という事実は隠蔽されることになった。

俺としてはどちらでもいいことだし、王子様からすれば勇者なんていう力を誇示するだけのモノはメリットよりもデメリットのほうが多いと考えたからのよう。

王様を消した翌日に王子様から、そう言っ提案されたのだった。

で、あれから二日間。せっかくのVIP待遇ということなのでエンジョイしてみた。

いや、実に優雅に過ごすことができたね。

飯は豪華だし、何をするにもメイドさんが手伝ってくれるし（特にお風呂が愉しかった）、夜は夜で超高級娼婦とか宛がってくれるし。元の世界では一人暮らしだったから、何からナニまでやってくれるというのは実に楽しかった。

と、そんな風に過ごすこと三日目。やはり俺のような最強を冠する男に平和なんてぬるま湯は似合わなかったのだろうな。

朝早く、部屋に駆けこんできた王子様が告げた言葉に俺はにやりと笑みを返す。

隣国ターネブラが攻め込んできた、と。
召喚した勇者をひきつれて。

これだから人生というのは愉しくて楽しくてしょうがないのだ。
せいぜい、俺の退屈を一時でも紛らわせてくれることを願っているぞ、勇者様。

最強たる、この神山英雄に相応しい強者たらんことをな。

裏話・異世界より愛をこめて（前編）（後書き）

全編一人称でお送りしました。

本編では出番のなかったお父さんの過去話です。

予定では二千字程度でまとめるつもりが、長くなったので分けます。ここまで読んでいただきありがとうございます。それではまた次回。

裏話・異世界より愛をこめて（中編）

【異世界生活六日目】

今日も今日とて王城でだらだろとしている俺。

王子様たちは戦争の準備で忙しいみたいだが。

わざわざ俺のところに来てくれるくらいだから、そのうちやら国を撃退してほしいという話でもしに来たのかと思えば。これは国と国の問題だから『ただの客人』は戦争に手を出すとそうのたまったのだ。

面白い男だ。俺の力を間近で見ているのに、最も簡単に戦争を終わらせることができる力が足元にあるのに、それに頼らない。あくまで、自分の、新しく生まれ変わったこの国が勝つことに意味があるのだと。

まあ、面白い男ではある、が。

はいそうですかと頷いてやるわけにはいかない。なにせこっちはせっかくなる気になってるのだから。この気持ちを吐き出す場所を奪われるなど、俺にとっては論外だ。

ということを書いてみれば王子様はあっさりと頷き返し。

だから、勇者を俺に相手してほしいという。国ではなく勇者を。

元来勇者とは、この世界の守護者としての役割を与えられたものを指す言葉なのだという。

決して、魔族を駆逐するためでも、隣国を攻め滅ぼすためでも、自

らの欲を満たすものでもない。それが、いつから変わったのか。勇者という存在の在り方が変わっていったのかは定かではないが、それは最近の話などではなく遠い昔の話。要するに人間の欲深さってのはどれだけ時が流れようと変わらないのだからな。

とまれ、勇者の在り方は人の手に依って歪められてしまったが、しかし勇者としての力はまた別だった。なにせ時の権力者たちが欲したのは、その力なのだから。

そして時代は幾度も巡り、その歴史の中で、何度も勇者が生まれ、時には人間以外を認めないという愚かなエゴのために、時には隣国を攻め滅ぼすための戦争の道具に。自らの欲望を満たすためだけに力は振るわれた。

その力は、千の軍に匹敵するといわれており、現実、多大なる犠牲なくして止めること叶わぬ存在。それが勇者なのだという。

千の軍に匹敵って、正直その程度なのかと思わなくはないが、まあいい。俺のような例外もいるから当てにならないだろう。

それより、ほかにも勇者がいるってことは、俺の持つ聖剣と同様のものが複数あるということか。そうなってくると、正直話が変わってくるのだが。

と尋ねてみればそれはないということらしい。

この国の王家に代々伝えられている話で、オリジナルの聖剣は俺が持つてるやつのみで、この世界に存在する他の聖剣（俺のやつを省いて二本あるらしい）はオリジナルを元にした贋作なのだという。

とはいえ、その力はどちらも侮りがたく、オリジナルに匹敵する力を持っていたのだという。

持っていた、と過去形で王子様が語ったのは、俺が持つ聖剣が最早別物になってしまっているからなのだ。

見た目もその力も、文献に記されてきたものとは程遠いのだそうだ。

まあ、ひとつの世界そのものである宝具がいくつもあるわけではないというのも当然の話か。

正直今の話を聞いて、勇者とやらにはあまり期待できそうになくなった。

たかが人の手に作られた、しかも、あの本来の千分の一程度の力しかなかった状態の聖剣の贗作だというのだから、がっかり感が拭えない。

ほかにやることもないから、ここまで来たなら御褒美に相手ぐらいはしてやるつもりだ。

というわけで、こちらから出迎えに行くような気力も湧かず、ぐだぐだと敵さんがやってくるのを待っているわけなのだが、ただでさえ低いモチベーションが、そのナンチャラ国が到着するのは早くても二日後だというんだから。正直萎える。

そろそろ、この国を出ていくことも考えくかな。

【異世界生活七日目】

今日もだらだらと過ごしている。

うんたら国はどうやらまだ到着しないようだ。

かー、やることねー。

あまりにも暇だったので部屋の掃除にやってきたメイドの女の子を捕まえて一日中遊んだ。

【異世界生活八日目】

ようやく、か。

ウンチャラ国軍が国境を越えてきたとの報告にやってきた王子様を、
三点倒立したまま出迎える俺。

三点倒立に意味はない。あえて言うなら暇だったからだ。
だからそんな憐れむような目を向けるな王子、潰されたいのか？

わかればいい。

さあ、それじゃあ早速勇者とやらを拝みに行くとするか。時は金なりだ。

あ？ 何、少し待てだど？

なぜ待つ必要がある。すぐそこに倒すべき敵がいて、おまえ等には倒すべき理由があるのだろうか？

なら見敵必殺、悪即斬の精神で行くのが常識だろ。

はあ？

うんたら国とは反対側のジユブナイル帝国も攻めてきた？

王子様人気者だねえ。

で？

ジユブなんとか帝国も勇者連れてきた？

国境挟んで三竦みの状態ねえ。ああ、別に詳しい話とかしなくないから、興味ないし。

ああもうはいはい。

要するに手を出さなきゃいいんだろ。

わかったわかった大人しくしといてるよ。

……今日はな。

【異世界生活九日目】

異世界在住の皆さんおはようございます、だ。

ふむ、今日もいい天気だな。絶好の勇者狩り日和だな。

王子様との約束？

あんなもんわざわざ守ってやる義理なんて俺にはないな。

そもそもなんの拘束力もない口約束だしな。

この国の行く末なんてものはいわずもがな。

ほか二つが攻めてきた事情なんてものもどつでもいいこと。

俺は俺のためだけに。俺がやりたいようにやらしてもらおう。

で、まずやってきたのはウンチャラ国の方。

おーおー、騒いでるなあ。

でも生憎雑兵に用はないんだよ。とつとつと勇者を呼んできてくれるかな？ と懇切丁寧にお願いすること数十人。

ようやく現れたのは白銀色の鎧を身に付けた口は偉そうな小僧。

え？まさかこれが勇者？どう見ても中学生くらいにしかみえないけど。

うわあ、めっちゃくちゃ勇者って名乗ってるし。

ああ、しかし、しかしだ。

その全てにおいて自分が最優だと思いこんでる蔑んだ目。

実に俺の好みだ。

一分一秒の猶予もなく潰したくなる

。

いや、おい。

一撃かよ。

遊びが少なかったとはいえ。 たった一撃で碎けるとか、もはや聖剣かっこわらいだな。

かませ犬にもなれやしない弱さだな小僧、と頭を踏みつけて地面にキスさせる。

ああ、ああ、喚くな。

生きてるだけ運が良かっただろ？

現実なんてこんなもんだよ、と慰めてやったというのにゴチャゴチャと喚く元勇者。

鬱陶しいので顎を踏み砕く。
教育的指導だ。これで少しは現実の残酷さを知ることができた
らうぞ。

で、周りを見渡せば時を止めたように固まる兵士たち。

まあ、中身が小僧でも一応は勇者で最高戦力だったんだろう。

それがゴミくずのように一蹴されれば思考を放棄したくもなるだ
らうけど、それは駄目だろ。敵を目の前にしてそんなに無防備さら
したら。

右手で聖剣を横に凧ぐ。

圧縮された空間を打ち出すように。

俺のイメージ通りに生まれた不可視の圧力が、漸く我に返った兵士
たちを呑み込み押し流す。

おー、半壊ってところかな。

一緒に元勇者も吹き飛ばしたけど、まあ運が良ければ死んではいな
いだろ。

さて、残るはジュなんたら帝国さんだな。方向は確かあっちだった
か。距離にして大体三步半ってところか。

掛け声はホップ、ホップ、ステップ、ジャンプ。

着地と同時に衝撃で地面が砕けてしまったが、どうやら間違えるこ
となく敵陣中央に降りることに成功。

今度は間抜けばかりではなかったようで、俺の姿を確認するやいな
や、武器をもって包囲する兵士諸君。

喚く有象無象の声を無視して、勇者の気配を探す。

先ほどの小僧が持っていた聖剣かっこわらいの気配は覚えているので、それに近いものを。

気配はすぐに見つかったのだが。

ふん、俺の後ろを取るとは貴様何奴つと、勇者に向けて言うつもりが反射的にバックブローを叩きこんでしまい吹っ飛ばしてしまった。決め台詞は虚空へと消えていく。

なるほど、強制的に滑った空気に持ち込む精神的な攻撃。

屑野郎が、許しちゃおけねえな。お前みたいな卑怯なやつが俺は一番嫌いなんだよ。

地面に這いつくばり血反吐を吐き散らす勇者の頭を掴み持ち上げる。

ん、これは角？

つてことは、お前まさか断花の関係者か？

断花という言葉に反応するように持っていた聖剣で斬りつけようとする勇者を放り投げて距離を取る。

なにやら大分興奮しているようだな。なにになに？

ああ、本家じゃなくて分家の人間なのか、なるほどね。

本家の人間だったらややこしいことになるんだけど、分家の子鬼風情ならどうでもいいか。

もう、死んでよし。

【異世界生活十日目】

昨日は勢い余ってジユなんたら帝国を全壊させてしまったが、まあ過ぎたことはどうでもいい。

わめく王子様には静かになってもらい、王城で一晩過ごした俺。

勇者とやらは存外大したこともなく、満足するには至らなかったの
で、今度は勇者らしく魔王退治にでも出かけることにしようと思う。
大陸の半分を力で支配する魔族の王。
少しは期待できそうだ。

裏話・異世界より愛をこめて（中編）（後書き）

本編で使われることの無かった設定。

【うんたら国勇者】

火剣 明（15）

日本出身の中学三年生。ゆとり世代。

口車に乗せられ簡単に聖剣を手に取り、洗脳される。

実力は、国内最強といわれていた聖騎士団団長を赤子を捻るかのごとく倒すことができるくらい。

うんたら国は資源に乏しい国内情勢を憂いており、都合のよいことに、資源の豊富な隣国でクーデターが起きたため、そのごたごたしている隙を狙い攻めてきたとか。

【ジュなんちゃら帝国勇者】

絶花 禅（24）

断花家の末端にあたる分家出身。無職。英雄が言うには鬼らしい。しかも子鬼。

本編のあの人と関係があるかは謎である。

人外であるため召喚された当初から帝国内では最強の立場にあったが、いかんせん馬鹿だったため、宰相の口車に乗せられ、あと本家にたいするコンプレックスとかなんとかが加わり、力を求めて聖剣を手に取ってしまい操り人形に。

その実力は一騎当千も可能とするほどだとかで、調子に乗った帝国隣国にうんたら国が攻め入るといふ情報を手に入れるやいなや、圧倒的武力で二国とも落としてしまおうと攻めることに。

戦力をわかりやすく数値で表すと

一般人は10。聖騎士団長は100。ゆとり勇者は250。子鬼勇

者は500。神山英雄は6000。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3072o/>

（前世の）父さん母さん。息子はこっちでも元気にやっています

2011年10月1日07時41分発行